

仙台市文化財調査報告書第244集

宮城県仙台市

# 郡山遺跡 XX

——平成11年度発掘調査概報——



2000. 3

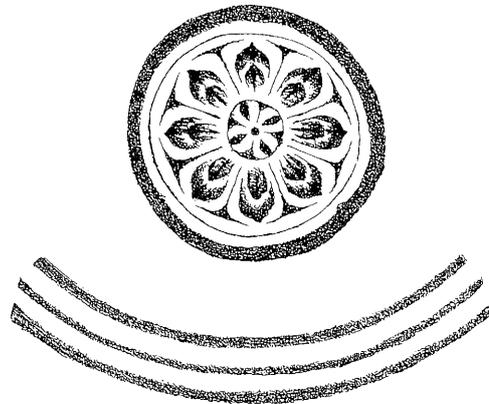
仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第244集

宮城県仙台市

# 郡山遺跡 XX

——平成11年度発掘調査概報——

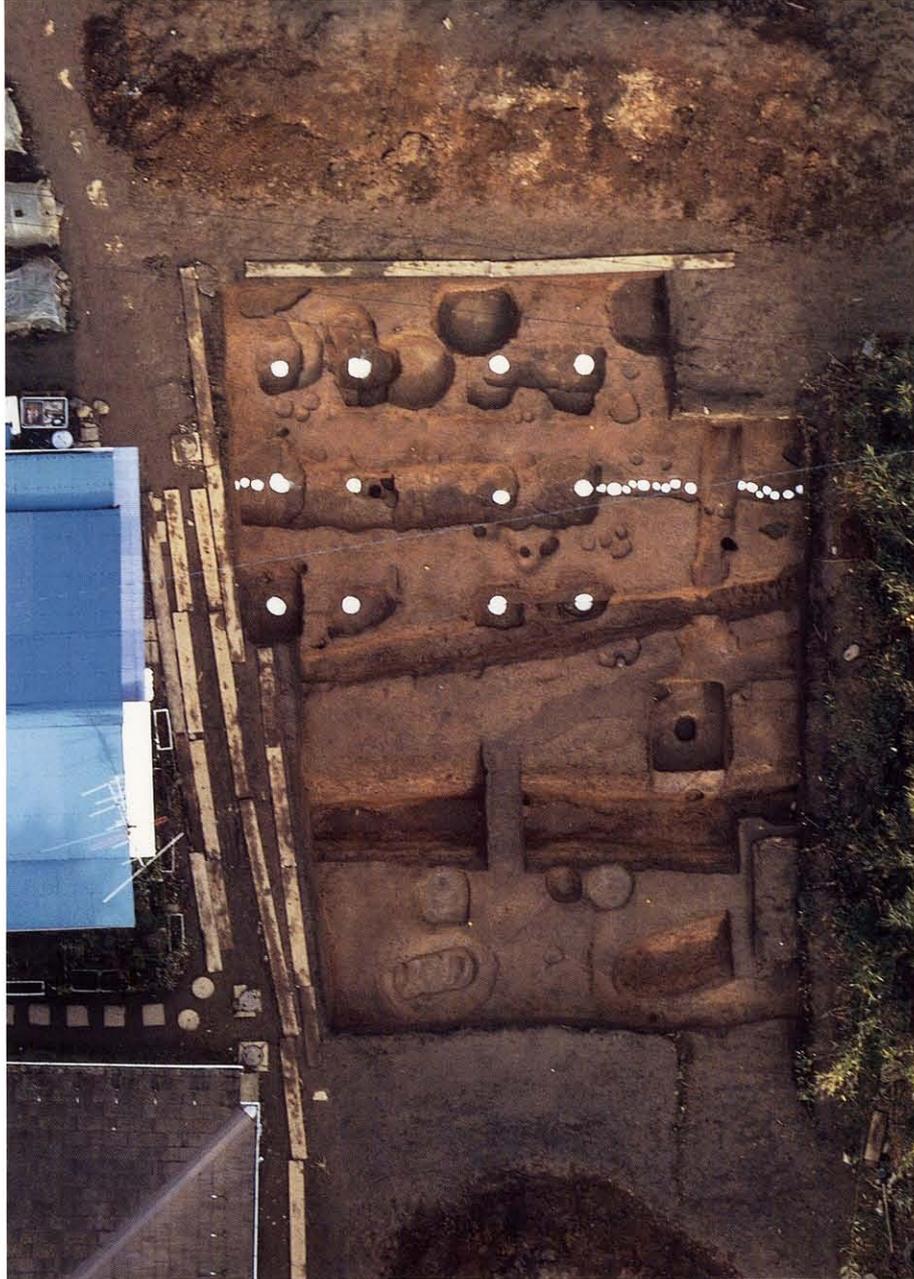


2000.3

仙台市教育委員会



卷頭図版1 郡山廃寺全景



巻頭図版2 第128次調査A区全景

# 序 文

郡山遺跡の範囲確認調査も本年度は20年目を迎え、毎年数々の成果を積みあげ、東北の古代史解明に一石を投じております。このことは古代史・考古学等の識者のみならず、市民の皆様方にも御承知のことと存じます。

幻の城柵として的一端をあらわした昭和54年以来、継続的に実施してまいりました発掘調査により古代の文献に記録のない“幻の城柵”はまさに“甦る城柵”として、私たちの前にその姿を現したのです。辺境とされてきた当地方の歴史観を一変した我が国最古の地方官衙・郡山遺跡の発見は日本の考古学・古代史学界に大きな反響を巻き起こしたものと確信しております。

本年度は郡山廃寺の範囲を明らかにすることを主目的に発掘調査を実施いたしました。その結果、これまで不明であった寺院の南門跡と南辺を発見し、成果が上がったものと考えております。ここに調査の記録を余すところなく報告、公開するものです。

市街化への動きが著しい郡山地区にあって、文化財の保存につきましてもより一層緊密な調整を必要とする状況にあります。そのような中において、継続的に調査を実施できますことは、ひとえに土地所有者の方々、地元町内会の皆様方の多くのご協力と御支援の賜物と感謝申し上げる次第であります。

先人の残した貴重な文化遺産をつぎの世代に継承していくことは、行政によってのみ成し得るものではなく、市民一人一人の先人への深い理解と子孫への広い展望なくしては成し得ないものであります。

これからも文化財保護への深いご理解と御協力をお願いするとともに、本書が文化財愛護精神高揚の一助となりますことを願ってやみません。

平成12年3月

仙台市教育委員会

教育長 小 松 弥 生

# 例 言

1. 本書は郡山遺跡の平成11年度範囲確認調査の概報である。
2. 本調査は国庫補助事業である。
3. 本概報は調査の速報を目的とし、作成にあたり次のとおり分担した。

本文執筆 長島榮一 I、II、III、IV、VIII 3、IX、X

松本知彦 IV 3、V、VI、VII、VIII 1、IX

篠原信彦 VIII 2

遺構トレース 菅井百合子、岡まり子、大友広美

遺物実測 松本、伊勢多賀子、大友、鈴木由美、黒田照子

遺物トレース 菅井、岡、鈴木、伊勢、大友、黒田

遺構写真撮影 長島、松本、篠原、工藤信一郎

遺物写真撮影 長島、松本

遺物補修復元 赤井沢千代子

図版作成 長島、松本、菅井、吉田りつ子、大友、岡

写真図版作成 長島、吉田

編集は長島、松本がこれにあたった。

4. 遺構図の平面位置図は相対座標で、座標原点は任意に設置したNo.1原点(X=0、Y=0)とし、高さは標高値で記した。
5. 文中で記した方位角は真北線を基準としている。
6. 遺構略号は次のとおりで、全遺構に通し番号を付した。

SA 柱列などの塀跡	SE 井戸跡	SX その他の遺構
SB 建物跡	SI 竪穴住居跡・竪穴遺構	P ピット・小柱穴
SD 溝跡	SK 土坑	

7. 遺物略号は次のとおりで、各々種別毎に番号を付した。

A 縄文土器	F 丸瓦・軒丸瓦	K 石製品
B 弥生土器	G 平瓦・軒平瓦	L 木製品
C 土師器(ロクロ不使用)	H 鴟尾	N 金属製品
D 土師器(ロクロ使用)	I 陶器	P 土製品
E 須恵器	J 磁器	

8. 建物跡模式図中の記号は以下の基準により図示した。

●=柱痕跡の検出されたもの

○=掘り方のみ検出されたもの

○=他遺構との重複により検出されないもの

9. 遺物実測図の網スクリーン張り込みは黒色処理を示している。
10. 本概報の土色については「新版標準土色帳」(古山・佐藤:1970)を使用した。
11. 本概報中の掘立柱建物跡の記載の中で「柱痕跡は21cmの円形で…」とあるものは、柱痕跡の直径が21cmの意である。

# 目 次

序 文	
例 言	
I はじめに	1
II 調査計画と実績	2
III 第125次発掘調査	
1. 調査経過	4
2. 発見遺構・出土遺物	4
3. まとめ	6
IV 第126次・第128次発掘調査	
1. 調査経過	7
2. 発見遺構・出土遺物	8
(1) 第126次調査   (2) 第128次調査	
3. まとめ	21
V 第127次発掘調査	
1. 調査経過	29
2. 発見遺構・出土遺物	29
3. まとめ	31
VI 第129次発掘調査	
1. 調査経過	33
2. 発見遺構・出土遺物	33
3. まとめ	35
VII 第130次発掘調査	
1. 調査経過	36
2. 発見遺構・出土遺物	36
3. まとめ	36
VIII 第131次発掘調査	
1. 調査経過	38
2. 発見遺構・出土遺物	38
3. まとめ	41
IX 総 括	42
調査成果の普及と関連活動	45
X 第4次5カ年調査の総括	46
付章 SEM-EDSによる郡山遺跡銅関連出土遺物の分析結果	
国立歴史民族博物館 斎藤 努・今村峯雄	55
写真図版	65

# I はじめに

平成11年度は郡山遺跡範囲確認調査第4次5ヵ年の5年次にあたり、下記の体制で臨んだ。

調査主体 仙台市教育委員会  
調査担当 仙台市教育委員会生涯学習部文化財課  
文化財課 課長 大越裕光  
管理係 係長 今井京子  
主事 坂本和男  
主事 菊地順子  
調査第一係 係長 田中則和  
主査 木村浩二  
主任 長島榮一  
文化財教諭 松本知彦  
調査第二係 係長 結城慎一  
主査 篠原信彦  
主事 工藤信一郎

発掘調査、整理を適正に実施するため調査指導委員会を設置し、委員を委嘱した。

委員長 佐藤 巧（東北大学工学部名誉教授 建築史）  
副委員長 工藤雅樹（福島大学行政社会学部教授 考古学）  
岡田茂弘（東北歴史博物館館長 考古学）  
桑原滋郎（宮城県教育庁参事兼東北歴史博物館学芸部長 考古学）  
白鳥良一（宮城県多賀城跡調査研究所長 考古学）  
須藤 隆（東北大学文学部教授 考古学）  
今泉隆雄（東北大学文学部教授 古代史）

発掘調査及び遺物整理にあたり、次の方々から御協力をいただいた。

地権者 佐々木昭一、佐藤正範、佐藤美智江、小野寺亨、真壁慶子、東北電力株式会社宮城支店、東北発電工業株式会社仙台事業所、斎藤長也、庄子たか子、菅原一雄  
調査参加者 赤井沢サダ子、赤井沢千代子、伊勢多賀子、伊勢みつ、伊藤貞子、大友節子、大友広美、岡まり子、尾形陽子、小嶋登喜子、小池房子、黒田照子、佐々木直子、菅井百合子、鈴木由美、高橋ヨシ子、牧かね子、吉田りつ子

さらに下記の諸機関の方々から適切な御教示をいただいた。

国立歴史民俗博物館 今村峯雄、齋藤努、奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部 松村恵司、小池伸彦、平城宮発掘調査部 玉田芳英、次山 淳、東北歴史博物館 手塚均、及川規、三重大学人文学教授 山中章、東北大学大学院工学研究科助手 吉田歆、京都市埋蔵文化財研究所 平尾政幸、百瀬正恒、千葉県教育庁文化課 福田明美

## II 調査計画と実績

平成11年度の発掘調査は、郡山遺跡発掘調査の第4次5カ年計画における第5年次目である。当初の第4次5カ年計画では方四町II期官衙内部の実態を明らかにするための調査を実施する予定であったが、昨年の第4年次目の調査で郡山廃寺の南辺が確認されず、これまでの想定より南に寺域が拡大されることが明らかになったため、昨年度に引き続き郡山廃寺の南部での追加調査を主目的とした。今年度は国庫補助事業である『郡山遺跡緊急範囲確認調査』として発掘調査を実施し、発掘調査費は次のような内示（総計費2,100万円、国庫補助金額1,050万円）をうけた。また仙台市内に分布する重要遺跡の調査やそれらにおける個人住宅などの小規模開発に伴う発掘調査は、「仙台平野の遺跡群」として予算を按分してこれまで実施してきたが、今回は「仙台平野の遺跡群」に該当する発掘調査が郡山遺跡内のみの予定であったため、調査成果は「郡山遺跡XX－平成11年度発掘調査概報－」に合わせて掲載することとし、「仙台平野の遺跡群」としての報告は刊行しないこととした。それらを踏まえ以下のような実施計画を立案した。

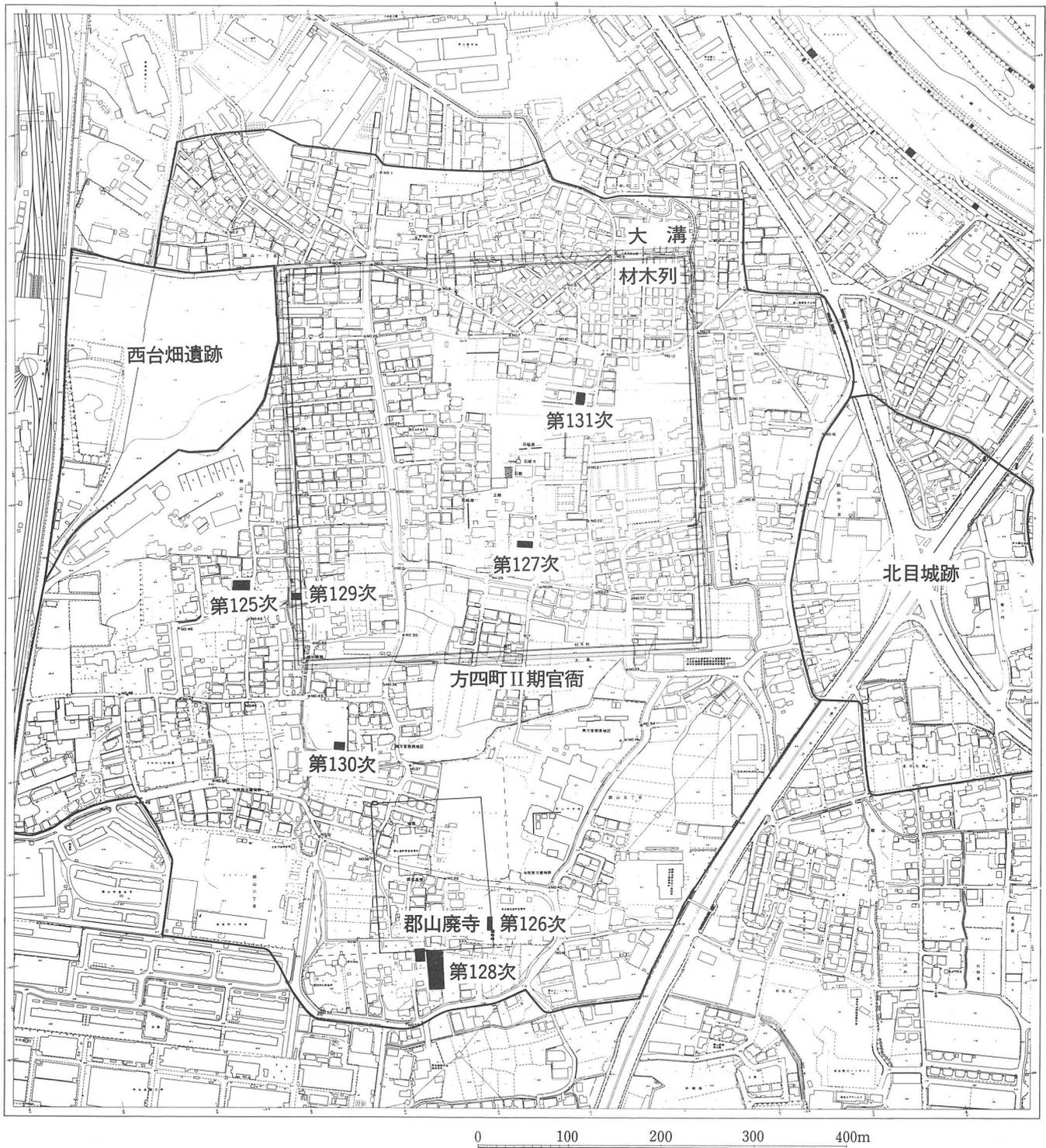
表1 発掘調査計画表

調査回数	調査地区	調査予定面積	調査予定期間	調査原因
第125次	I期官衙西部	60m <sup>2</sup>	5月	個人住宅建替え
第126次	郡山廃寺東辺・南辺	50m <sup>2</sup>	5、6月	範囲確認調査
第127次	方四町II期官衙中枢部	100m <sup>2</sup>	7月、8月	範囲確認調査
第128次	郡山廃寺南辺	700m <sup>2</sup>	8月～11月	範囲確認調査

なお計画立案後に個人住宅の建替えに伴った発掘調査の実施が必要になったため、第129次～第131次調査を追加した。したがって本年度の調査概報では第125次～第131次調査までの7地区の報告を掲載する。

第2 発掘調査実績表

調査回数	調査地区	調査予定面積	調査期間
第125次	I期官衙西部	60m <sup>2</sup>	5月17日～6月1日
第126次	郡山廃寺東辺・南辺	70m <sup>2</sup>	5月31日～6月11日
第127次	方四町II期官衙中枢部	75m <sup>2</sup>	6月14日～8月2日
第128次	郡山廃寺南辺	700m <sup>2</sup>	8月23日～12月17日
第129次	方四町II期官衙外郭西辺	70m <sup>2</sup>	7月7日～8月11日
第130次	I期官衙南部	25m <sup>2</sup>	9月13日～10月12日
第131次	方四町II期官衙内東部	15m <sup>2</sup>	11月30日～12月17日



第1図 郡山遺跡全体図

### III 第125次発掘調査

#### 1. 調査経過

第125次調査は仙台市太白区郡山2丁目13-2佐々木昭市氏より、同地において住宅の解体、新築に伴う発掘届が平成11年4月8日付けで提出された。住宅の基礎が遺構の検出面より深く、遺構を損なうため発掘調査を実施した。

調査地点は方四町II期官衙の西方で、かつI期官衙内の西部に位置している。これまでこの周辺では昭和57年の第27次調査区や平成6年の第103次調査区がある。第27次調査区は今回の調査区から西に50m程離れた地点で、長方形の透かし穴が連続した円面硯が出土している。また南西に50m程離れた第103次調査区からはI期官衙の西辺となる区画溝や、I期官衙を構成すると考えられる竪穴住居跡などが発見されている。とくに推定されるI期官衙の西辺に近く、I期官衙に関連する遺構、遺物の発見が予想された。

調査地は宅地となっており、調査開始前までは住宅が建っていた。新たに住宅の建つ部分を対象に東西7m、南北6.5mの調査区を設定し、平成11年5月17日から表土排除を実施した。現況より深さ0.8~0.9mで遺構を検出し、平成11年6月1日に調査を終了した。

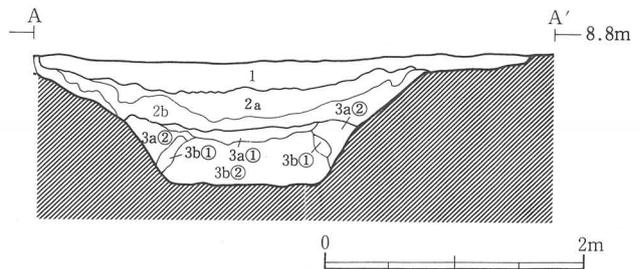
#### 2. 発見遺構・出土遺物

今回の調査で発見された遺構は、溝跡1条、土坑1基、ピットならびに上層での水田遺構である。これらのうち溝跡、土坑などは基本層位IV層上面で検出し、基本層位III層が水田の耕作土となっている。

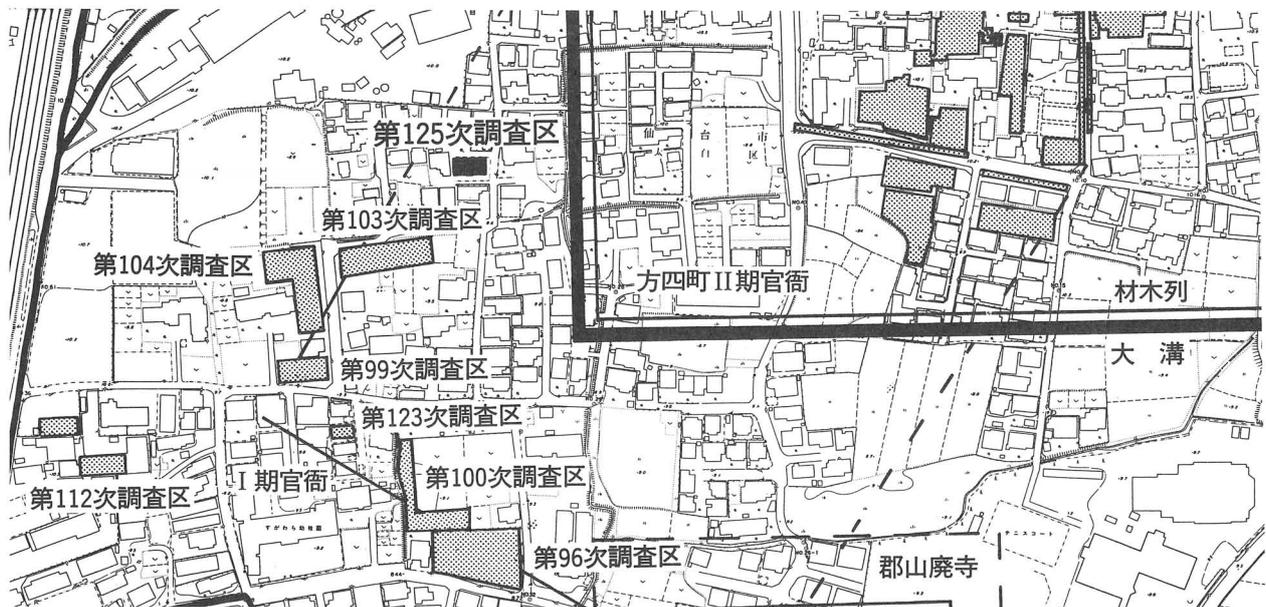
**SD1826溝跡** 上幅450~460cm、底面幅100~115cm以上、深さ90~100cm、断面形は逆台形の溝跡である。壁は深さ20cmの所で段を有し、それより上方ではきわめて緩やかに、下方では傾斜をもって直線的に立ち上がっている。底面はほぼ平坦である。方向はN-

1°-Eで、検出した総長は6.5mである。堆積土は3層に大別され、第1層は黒褐色粘土、第2層は3種類の土が混じり合った層、第3層は黒褐色、灰色粘土などであるが底面付近は部分的にグライ化を帯びている。

遺物は堆積土中から、土師器坏、高坏、甕、須恵器甕、盤の小片と不明鉄製品、樹皮等が出土し、とくに第3a層

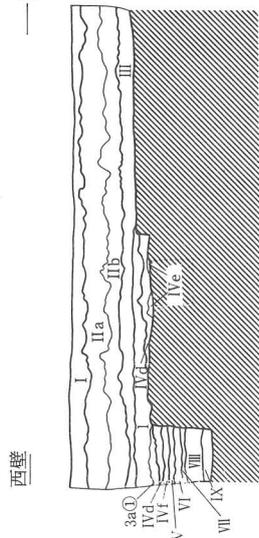


第2図 SD1826溝跡断面図

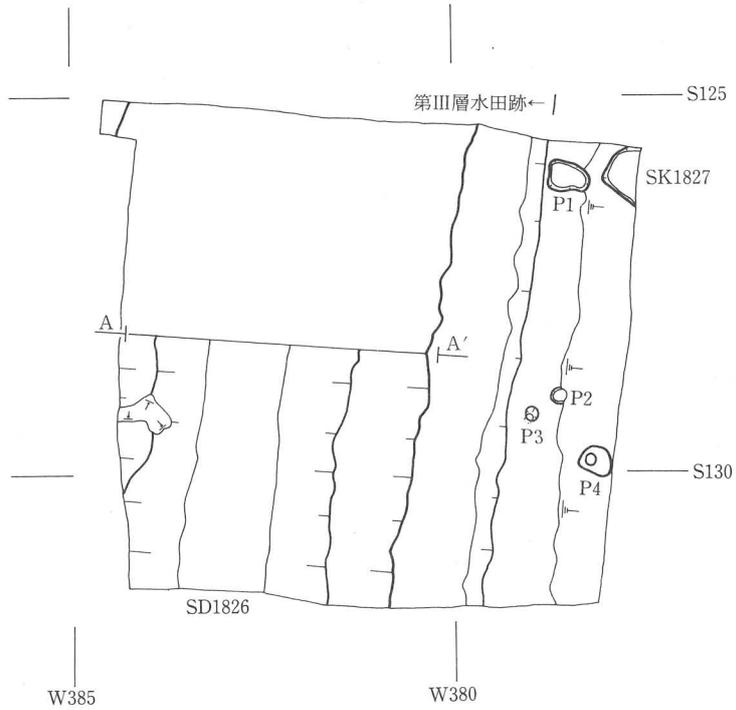


第3図 第125次調査区位置図

—10.00m



西壁

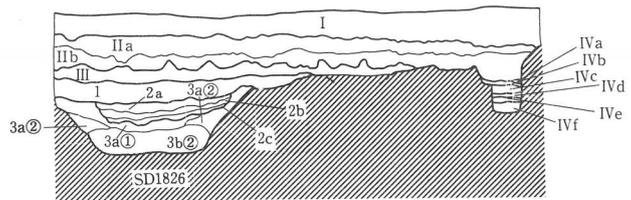


W385

W380

南壁

—10.00m



遺構名	層位	土色	土性	備考
基本層位	I			盛土および攪乱
	IIa	10YR3/3 暗褐色	シルト	
	IIb	10YR3/4 暗褐色	シルト	IIb層中にIII層土が小さなブロックで混合する
	III	10YR4/2 灰黄褐色	粘土質シルト	III層全体に細かく霏降り状に酸化鉄を含む
	IVa	10YR5/8 黄褐色	粘土	全体的に明褐色土が細かく粒状に混合する
	IVb	10YR5/8 黄褐色	粘土	
	IVc	10YR5/8 黄褐色	粘土	
	IVd	10YR6/3 にぶい黄褐色	粘土	全体的に明褐色粒が細かく粒状に混合する
	IVe	7.5YR5/8 明褐色	粘土	
	IVf	10YR6/3 にぶい黄褐色	粘土	酸化鉄が粒状に、灰黄褐色土が筋状に混合する
	V	10YR2/1 黒色	粘土	層中に細かく明褐色土やにぶい黄褐色土を含む
	VI	10YR6/3 にぶい黄褐色	粘土	全体的に酸化鉄を細かく含む
VII	10YR6/1 褐灰色	粘土	酸化鉄を含む	
VIII	10YR6/2 灰黄褐色	粘土		
IX	10YR5/2 灰黄褐色	粘土	グライ化進む	
SD1826	1	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	全体的に酸化鉄を細かく含む
	2a	10YR6/8 明黄褐色	粘土質シルト	
		10YR3/1 黒褐色	粘土	混合する層である・全体的に酸化鉄を細かく含む
	2b	10YR5/3 にぶい黄褐色土	粘土	
		10YR3/1 黒褐色	粘土	部分的ににぶい黄褐色土を含む
	2c	10YR5/3 にぶい黄褐色土	粘土	全体的に酸化鉄を細かく粒状に含む
	3a①	10YR3/1 黒褐色	粘土	
	3a②	10YR4/1 褐灰色	粘土	全体的に粒状ににぶい黄褐色土を含む。酸化鉄を細かく含む
3b①	5Y4/1 灰色	粘土	部分的に粒状ににぶい黄褐色土を含む	
3b②	5Y3/1 オリーブ黒	粘土	部分的に粒状ににぶい黄褐色土を含む。	

第4図 第125次調査区平・断面図

中からは凸面が縄叩き、凹面が布目、模骨痕の顕著な平瓦片が、底面からはロクロ不使用の土師器甕片が出土している。

Ⅲ層水田遺構に切られている。

**SK1827土坑** 東西55cm以上、南北75cm以上の土坑で、深さは34cm程である。底面はほぼ平坦で、壁は傾斜を持って直線的に立ち上がる。調査区の東北隅で遺構の一部を検出したため、形状や方向など詳細は明らかではない。

遺物は出土しなかった。

調査区の西端は攪乱が深く、上面が削平されている。

**Ⅲ層水田跡** 基本層位第Ⅲ層を耕作土とし、調査区の西端から1.5mで途切れている。やや底面が高まって途切れていることから、耕作域の東端として畦畔の痕跡の可能性はある。

遺物は土師器坏、高坏、須恵器甕、瓦の小片が少量出土している。

なおこれらの他にP4の掘り方埋め土から、赤焼き土器坏の小片が1点出土している。

### 3. まとめ

この調査区ではⅠ期官衙関連の遺構の発見を想定していたが、そのような遺構は発見されなかった。ただしSD1826溝跡については、上幅や深さなどが方四町Ⅱ期官衙の外角大溝と同等の規模を有し、狭い範囲ではあるが溝跡の中からは古代の時期の遺物しか出土していない。さらにこの溝跡の上層で検出された水田跡からも古代の遺構より新しくなる時期の遺物は出土しなかった。また遺構の方向もほぼ真北方向であり、方四町Ⅱ期官衙の西辺大溝よりは60m程離れて平行していることとなる。よってSD1826溝跡が官衙の時期の遺構となる可能性もある。

近年、方四町Ⅱ期官衙の周辺では、外郭大溝と同様の規模の溝跡が平行して発見されつつある(註1)。断片的な調査のため、溝跡の延びている距離や出土した遺物の年代などで不明な点があるが、これらの溝跡が方四町Ⅱ期官衙の周辺の区画や道路状遺構の一部となっている可能性もあり、調査成果の蓄積を待ち検討して行きたい。

註1 第65次調査 SD984溝跡 仙台市文化財調査報告書第156集 郡山遺跡－第65次発掘調査報告書－ P162  
第94次調査 SD476溝跡 仙台市文化財調査報告書第177集 郡山遺跡－第94次発掘調査報告書－ P15  
第124次調査 SD1860溝跡 平成10年度宮城県遺跡発表会発表要旨 郡山遺跡 P32

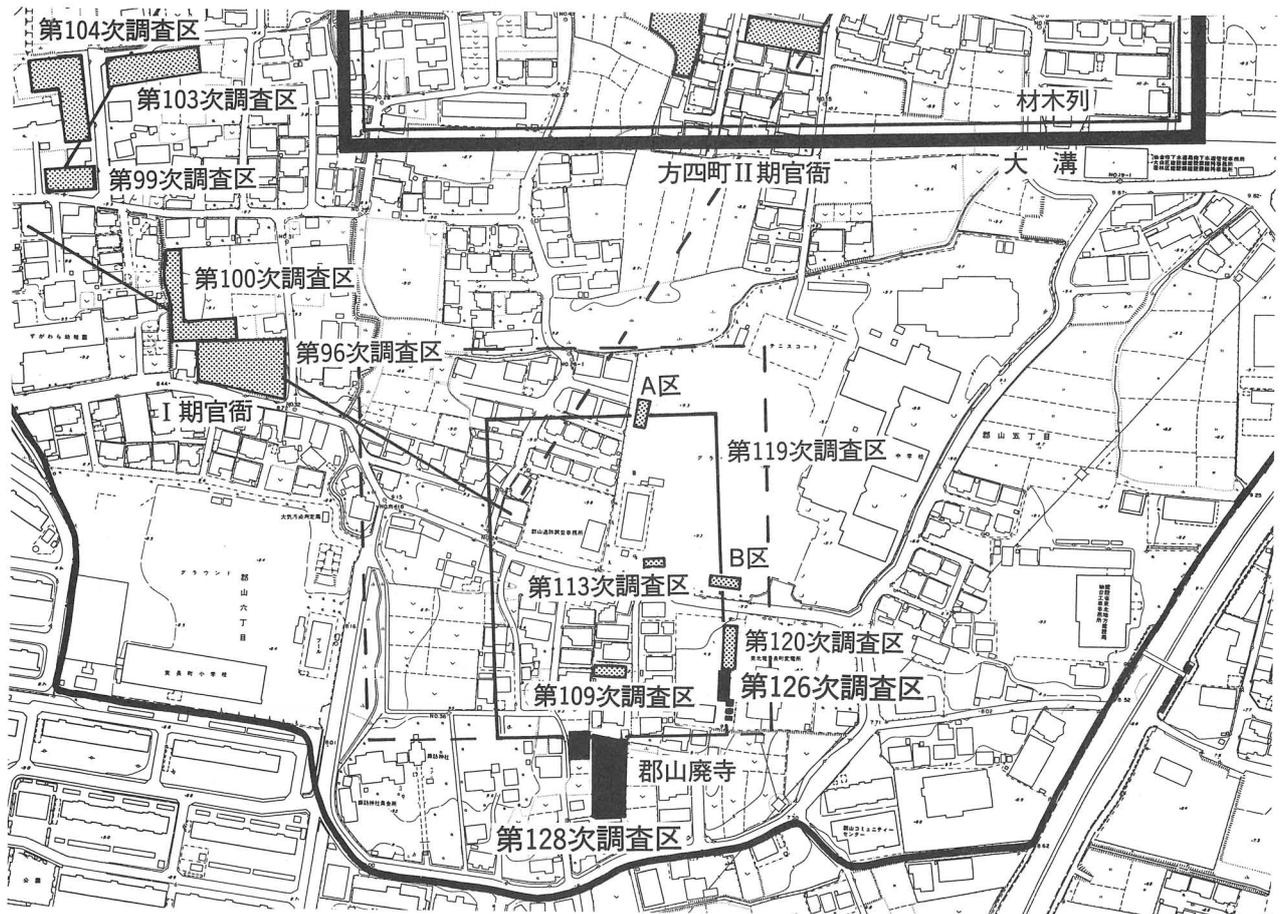
## IV 第126次・第128次発掘調査

### 1. 調査経過

第126次、第128次調査は、方四町II期官衙南方に位置する郡山廃寺の範囲を明らかにするための調査である。郡山廃寺の範囲については、平成10年度の第119次、第120次発掘調査によって寺院の外側を巡る小規模な木材列SA1775、1785を検出し、これまで想定していた北辺と東辺の再確認をすることができた。しかし東辺の南端部については、北辺から南へ132m以上検出してもさらに南に延長していることが明らかとなったため、SA1785材木列の延長部でさらに第126次調査区を、さらに東辺が西に屈曲し南辺が通過すると推定される遺跡南部に第128次調査区を設定した。

第126次調査区は昨年のSA1785材木列の延長上に東西3.5m、南北14mの調査区を設定し、平成11年5月31日より表土排除を実施した。調査した結果は攪乱により遺存状況は良好ではなかったが、寺院の区画となるSA1785材木列が調査区A区を縦断しさらに南へ伸びていることが明らかになった。調査対象地は東北電力の敷地内にあり、電力関係の地上施設があり制約があることから、南に3箇所の小規模な調査区を追加し、平成11年6月11日まで調査を行なった。

第128次調査区は郡山遺跡の南端部にA～D区までの調査区を設定し実施した。調査区は南北に50m程の長さがあるため、いずれかの調査区で寺院南辺の塀跡が東西に横断するものと推定された。平成11年8月23日よりA～D区までの表土排除し、遺構の検出作業を行った。A区は以前住宅が建っていたため、住宅の基礎やゴミ穴などによる攪乱が多く、D区では畑の耕作深度が深いため、遺構が著しく削平されている状況であった。ただA区の北端の調査中に南辺と推定される東西方向の木材列と、その周辺の柱の柱穴掘り方を検出したため、急ぎ調査区の拡張を行った。



第5図 第126次・第128次調査区位置図

その箇所寺院の南門と塀跡となる材木列が発見されたため、平成11年11月23日に現地説明会を実施した。その後寺院に関わる遺構を主に追加調査し、平成11年12月15日まで発掘調査を行った。埋め戻しならびに整地作業を終了したのは平成11年12月17日である。

## 2. 発見遺構・出土遺物

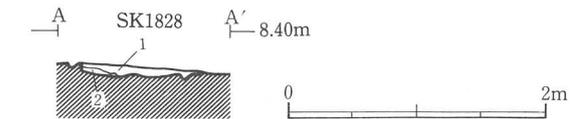
### (1) 第126次調査

今回の調査で発見された遺構は、材木列1列、土坑6基、溝跡1条、ピットなどである。攪乱が著しく、その直下または基本層位第Ⅲ層上面で検出されている。

**SA1785材木列** 調査区の東端から拡張したA区～C区にかけて、縦断するようにN-0°-E(真北)方向に延びる材木列を検出した。掘り方の上幅は30～45cm、下幅は16～28cm程、深さは15～28cmである。掘り方の中央に直径10～18cmの柱痕跡が見られるが、削平が著しい箇所では柱痕跡が杭の先端状となり直径が6～8cmとなる箇所がある。掘り方の断面形はU字形である。遺物は出土しなかった。

拡張区C区でSK1836土坑に切られている。

**SK1828土坑** 東西1.90m、南北1m以上の土坑で、深さは8cm程である。底面はほぼ平坦であるが、南側が削平されている。壁は北側では底面から直線的に立ち上がっている。堆積土は、褐色粘土、にぶい黄褐色粘土質シルトである。



層位	土色	土性	備考
1	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	
2	10YR5/3 にぶい黄褐色	粘土	

第6図 SK1828断面図 (1/60)

遺物は、土師器の小片が2点出土している。

**SK1829土坑** 東西0.30m、南北0.70m以上の土坑で、深さは15cm以上である。堆積土は灰黄褐色粘土である。

遺物は、土師器の甕片が2点出土している。

**SK1832土坑** 東西0.75m、南北0.40m以上の土坑である。

遺物は、両面黒色処理された土師器坏片が1点出土している。

**SK1833土坑** 東西0.30m以上、南北1.15mの長方形の土坑と推定され、深さは40～45cm程である。壁はやや斜めにオーバーハング状に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。堆積土は暗褐色、にぶい黄褐色粘土シルトなどである。遺物は出土しなかった。

**SK1834土坑** 東西0.56m、南北0.90mの隅丸長方形の土坑と推定される。遺物は、出土しなかった。

**SK1836土坑** 拡張区C区で検出し、東西0.85m以上、南北0.16m以上の土坑と推定され、深さは30cm程である。壁はきわめて緩やかに立ち上がる。堆積土は暗褐色シルトである。遺物は出土しなかった。

**SD1831溝跡** 上幅25～30cmの溝跡と推定される。方向はE-1°-Sで、検出した総長は1.3mである。

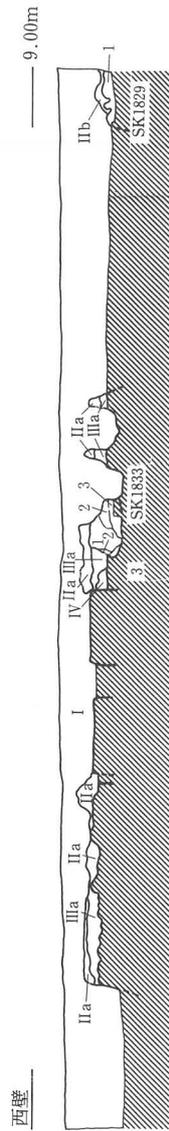
遺物は出土しなかった。

### (2) 第128次調査

今回の調査で発見された遺構は、材木列1列、掘立柱建物跡1棟、一本柱列1列、竪穴住居跡1軒、溝跡5条、土坑6基、井戸跡1基、ピットなどである。調査区のうちA、D区の攪乱が著しく、その直下または基本層位第Ⅲ層上面で遺構は検出されている。

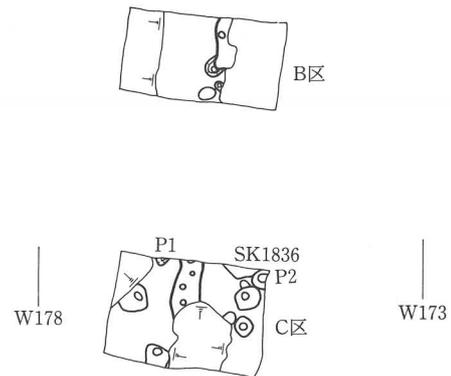
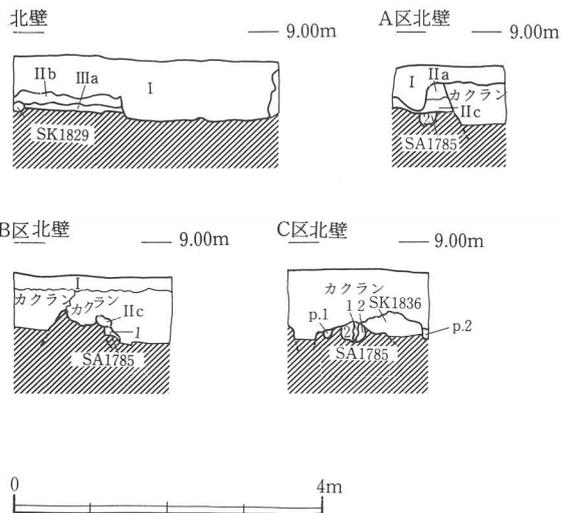
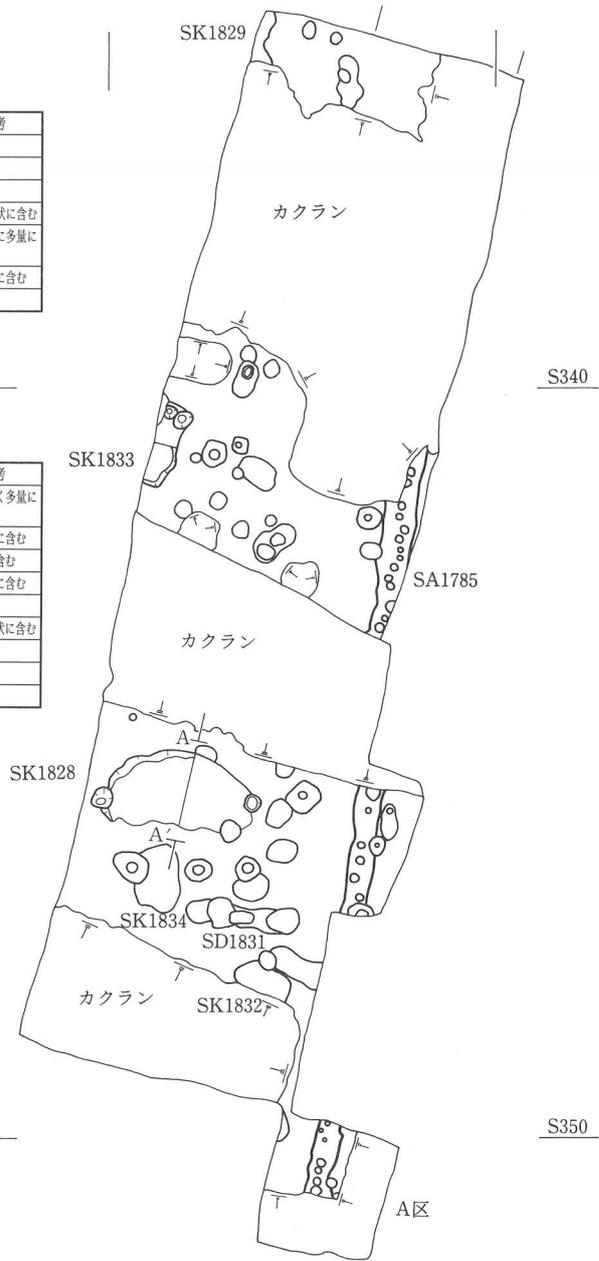
**SA1850A・B材木列** 調査区の東端から西端に横断する材木列で、2時期あり方向はE-0°-S(真東西)である。掘り方の上幅は東側で30～60cm、中央で100～130cmであるが、西側では150～112cmへと西にむかって徐々に狭くなっている。そのほぼ中央に直径10～20cmの円形の柱痕跡がある。なおB期となる掘り方西側の隅の柱がSB1880門跡B(旧)のN2E4の柱となり、直径30cmほどとなっている。残存する掘り方の深さは中央で検出面より56cm、東側では20cm程である。掘り方の断面形は中央で逆台形、東側ではU字形である。掘り方埋め土よりは、遺物は出土しなかった。

SB1880門跡B、SD1858溝跡に切られている。

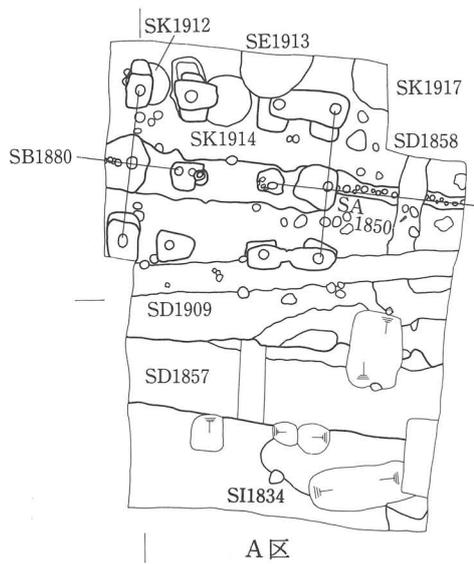


遺構名	層位	土色	土性	備考
基本層位	I			盛土および攪乱
	IIa	10YR5/4 におい黄褐色	粘土質シルト	旧耕作土
	IIb	5Y4/1 灰色	粘土質シルト	旧耕作土がグライ化
	IIc	10YR5/4 におい黄褐色	シルト	明黄褐色土をブロック状に含む
	IIIa	10YR7/6 明黄褐色	シルト質粘土	暗褐色土をブロック状に多量に含む
	IIIb	10YR7/6 明黄褐色	シルト質粘土	暗褐色土をブロック状に含む
IV	10YR7/6 明黄褐色	シルト質粘土		

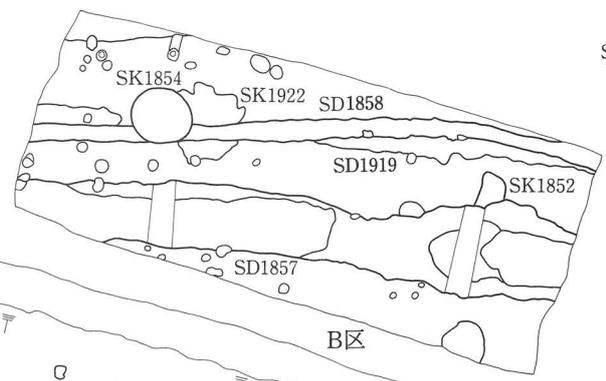
遺構名	層位	土色	土性	備考
SA1785	1	10YR5/6 黄褐色	シルト	におい黄褐色土を細かく多量に含む
	2	10YR4/3 におい黄褐色	粘土質シルト	暗褐色土をブロック状に含む
SK1833	1	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	白色粘土を斑状に少量含む
	2	10YR7/4 におい黄褐色	粘土質シルト	白色粘土を斑状に多量に含む
	3	7.7YR8/1 灰白色	シルト質粘土	酸化鉄を斑状に含む
SK1829	1	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	黄褐色粘土をブロック状に含む
SK1836	1	10YR3/3 暗褐色	シルト	
Pit 1	1	10YR3/3 暗褐色	シルト	
Pit 2	1	10YR3/3 暗褐色	シルト	



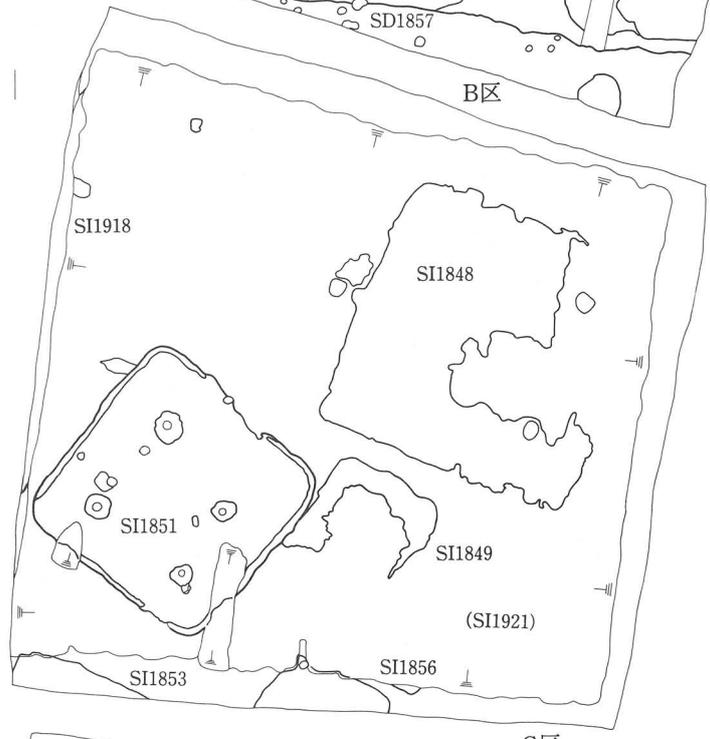
第7図 第126次調査区平・断面図 (1/100)



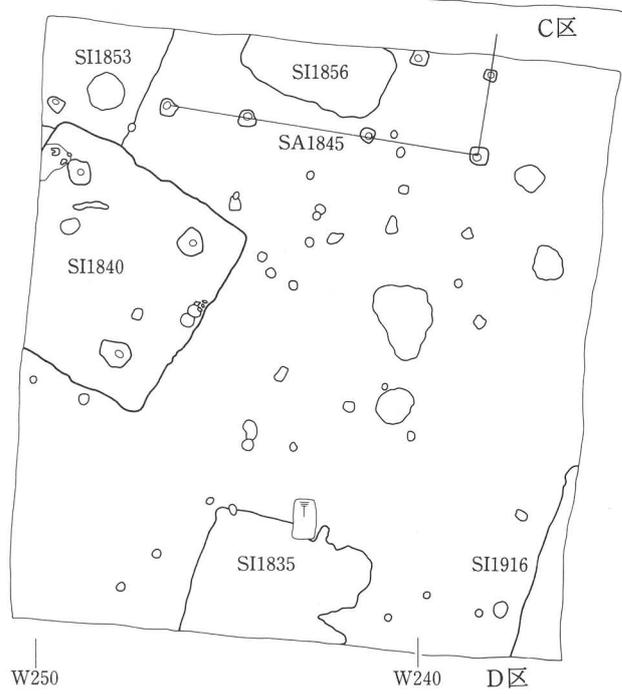
A区



B区



C区



D区

W260

W250

W240

S360

S370

S380

S390

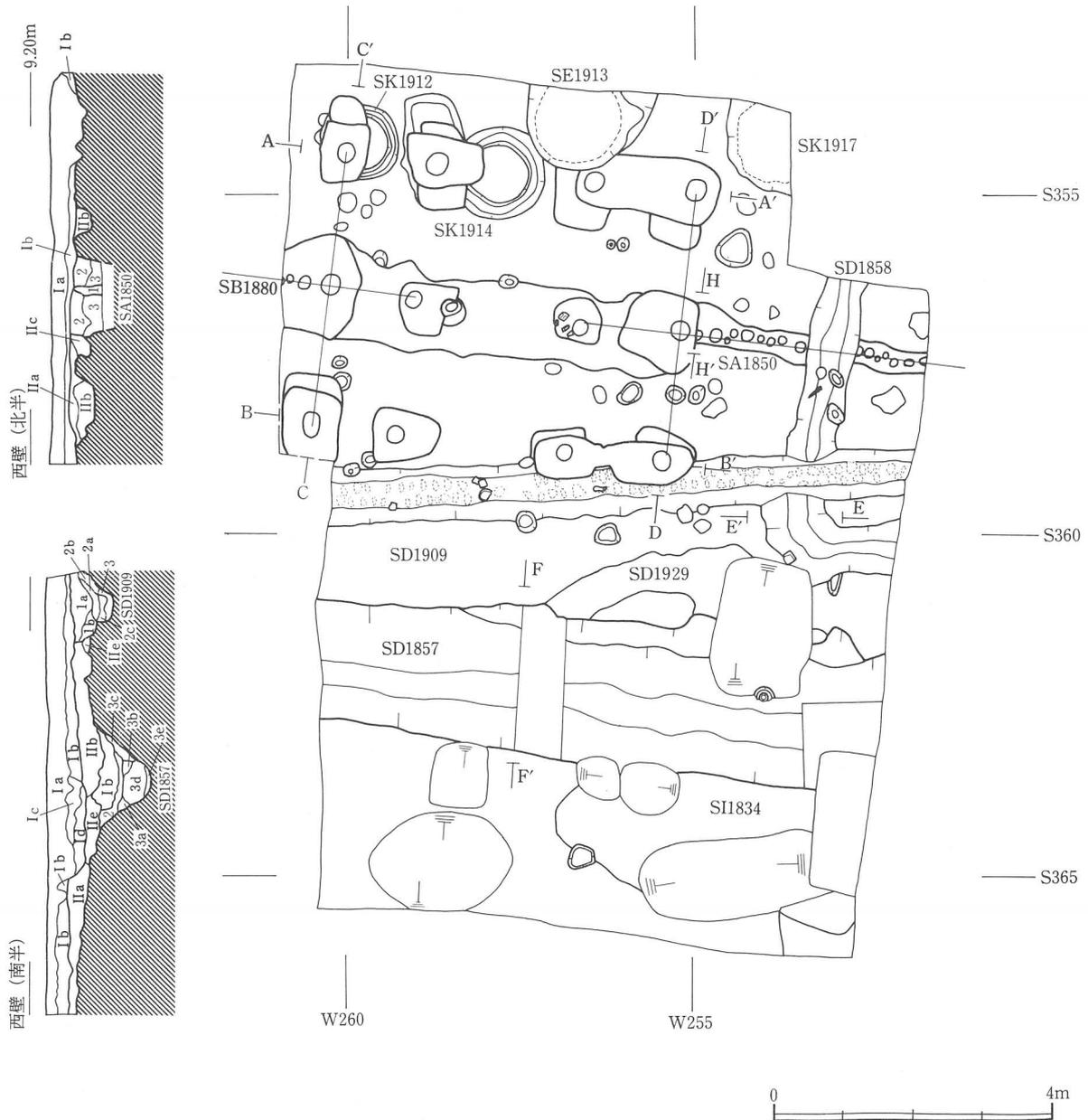
S400

第8図 第128次調査区遺構配置図 (1/200)

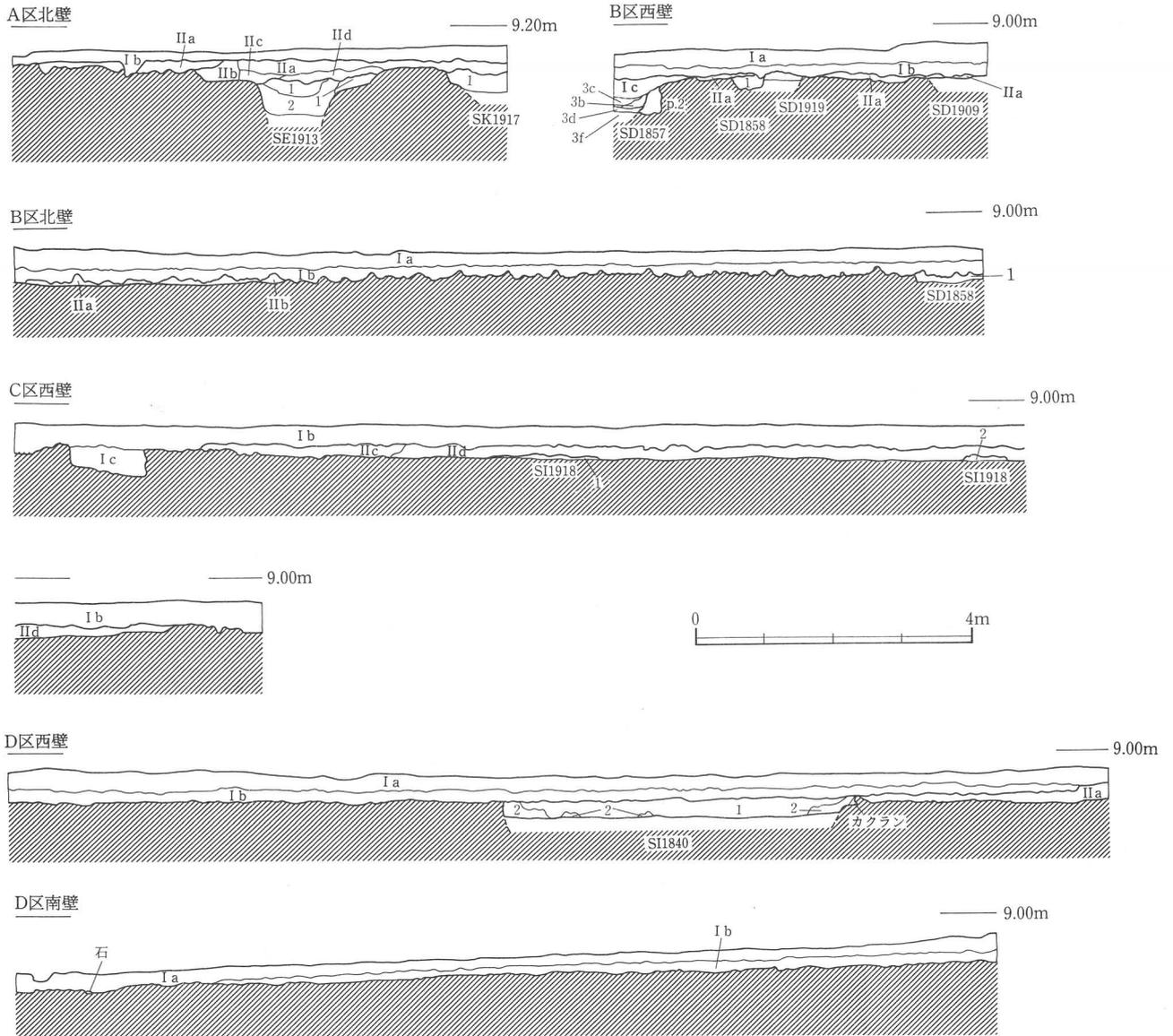
**SB1880A・B掘立柱建物跡** A(旧)からB(新)への建替えがあり、Bは桁行3間(総長5.1m、柱間寸法130~140cm、230cm)、梁行2間(総長4.1m、柱間寸法205cm)の東西棟建物跡で、西梁行の柱列方向でN-0°-E(真北)である。柱穴の掘り方は一辺70~110cmのやや歪んだ隅丸方形のものが多く、東側の柱穴掘り方のうちN1、N3は柱2本分の掘り方が連結している。またN2E2とN2E3の柱穴掘り方は他の柱穴掘り方より小規模である。柱痕跡は20~30cmの円形である。Bの柱穴掘り方に切られ、Aの柱穴掘り方が見られる箇所がある。桁の中央の柱間が広がっていることや、棟通りにSA1850木材列が取り付くことなどから門跡と考えられる。なおN2E4柱痕跡はSA1850材木列Bの掘り方に取り込まれている。

遺物はN2E2B柱穴掘り方より鴟尾H-22(写真図版36-2)、23(第24図4)が、N1E4B柱穴掘り方よりH-24(写真図版38-4③)が、またこの他の掘り方より、土師器坏、甕片、須恵器坏、甕片や平瓦片が少量出土している。

SD1858溝跡、SD1909溝跡、SK1912土坑、SK1913土坑、SK1914土坑に切られている。

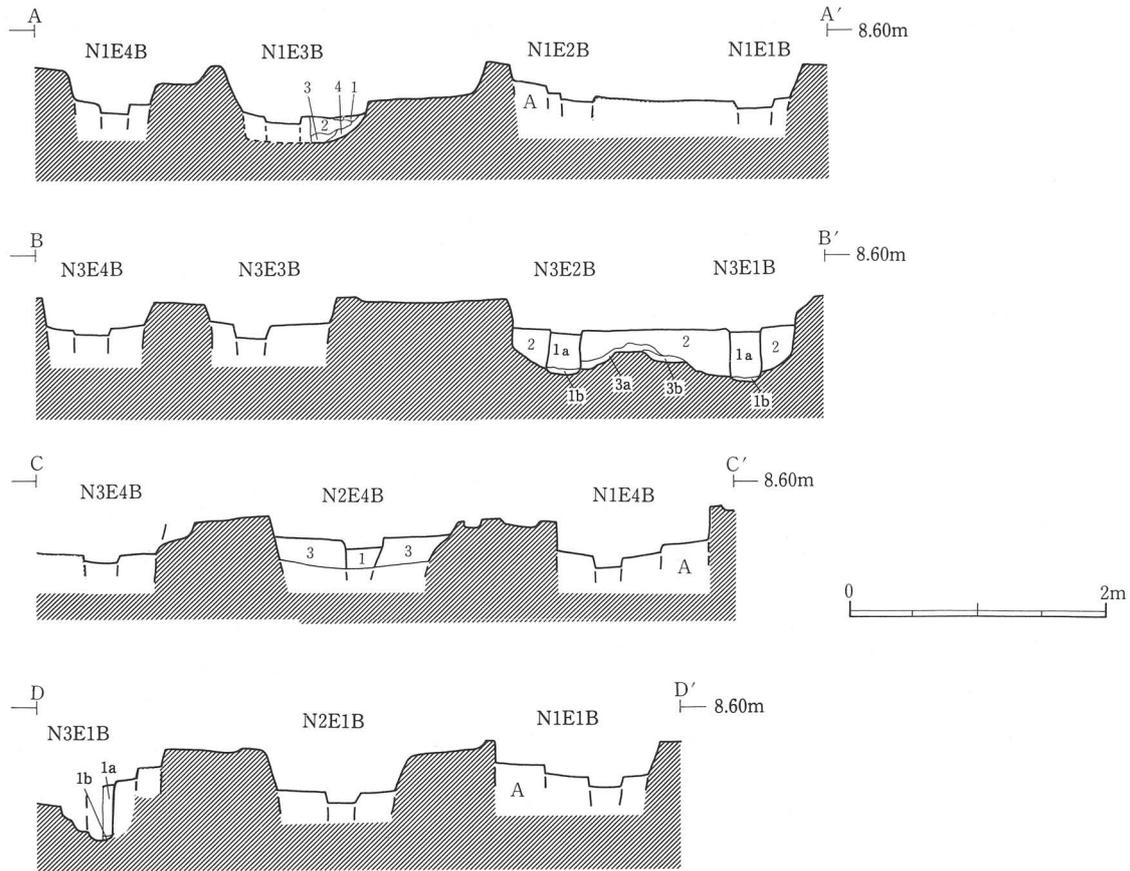


第9図 第128次調査区A区平・断面図(1/100)



遺構名	層位	土色	土性	備	考
<b>A区西壁 (基本層位はA区~D区共通)</b>					
基本層位	I a	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト		
	I b	10YR4/3 におい黄褐色	粘土	耕作土	
	I c	10YR4/3 におい黄褐色	粘土	黄褐色粘土粒を多量に含む	
	I d	10YR4/3 におい黄褐色	シルト質粘土		
	II a	10YR3/4 暗褐色	粘土	旧耕作土	
SD1857	II b	10YR3/4 暗褐色	粘土	黄褐色粘土をブロック状に含む	
	II c	10YR3/3 暗褐色	粘土	黄褐色粘土を少量含む	
	II d	10YR4/2 灰黄褐色	粘土質シルト	浅黄褐色シルトを少量含む	
	II e				
	1d	10YR5/1 褐灰色	粘土	マンガン粒を多量に含む	
SD1857	2	10YR3/1 黒褐色	粘土	酸化鉄を少量含む	
	3a	10YR8/6 黄褐色	粘土	黒褐色粘土をブロック状に含む	
	3b	10YR6/4 におい黄褐色	粘土質シルト		
	3c	10YR6/6 明黄褐色	粘土質シルト		
	3d	10YR2/1 黒色	粘土	白色粘土・酸化鉄を多量に含む	
	3e	10YR8/4 浅黄褐色	粘土	下層に酸化鉄を多量に含む	
SD1909	1a	10YR3/1 黒褐色	粘土質シルト		
	1b	10YR3/1 黒褐色	粘土質シルト	黄褐色粘土を多量に含む	
	2a	10YR2/2 黒褐色	粘土質シルト		
	2b	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	黄褐色粘土を少量含む	
	2c	10YR2/2 黒褐色	粘土質シルト	酸化鉄を多く含む	
3	10YR2/1 黒色	粘土	黄褐色粘土をブロック状に多量に含む		
<b>SA1850</b>					
	1	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	柱痕跡	
	2	10YR3/3 暗褐色	粘土		
	3	10YR3/4 暗褐色	粘土	黄褐色粘土粒を含む	
<b>A区北壁</b>					
SE1913	1	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	褐灰色粘土を少量含む	
	2	10YR5/3 におい黄褐色	シルト	褐灰色粘土を少量含む	
SK1917	1	10YR4/2 灰黄褐色	粘土		
<b>B区西壁</b>					
SD1857	1c	10YR5/2 褐灰色	粘土質シルト	マンガン粒を多量に含む	
	3b	10YR5/4 におい黄褐色	粘土質シルト	砂質が強い	
	3c	10YR6/2 灰黄褐色	粘土質シルト	砂質が強い、酸化鉄を多量に含む	
	3d	10YR4/1 褐灰色	粘土	白色粘土をブロック状に含む、酸化鉄をブロック状に含む	
	3f	10YR7/2 におい黄褐色	粘土	黒褐色粘土をブロック状に含む、最下層に酸化鉄を含む	
Pit 2	1	10YR3/2 黒褐色	粘土		
SD1858	1	10YR2/2 黒褐色	シルト	砂質シルトが混入する	
<b>C区西壁</b>					
SI1918	1	10YR5/1 褐灰色	粘土		
	2	10YR6/6 明黄褐色	粘土	灰色粘土を帯状に含む、住居貼床	
<b>D区西壁</b>					
SI1840	1	10YR5/6 黄褐色	粘土質シルト	黄褐色粘土をブロック状に含む	
	2	10YR3/2 黒褐色	粘土	黄褐色粘土をブロック状に含む	

第10図 第128次調査区断面図 (1/100)



遺構名	層位	土色	土性	備考
<b>N1E3B</b>				
掘り方	1	10YR8/4 残黄褐色	粘土質シルト	
	2	10YR7/6 明黄褐色	粘土	酸化鉄をブロック状に含む
	3	10YR7/6 明黄褐色	粘土	白色粘土をブロック状に含む
	4	10YR7/6 明黄褐色	粘土	
<b>N3E1B・N3E2B</b>				
柱痕跡	1a	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土	
	1b	10YR7/1 灰白色	粘土	下面に酸化鉄の集積
掘り方	2	10YR5/4 にぶい黄褐色	粘土質シルト	白色粘土を斑状に含む
	3a	10YR5/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	白色粘土をブロック状に含む
	3b	10YR5/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	白色粘土を少量含む
<b>N2E4B</b>				
柱痕跡	1	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	
掘り方	3	10YR3/4 暗褐色	粘土	黄褐色粘土粒を含む

第11図 SB1880門跡断面図 (1/60)

**SD1857溝跡** 上幅120~255cm、底面幅34~85cm、深さ28~100cmで、B区の東寄りで土橋状に浅くなる箇所がある。断面形は逆台形あるいはU字形の溝跡である。壁は緩やかに立ち上がるが、中程に段を有し、それより上方は開いている。底面はほぼ平坦である。方向はE-0°-S（真東西）で、検出した総長は29mである。堆積土は第1、2層が黒褐色粘土、第3層は褐灰色の砂を含む粘土やシルトである。B区の東端の落ち込みの箇所のみ、第4層として褐灰色粘土が堆積している。

遺物は、第1層から土師質で小型のC-855坏(第23図7)、甕の頸部片に類似した須恵器E-422、凸面がヘラケズリの顕著な丸瓦F-86、87、同様にヘラケズリが顕著で叩き痕跡の不明な平瓦G-92~97、残存状況の不良な瓦G-101(写真図版36-9)、小片の鴟尾H-25(写真図版38-4②)、27(写真図版36-8)、28(写真図版38-4①)、陶器I-44、45摺鉢(第23図9、8)、内外面黒色のI-46焙烙(第23図15)、口縁部に緑色の釉が施されたI-49皿(第23図12)、内面と外面の上半に茶色の釉(鉄釉)が施されたI-50皿(第23図10)、表面にススが付着した礫石器K-243、金属器N-93不明品、第3層からは内面の黒色処理が再酸化したC-853坏(第23図11)などが出土している。

この他に上層の第1層からは陶器や磁器を含む土器や古代の瓦が出土している。なお第3層からはロクロ不使用の土師器坏、甕や古代の瓦片のみが出土している。

SI1834竪穴住居跡、SD1929溝跡を切り、SK1852土坑に切られている。

**SD1909溝跡** 上幅70～80cm、底面幅28～45cm、深さ34～60cm、断面形は扁平な逆台形の溝跡である。壁は緩やかに立ち上がり、底面は鋤先痕跡が明瞭であるが全体としてはほぼ平坦である。方向はE-9°-Nで、A区からB区にかけて検出した総長は18mである。堆積土は黒褐色粘土質シルト、黒色粘土である。

遺物は、凸面が縄叩き後に入念なヘラケズリが施された丸瓦F-81(第25図7)、単弁蓮華文軒丸瓦F-82(第21図10)、軒丸瓦の瓦当部と丸瓦部の接合部分の破片F-84、凸面が縄叩き、凹面が桶巻き痕跡の顕著な平瓦G-91(第24図1)、胎土中に黒色の斑点状の成分が顕著な平瓦G-98などが出土している。この他に土師器片と瓦片が出土している。

SB1880掘立柱建物跡、SD1858溝跡を切っている。

**SD1858溝跡** 上幅55～140cm(A区)、34～55cm(B区)、底面幅15～30cm(A区)、20～42cm(B区)、深さ20～30cm(A区)、10～20cm(B区)、断面形は扁平なU字形の溝跡である。壁は緩やかに立ち上がり、底面はB区東半にやや凹凸があるが、他はほぼ平坦である。方向はA区でN-5°-EからE-2°-NにL字に曲がり、B区ではE-8°-N方向でやや蛇行している。A区からB区にかけて検出した総長は26mである。堆積土はにぶい黄褐色粘土質シルト、灰黄褐色粘土(A区)、黒褐色シルト、褐色粘土質シルト(B区)である。

遺物は、面取りされやや薄手の鴟尾H-21(写真図版36-14)、他の鴟尾に比べ色調の濃い面のあるH-26、陶器I-48甕(第23図3)、緑色の付着物のあるN-94鋤滓、棒状の先端に把手状の膨らみのあるN-97不明品(第24図3)などが出土している。この他に土師器坏、甕、瓦、陶器片が出土している。

SA1850材木列、SD1919溝跡、SK1922土坑を切り、SD1909溝跡、SK1854土坑に切られている。

**SD1919溝跡** 上幅50～75cmの溝跡である。方向はE-2°-Nで、検出した総長は26mである。遺構は検出に留めている。溝の位置からA区のSD1858溝跡と接続する可能性もある。

遺物は、検出面上から内面にカエリがあり、ツマミの欠損した須恵器E-421蓋(第23図6)、平瓦片が出土している。

SD1857溝跡、SD1858溝跡に切られている。

**SK1922土坑** 東西1.80m、南北2.00mの不整形の土坑と推定され、深さは14cm以上である。遺構は検出に留めている。

SD1858溝跡、SK1854土坑に切られている。

**SI1848竪穴住居跡** 東西7.00m、南北7.00mの隅丸正方形の竪穴住居跡である。西辺での方向はN-15°-Eである。耕作により著しく削平され、掘り方の一部のみ残存している。

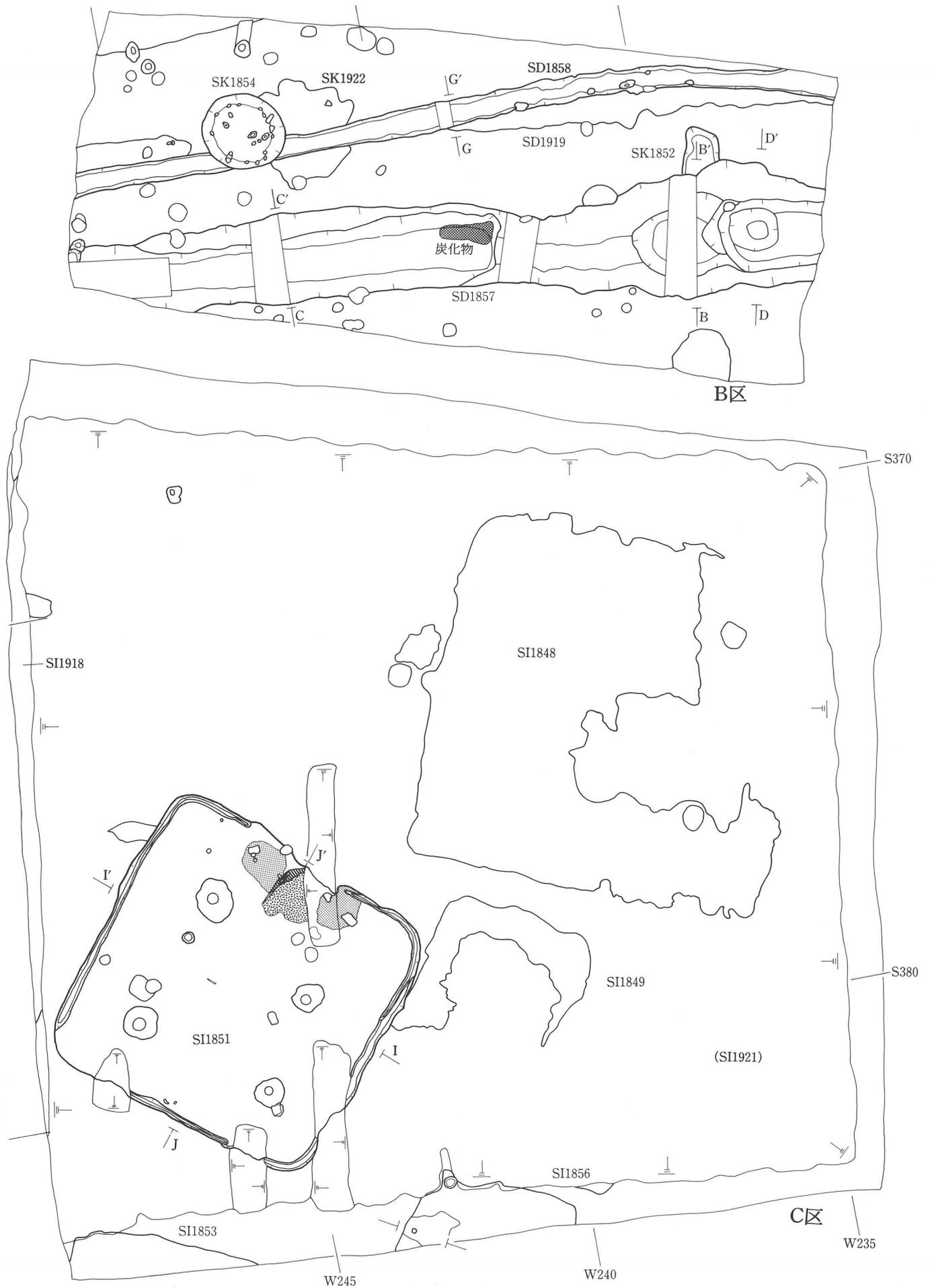
遺物は、掘り方埋め土中より土師器C-856高坏(第21図9)、またこの他に土師器坏、甕片、須恵器甕片、鋤滓が少量出土している。

**SI1849竪穴住居跡** 東西3.10m以上、南北2.90m以上の竪穴住居跡である。西辺での方向はN-30°-Eである。攪乱により著しく削平され、掘り方のごく一部のみ残存している。

遺物は、掘り方埋め土中より土師器甕片、羽口片、鋤滓が少量出土している。

SI1851竪穴住居跡に切られている。

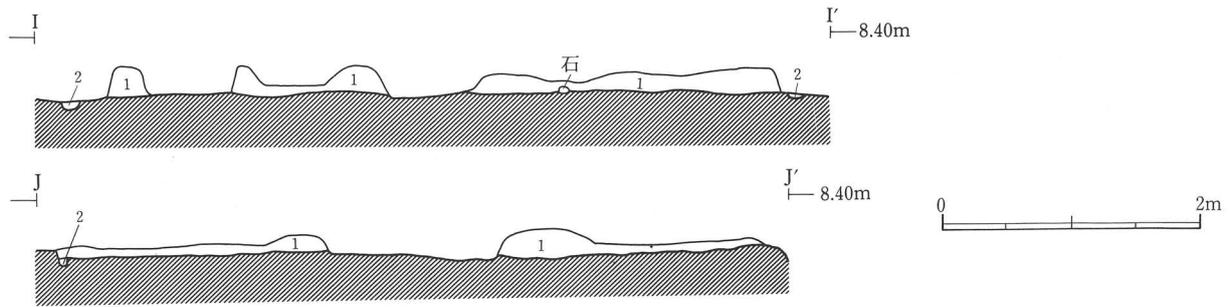
**SI1851竪穴住居跡** 東西5.65～5.80m、南北5.80～5.90mのほぼ隅丸正方形の竪穴住居跡である。西辺での方向はN-32°-Eである。耕作による削平が床面まで及んでいる箇所があり、残存状況は良好ではない。北壁中にカマドがあり、著しく焼けているソデとカマド内の堆積土の残存を検出した。これらの周辺にはカマドを構築していたと推定される土が炭化物や焼土と混じりながら堆積していた。また住居の壁際には幅6～16cm、床面からの深さは2～5cmの周溝が巡っている。また床面上から支柱穴と想定される直径20～23cmの柱痕跡を有する掘り方を検出した。



第12図 第128次調査B・C区平面図 (1/100)



第13図 第128次調査C・D平面図 (1/100)



層位	土色	土性	備考
1	10YR3/3 黒褐色	シルト質粘土	明黄褐色粘土まばらに含む
2	10YR4/6 褐色	シルト	にぶい黄褐色粘土質シルトを含む

第14図 SI1851断面図 (1/60)

遺物は、床面上から内面へラミガキが顕著で再酸化により黒色処理が不明瞭となった土師器C-859坏(第21図2)、形状の一定しないススの付着したK-238礫、カマド上から内面黒色処理されているが外面体部に明瞭な段や稜を有さないC-857坏(第21図1)、板状でススの付着したK-237、239~242礫が出土している。これら板状の礫は出土した位置とススの付着の仕方から、カマドの構築材として用いられていたと推定される。また堆積土の第1層中から棒状の金属器N-95不明品(第21図3)が出土している。この他に床面上からは平瓦の小片や、上層の堆積土中からは土師器、須恵器、平瓦の小片、鉋滓などが出土している。

SI1849竪穴住居跡を切っている。

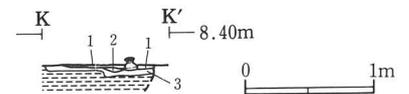
**SI1853竪穴住居跡** C区とD区に跨がって検出され、東西4.20m、南北4.80mの竪穴住居跡である。東辺での方向はN-17°-Eである。耕作により著しく削平され、床面が露出している。

遺物は、床面上より内面黒色処理された小型の土師器C-868坏(第21図7)、須恵器甕の体部片が出土している。

SI1840竪穴住居跡、小柱穴に切られている。

**SI1856竪穴住居跡** C区とD区に跨がって検出され、東西3.00~3.80m、南北4.00mの竪穴住居跡である。西辺での方向はN-20°-Eである。耕作による削平が著しく、残存状況は良好ではない。西壁中にカマドがあり、カマド内に堆積した炭化物、焼土を検出した。

遺物は、床面上から内外面黒色処理され碗形の土師器C-858坏(第21図4)、カマド底面より倒立して内面黒色処理されたC-869高坏(第21図6)、また掘り方埋め土に埋め込まれるように須恵器E-423甕の口頸部(第21図8)が出土している。C-869高坏は支脚として使用されていたと推定される。またE-423甕は口縁端部が床面上と水平に設置されている。この他に住居跡の検出面上からE-424盤(第21図5)の破片、土師器坏、甕の破片が出土している。

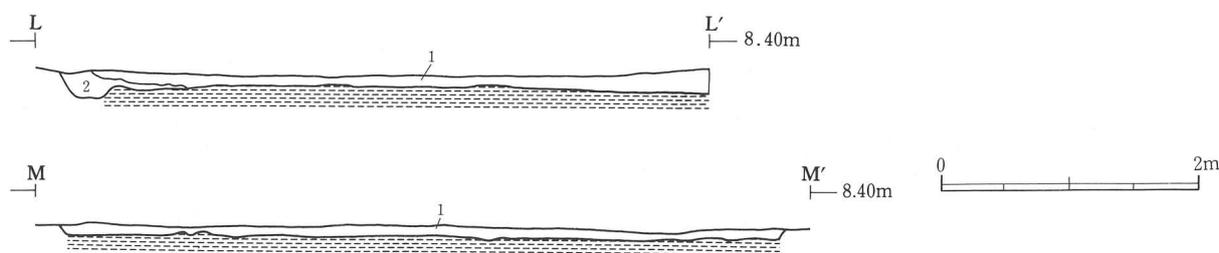


層位	土色	土性	備考
1	10YR3/3 暗褐色	粘土	炭化物・焼土を多量に含む
2	5YR3/4 暗赤褐色	粘土	熱により赤色化した
3	10YR6/6 明黄褐色	粘土	住居跡・貼床

第15図 SI1856カマド断面図 (1/60)

**SI1840竪穴住居跡** 東西5.80m、南北6.54~6.80mのほぼ隅丸方形の竪穴住居跡である。東辺での方向はN-27°-Eである。西壁中にカマドがあったと推定され、炭化物や焼土が堆積している箇所がある。また床面上から主柱穴と想定される直径16~24cmの柱痕跡を有する掘り方を検出した。

遺物は、カマド周辺から刷毛目調整の顕著な土師器C-866甕(第22図5)、体部から底部にかけてのC-861甕(第22図6)、ツマミと周縁が欠損し内面にウルシ状の付着物のある須恵器E-425蓋(第22図2)、床面上から内外面赤色の顔料が付いたC-864坏(第22図1)、また堆積土の第1層中からC-862、863甕(第22図7、4)、胎土に粗い小石を含むC-865坏(第22図3)、中央に溝状の凹みのあるK-236礫石器(第22図9)、磨面状の平坦面のあるK-234(写真図版37-14)、敲打痕のあるK-235礫石器(第22図8)などが出土している。この他に床面上から外面格子叩



層位	土色	土性	備考
1	10YR5/6 黄褐色	粘土質シルト	黄褐色粘土をブロック状に含む
2	10YR3/2 黒褐色	粘土	黄褐色粘土をブロック状に含む

第16図 SI1840断面図 (1/60)

きの須恵器甕片、第1層中から土師器片や鉄滓の小片が出土している。

**SI1835竪穴住居跡** 東西4.40m以上、南北3.50m以上の竪穴住居跡である。西辺での方向はN-12°-Eである。耕作により著しく削平され、掘り方の一部のみ残存している。遺物は出土しなかった。

**SI1916竪穴住居跡** 東西1.10m以上、南北5.40m以上の竪穴住居跡である。西辺での方向はN-12°-Eである。調査区内で遺構の一部のみを検出した。

遺物は、検出面上から体部片のみの土師器C-860甕、刷毛目調整の顕著な土師器甕の体部片と鉄滓が少量出土している。

**SI1918竪穴住居跡** C区の西端で遺構のごく一部のみを検出した。耕作により著しく削平されているため詳細は不明である。遺物は出土しなかった。

**SI1921竪穴住居跡** C区SI1849の東に隣接して遺構の断面のみを検出した。耕作により著しく削平されているため詳細は不明である。遺物は出土しなかった。

**SI1834竪穴住居跡** A区SD1857の南に隣接して遺構のごく一部を検出した。攪乱により著しく削平されているため詳細は不明である。遺物は出土しなかった。

**SA1845一本柱列** E-2°-S方向に3間分延びて、東端でL字状に曲がりN-2°-S方向に1間分延びている。北へ延びていると推定されるC区では検出されない。東西は3間(総長8.30m、柱間寸法220、300cm)となり、南北は1間(総長2.2m、柱間寸法220cm)である。柱穴は一辺30~50cmの隅丸方形あるいは歪んだ不整形で、柱痕跡は18~22cmである。SI1856をL字状に南から遮蔽するような配置となっている。またSI1853を切るように規模、形態の類似した柱穴が1基検出されているが、方向の上からは連続するものではないと考えられる。遺構は検出に留めている。

**SK1912土坑** 東西1.15m、南北1.08mの土坑で、深さは14~16cm程である。底面は周縁部が平坦な底面より4~7cm程深くなっている。壁は底面から直線的に立ち上がっている。堆積土は、灰黄褐色シルト、にぶい黄褐色シルトであるが、周縁部のみにぶい黄褐色、黒褐色シルト質粘土である。

遺物は、瓦、土製品、鉄製品、陶器片が出土している。

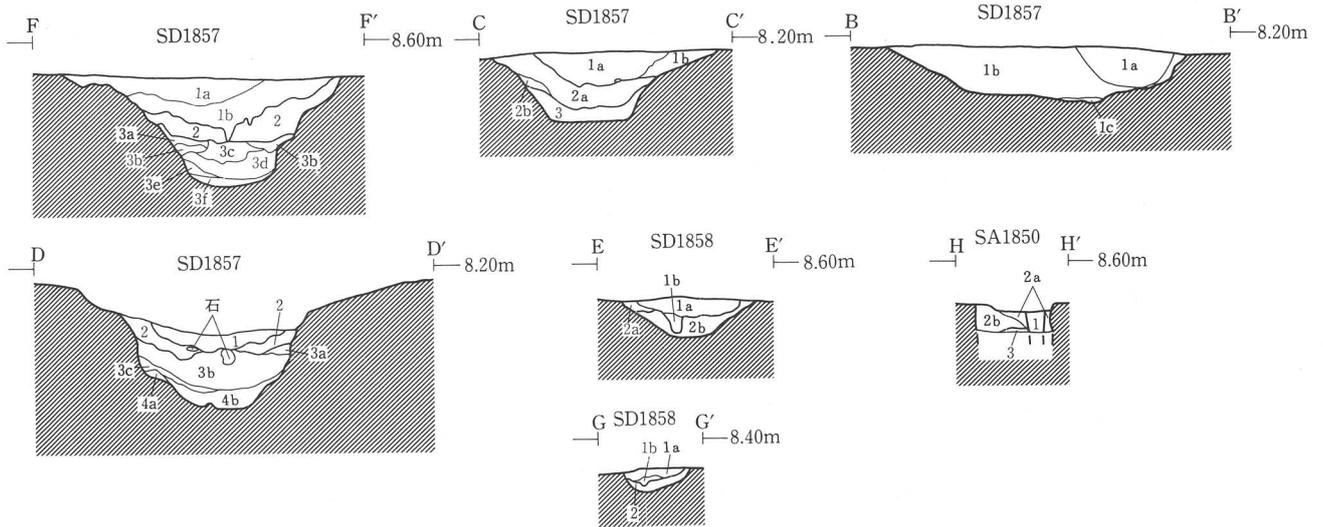
SB1880掘立柱建物跡を切っている。

**SE1913井戸跡** 東西1.80m、南北1.15m以上で、深さは55cm以上の井戸跡と推定される。壁は東側の上方で広がっているが、それ以外は直線的に立ち上がっている。堆積土は、灰黄褐色粘土、にぶい黄褐色シルトである。

遺物は、瓦、土師器、土製品、磁器片が出土している。

SB1880掘立柱建物跡、SK1914土坑を切っている。

**SK1914土坑** 直径1.33mの土坑で、深さは25~28cm程である。底面は周縁部が平坦な底面より、3cm程深くなっている。壁は底面から直線的に立ち上がっている。堆積土は、黒褐色シルト、灰黄褐色粘土質シルトなど、周縁



層位	土色	土性	備考
<b>SD1857 F-F'</b>			
1a	10YR3/2 黒褐色	粘土	マンガン粒を多量に含む
1b	10YR5/2 褐灰色	粘土質シルト	マンガン粒を多量に含む
2	10YR3/1 黒褐色	粘土	白色・黄褐色粘土を含む
3a	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	砂質が強い
3b	10YR5/4 におい黄褐色	粘土質シルト	砂質が強い
3c	10YR6/2 灰黄褐色	粘土質シルト	砂質が強い、酸化鉄を多量に含む
3d	10YR4/1 褐灰色	粘土	白色粘土をブロック状に含む、酸化鉄をブロック状に含む
3e	10YR6/2 灰黄褐色	粘土	酸化鉄を少量含む
3f	10YR7/2 におい黄褐色	粘土	黒褐色粘土をブロック状に含む、最下層に酸化鉄を含む
<b>SD1857 B-B' C-C'</b>			
1a	10YR3/2 黒褐色	粘土	マンガン粒を多く含む
1b	10YR3/2 黒褐色	粘土	褐色砂質シルトを含む、1a層より酸化鉄が少ない
1c	10YR4/1 褐灰色	砂質粘土	
2a	10YR3/1 黒褐色	粘土	マンガン粒を多く含む
2b	10YR3/1 黒褐色	粘土	酸化鉄を多く含む
3	10YR4/6 褐色	細砂	酸化鉄を棒状に含む、ブロックで2a層土を含む
<b>SD1857 D-D'</b>			
1	10YR4/1 褐灰色	粘土	酸化鉄を多量に含む
2	10YR6/4 におい黄褐色	砂質シルト	褐灰色粘土を部分的にブロックで含む
3a	10YR4/1 褐灰色	砂質粘土	
3b	10YR4/1 褐灰色	粘土	酸化鉄を多量に含む
3c	10YR6/3 におい黄褐色	砂質シルト	褐灰色粘土を部分的にブロックで含む
4a	10YR4/1 褐灰色	粘土	
4b	10YR4/1 褐灰色	粘土	酸化鉄の層が帯状に幾層か入る(互層となる)

層位	土色	土性	備考
<b>SD1858 E-E'</b>			
1a	10YR5/3 におい黄褐色	粘土質シルト	灰白色火山灰を微量に含む、灰黄褐色粘土質シルトを帯状に含む
1b	10YR5/3 におい黄褐色	粘土質シルト	灰黄褐色粘土質シルトを微量に含む
2a	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	黄褐色粘土粒を少量含む
2b	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	黄褐色粘土粒を帯状に含む
<b>SA1850 H-H'</b>			
1	10YR5/4 におい黄褐色	シルト質粘土	材木痕跡
2a	10YR7/6 明黄褐色	粘土質シルト	
2b	10YR3/3 暗褐色	粘土	
3	10YR7/6 明黄褐色	粘土質シルト	灰白色粘土を少量含む
<b>SD1858 G-G'</b>			
1a	10YR2/2 黒褐色	シルト	褐色砂質シルトを含む
1b	10YR4/6 褐色	粘土質シルト	黒褐色シルトを含む
2	10YR4/6 褐色	粘土質シルト	褐灰色粘土を含む

第17図 第128次調査区断面図 (1/60)

部のみにおい黄褐色の砂を含む粘土、褐灰色粘土である。

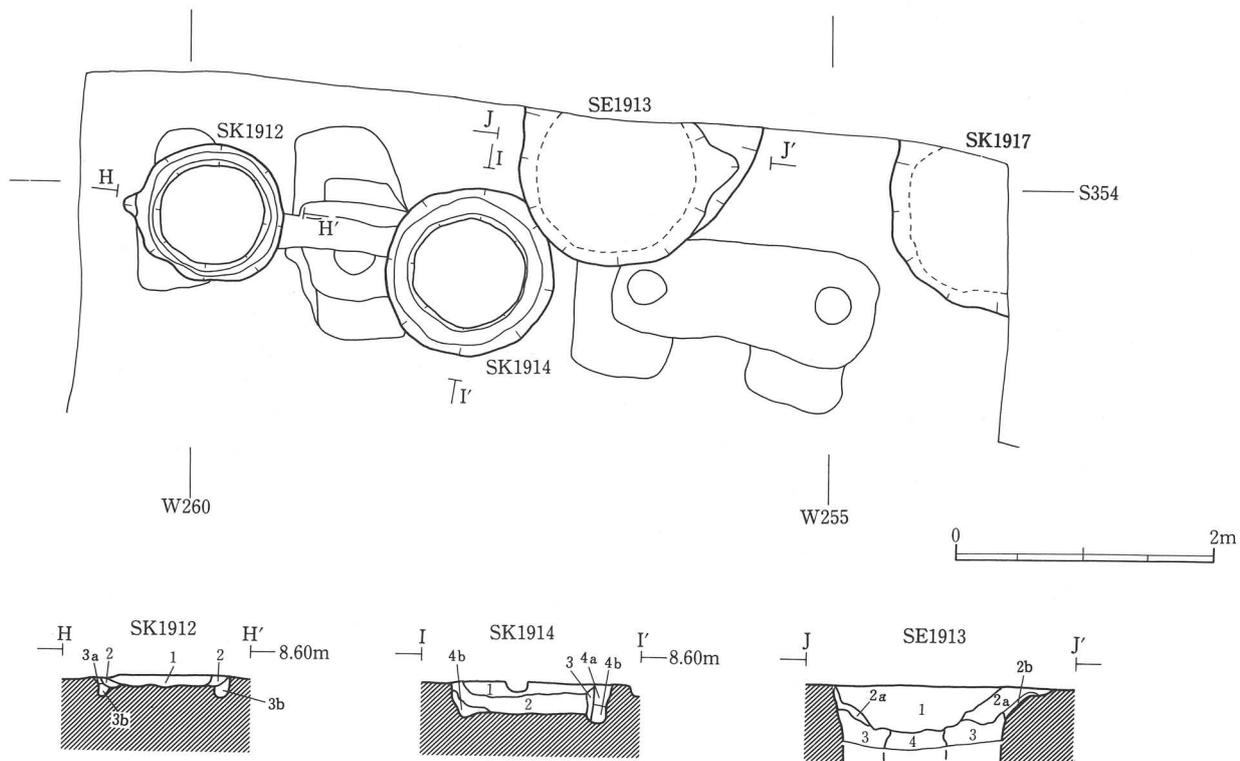
遺物は、瓦、土師器、土製品、鉄製品が出土している。

SB1880掘立柱建物跡、SE1913井戸跡を切っている。

**SK1917土坑** 東西0.90m以上、南北1.30m以上の土坑で、深さは18cm以上である。壁は緩やかに立ち上がっている。堆積土は、灰黄褐色粘土である。

遺物は、土師質のC-854灯明皿(第23図4)、平瓦、土師器、土製品、陶器の壺、埴片が出土している。

**SK1854土坑** 東西1.60m、南北1.45mの土坑で、深さは30~40cm程である。第3層の上面に直径93cmの桶の底板と推定される円形の板材が出土した。底面は周縁に杭が打ち込まれたような落ち込みがあり、3~9cm程深くなっている。壁は底面からやや丸味を持ちながらも徐々に直線的に立ち上がっている。堆積土は、灰黄褐色粘土、粘土質シルトなどである。



遺構名	層位	土色	土性	備考
SK1912	1	10YR4/2 灰黄褐色	シルト	
	2	10YR4/3 におい黄褐色	シルト	黄褐色砂を含む
	3a	10YR4/3 におい黄褐色	シルト質粘土	
	3b	10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土	
SK1914	1	10YR3/2 黒褐色	シルト	
	2	10YR4/2 灰黄褐色	粘土質シルト	におい黄褐色砂質粘土と互層で酸化鉄を含む
	3	10YR5/2 灰黄褐色	粘土	桶板の痕跡と考えられる
	4a	10YR5/4 におい黄褐色	砂質粘土	黒褐色土をブロック状に含む
SE1913	4b	10YR4/1 褐灰色	粘土	におい黄褐色土を含む
	1	10YR6/2 灰黄褐色	シルト	におい黄褐色粘土質シルトをブロック状に含む
	2a	10YR7/3 におい黄褐色	シルト	灰黄褐色粘土質シルトを多量に含む
	2b	10YR7/3 におい黄褐色	シルト	におい黄褐色粘土質シルトを斑状に含む
	3	10YR7/2 におい黄褐色	シルト	酸化鉄を多量に含む
4	10YR7/3 におい黄褐色	粘土	褐灰色粘土をブロック状に含む	

第18図 SK1912・1914・SE1913平・断面図 (1/60)

遺物は、第1層から陶器I-47灯明皿(第23図5)、第3層から木製品L-16板材(写真図版38-6)が出土し、この他に瓦、土師器、鉄製品、陶器片が少量出土している。

SD1858溝跡、SK1922土坑を切っている。

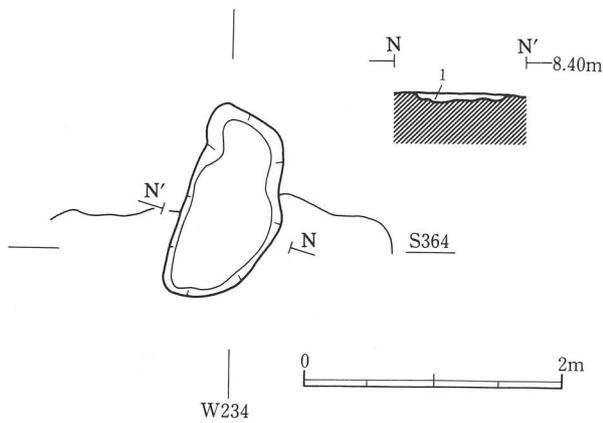
**SK1852土坑** 東西0.60~0.78m、南北1.50mの土坑で、深さは3~6cm程である。底面はやや凹凸がある。壁は緩やかに立ち上がる。堆積土は、褐灰色粘土質シルトである。

遺物は、瓦の小片が1点出土している。

SD1857溝跡を切っている。

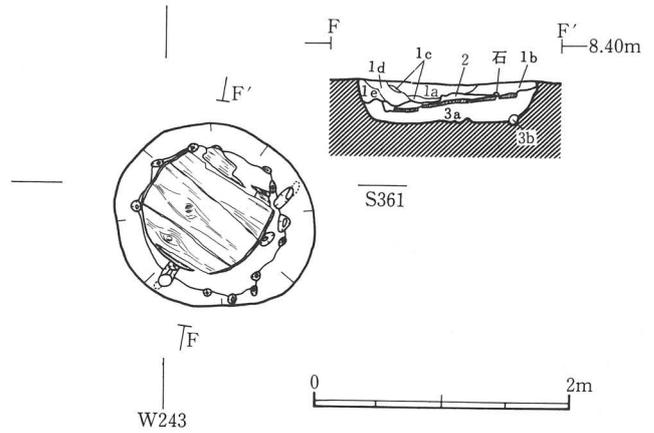
**SD1929溝跡** 上幅47~105cmの溝跡である。方向は西から東に弧を描くように蛇行している。検出した総長は2.5mである。遺構は検出にとどめている。遺物は出土しなかった。

SD1857溝跡に切られている。



層位	土色	土性	備考
1	10YR5/1 褐灰色	粘土質シルト	マンガン粒を多量に含む

第19図 SK1852平・断面図 (1/60)

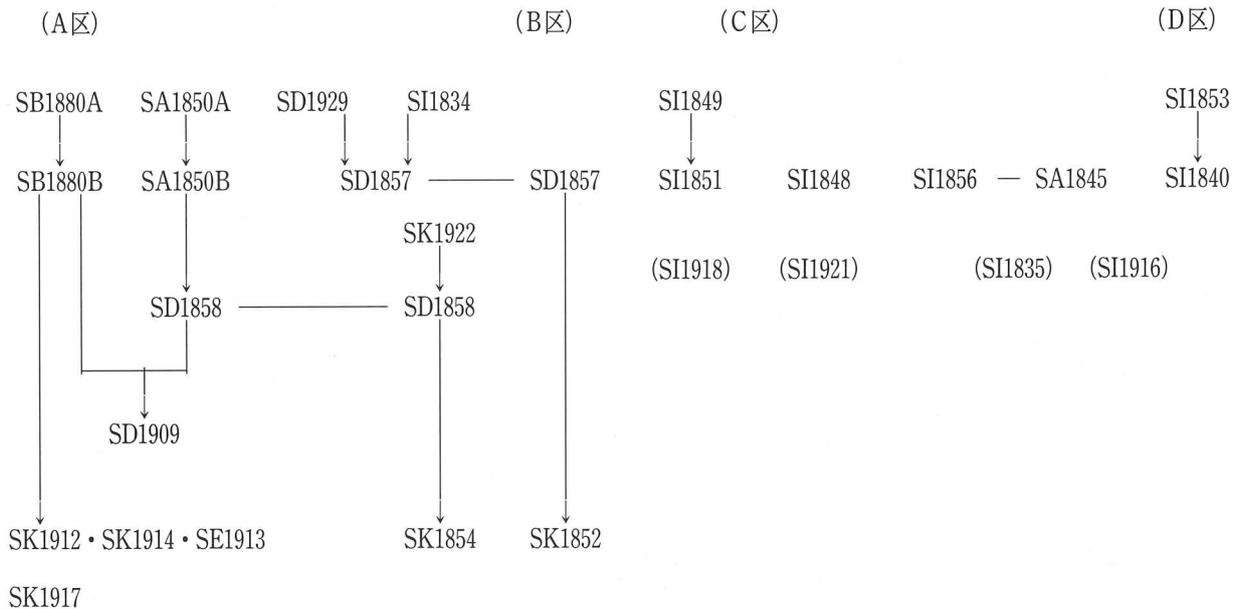


層位	土色	土性	備考
1a	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	酸化鉄を多量に含む
1b	10YR5/1 褐灰色	粘土質シルト	酸化鉄を多量に含む
1c	10YR6/2 灰黄褐色	砂	酸化鉄を多量に含む
1d	10YR4/1 褐灰色	粘土質シルト	酸化鉄を多量に含む
1e	10YR5/1 褐灰色	粘土質シルト	明黄褐色粘土をブロック状に含む
2	10YR4/1 褐灰色	粘土	炭化物と木片を少量含む
3a	10YR4/2 灰黄褐色	粘土質シルト	
3b	7.5YR6/6 橙色	砂	

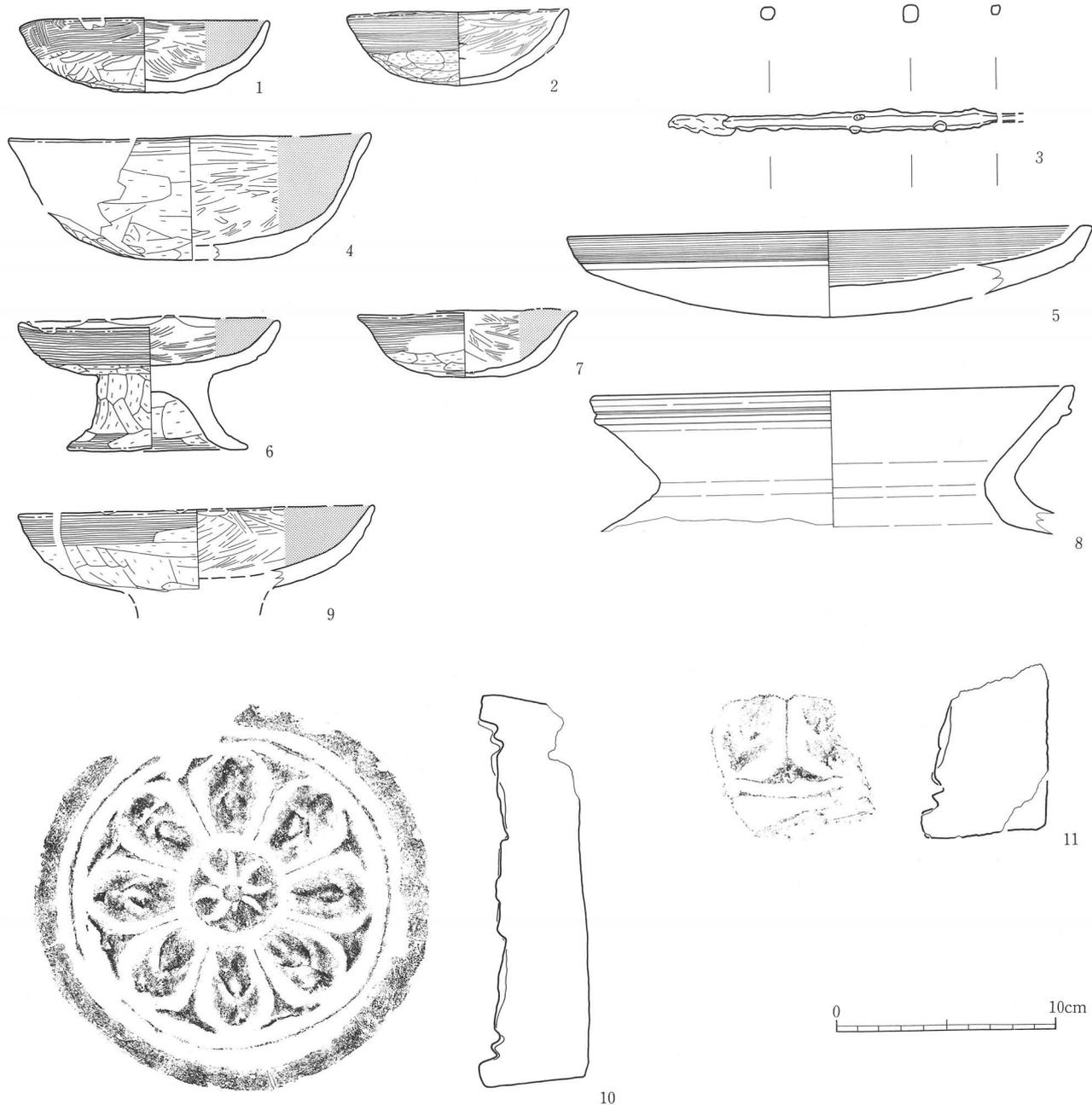
第20図 SK1854平・断面図 (1/60)

### 3. まとめ

第126次、第128次の調査で発見された遺構は、材木列1列、掘立柱建物跡1棟、一本柱列1列、竪穴住居跡11軒、溝跡5条、土坑6基、井戸跡1基、ピットなどである。主な遺構の重複関係を整理すれば次のとおりである。なお並列関係は、必ずしも同時性を示すものではない。

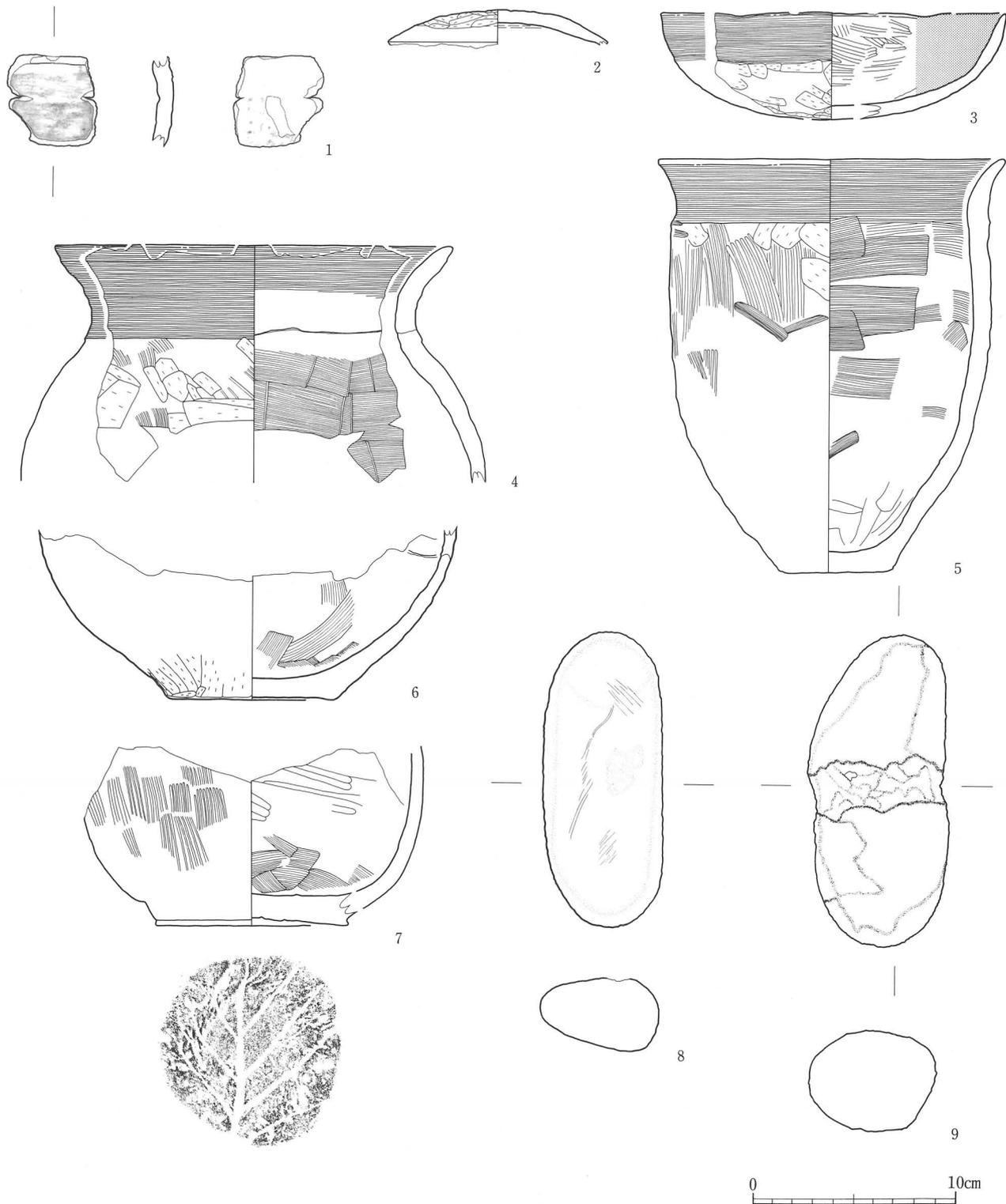


※ C、D区とも畑の耕作による攪乱が著しい



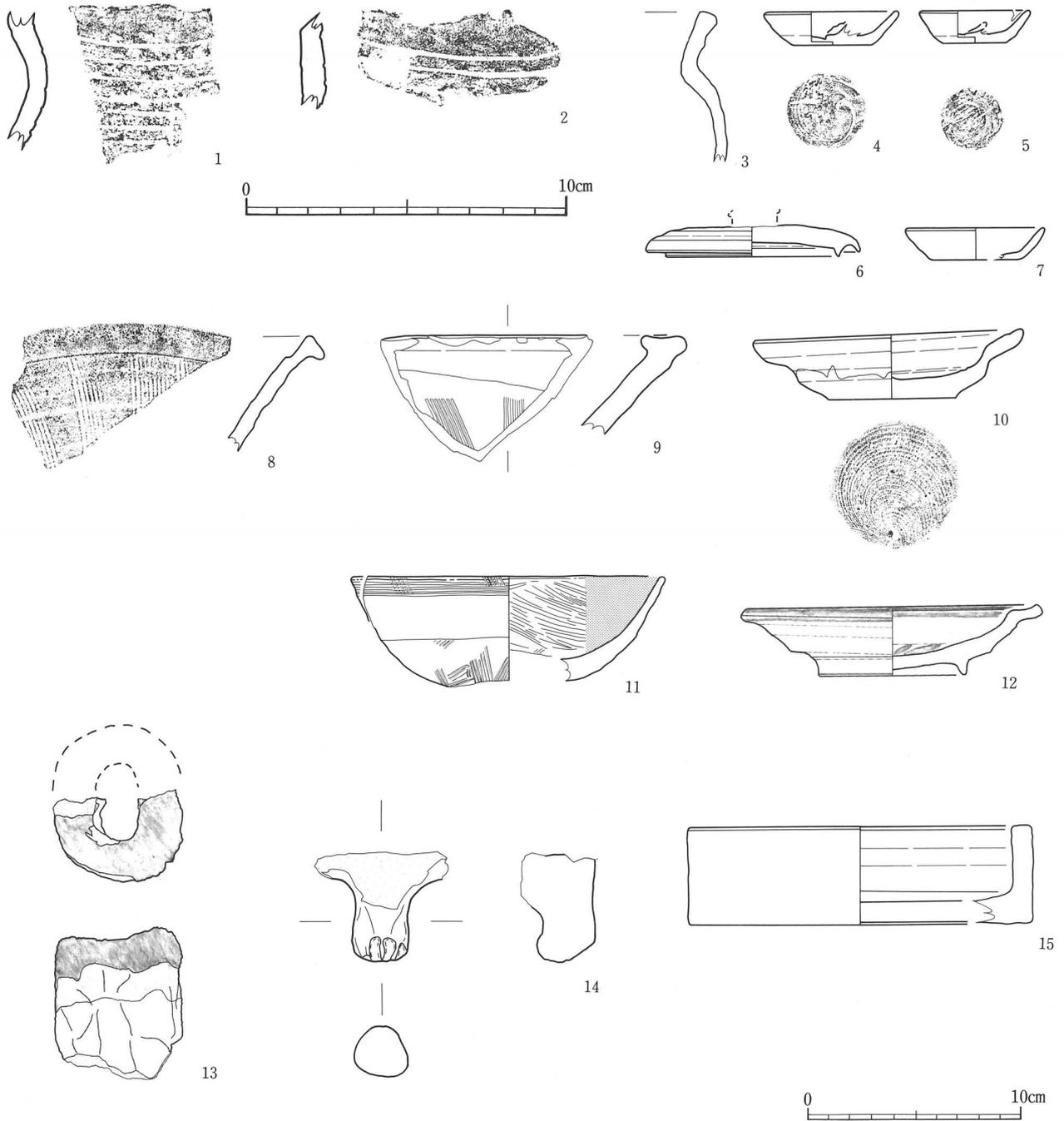
図版 番号	登録 番号	種別	器形	出土地点		法量 (cm)	外面調整	内面調整	備考	写真 図版
				出土遺構	層位					
1	C-857	土師器	坏	SI1851	カマド	器高 3.5 口径 11.4 底径 4.0	口縁部 ヨコナデ→ミガキ 体部 ヘラケズリ→ミガキ 底部 ヘラケズリ	口縁部 ミガキ 体部 ミガキ	内面黒色処理	37-1
2	C-859	土師器	坏	SI1851	床面	器高 3.4 口径 10.2 底径 3.0	口縁部 ヨコナデ 体部 ヨコナデ→ヘラケズリ 底部 ヘラケズリ	ミガキ	内面黒色処理が熱により再酸化	37-2
3	N-95	金属製品	不明品	SI1851	1下面	残存長 15 幅 0.35~1.0				37-5
4	C-858	土師器	坏	SI1856	床面	器高 5.8 口径(16.6) 底径 4.0	口縁部 ミガキ 体部 ヘラケズリ 底部 ヘラケズリ	ミガキ	外面・内面、黒色処理	
5	E-424	須恵器	皿(盤)	SI1856		器高(4.0) 口径(12.0) 底径(5.0)	口縁部 ロクロナデ 体部 ケズリ 底部 ケズリ	ロクロナデ	残存1/8	
6	C-869	土師器	高坏	SI1856	カマド内	器高 6.1 口径 12.0 底径 8.3	坏部 ヨコナデ→ケズリ 脚部 ヨコナデ→ケズリ	坏部 ミガキ 脚部 ヨコナデ→ケズリ	坏部内面黒色処理	37-17
7	C-868	土師器	坏	SI1853	床面	器高 3.0 口径 10.0 底径 7.2	口縁部 ヨコナデ 体部 ケズリ 底部 ケズリ	ミガキ	内面黒色処理	38-3
8	E-423	須恵器	甕	SI1856		残存高 6.9 口径 22.2	口縁部 ロクロ 体部 平行叩き目	口縁部 ロクロ 体部 当て具痕	自然釉がかかる	37-19
9	C-856	土師器	高坏	SI1848		残存高 3.8 口径 16.4	口縁部 ヨコナデ→ケズリ 体部 ケズリ	ミガキ	内面黒色処理 残存1/6	
10	F-82	軒丸瓦		SD1909	2a				単弁蓮華文	36-4
11	F-85	軒丸瓦			遺構検出面				単弁蓮華文	36-3

第21図 第128次調査区出土遺物 (1)



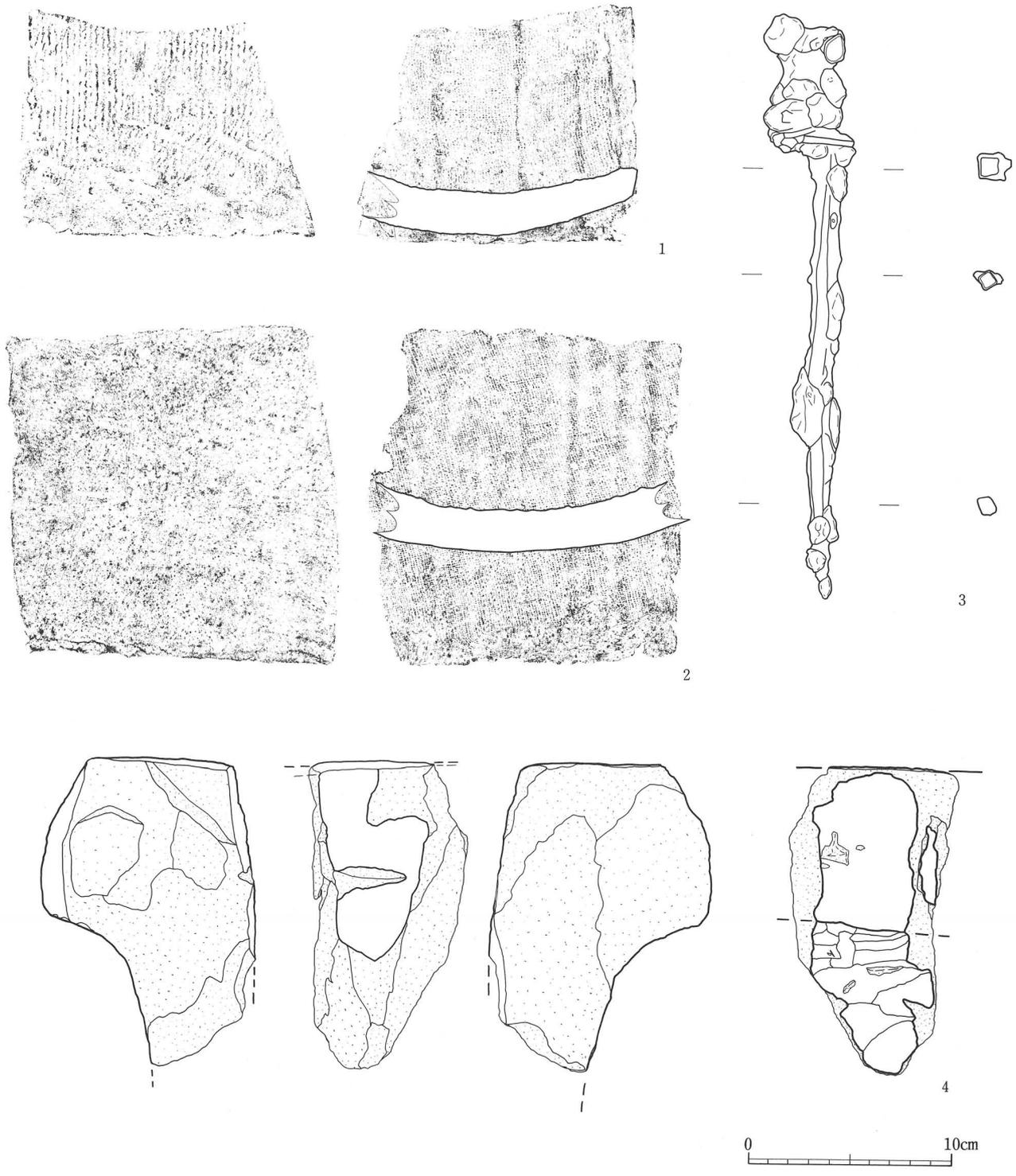
図版 番号	登録 番号	種別	器形	出土地点		法量 (cm)	外面調整	内面調整	備考	写真 図版
				出土遺構	層位					
1	C-864	土師器	坏	D区	SI1840	残存高4.6				37-15
2	E-425	須恵器	蓋	D区	SI1840 カマド周辺	残存高2.0 口径10.8	ロクロ→ケズリ	ロクロ		37-11
3	C-865	土師器	坏	D区	SI1840	残存高5.3 口径(17.0) 底径(4.0)	口縁部:ヨコナデ 体部:ヨコナデ →ヘラケズリ 底部:ヘラケズリ	ミガキ	内面黒色処理 残存1/6	37-16
4	C-863	土師器	甕	D区	SI1840	残存高11.9 口径19.6	口縁部:ヨコナデ 体部:ハケメ→ヘラケズリ	口縁部:ヨコナデ 体部:ヘラナデ		37-8
5	C-866	土師器	甕	D区	SI1840 カマド周辺	器高20.9 口径17.0 底径5.7	口縁部:ヨコナデ 体部:ハケメ→ヘラ ナデ・ヘラケズリ 底部:ヘラケズリ	口縁部:ヨコナデ 体部:ヘラナデ・ナデ		37-7
6	C-861	土師器	甕	D区	SI1840 カマド周辺	残存高8.5 底径8.0	体部:ヘラケズリ 底部:ヘラケズリ→棒状の工具痕	ヘラナデ		37-10
7	C-862	土師器	甕	D区	SI1840	残存高9.0 底径9.4	体部:ハケメ 底部:木葉痕	ナデ・ヘラナデ		37-9
8	K-235	石製品	礫石器	D区	SI1840	最大長14.85 最大厚5.85			敲打痕 押痕あり	37-13
9	K-236	石製品	礫石器	D区	SI1840	最大長17 最大厚6.95			中心部に敲打痕あり	37-12

第22図 第128次調査区出土遺物 (2)



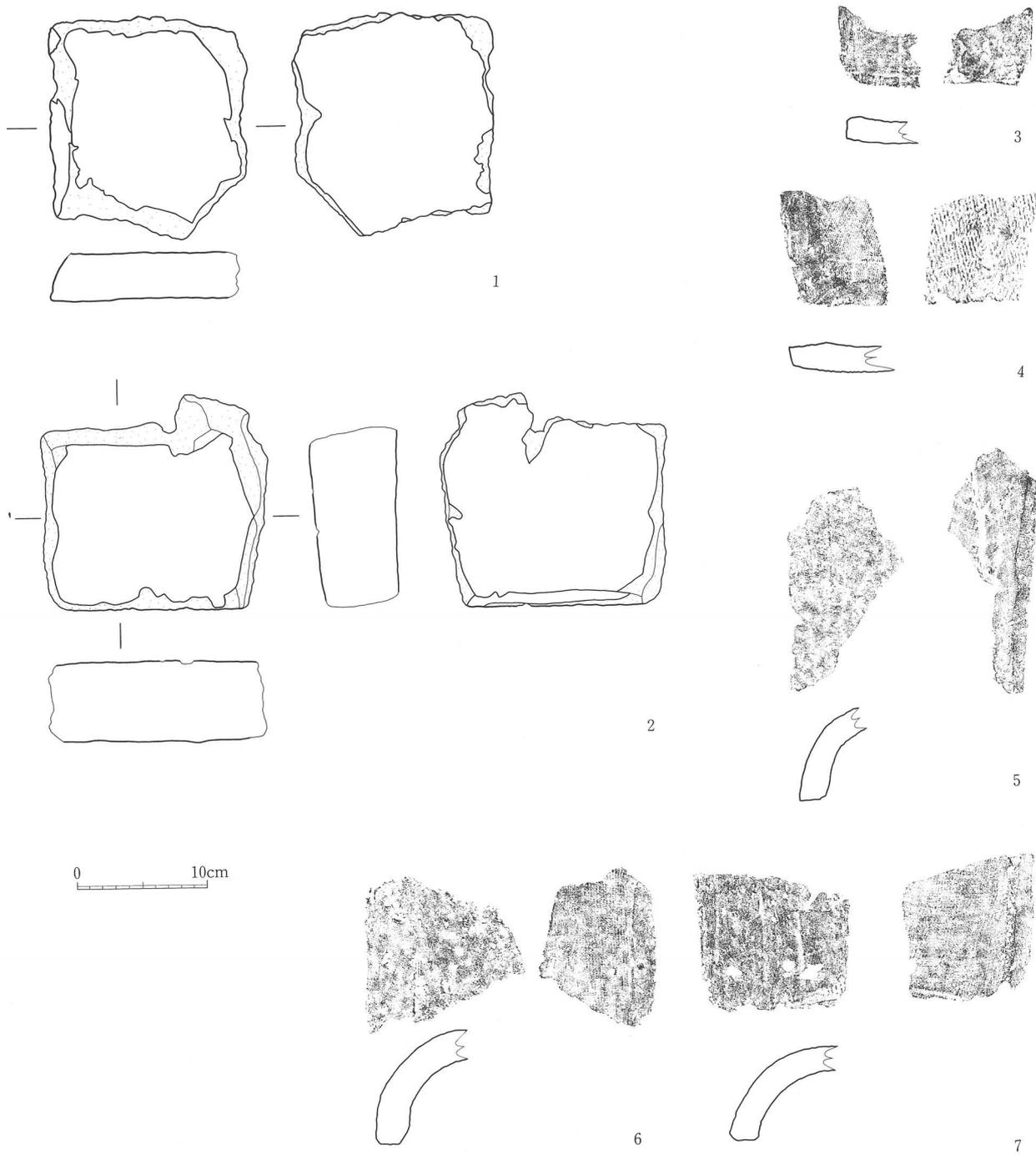
図版番号	登録番号	種別	器形	出土地点		法量(cm)	外面調整	内面調整	備考	写真図版
				出土遺構	層位					
1	B-287	弥生土器	壺	C区	カクラン	残存高4.4	沈線上ミガキ	ミガキ		
2	B-288	弥生土器	壺	C区	遺構検出面	残存高2.7 厚(0.5)	沈線上ミガキ	ミガキ		
3	I-48	陶器	甕	B区	SD1858	残存高7.2	ロクロ	ロクロ	外面にうわぐすり	
4	C-854	土師器	灯明皿	A区	SK1917	器高1.6 口径6.3 底径3.6	ロクロ 底部：回転系切り	ロクロ		36-13
5	I-47	陶器	灯明皿	B区	SK1854	1 器高1.6 口径5.3 底径3.0	ロクロ 底部：回転系切り	ロクロ		38-7
6	E-421	須恵器	蓋	B区	SD1919	残存高1.4 口径8.2	ロクロナデ・ヘラケズリ	ロクロナデ		38-1
7	C-855	土師器	坏	B区	SD1857	1 器高1.6 口径6.6 底径4.0	ロクロ 底部：回転系切り	ロクロ		36-10
8	I-45	陶器	摺鉢	B区	SD1857	1 残存高6.0 口径(14.9)	ロクロ	ロクロ 体部に筋目		
9	I-44	陶器	摺鉢	B区	SD1857	1 残存高5.5 口径(13.4)	ロクロ	ロクロ 体部に筋目		
10	I-50	陶器	皿	B区	SD1857	埋土 器高3.1 口径12.4 底径5.9	ロクロ 底部：回転系切り	ロクロ		36-12
11	C-853	土師器	坏	A区	SD1857	3 残存高5.2 口径(14.8)	口縁部：ヨコナデ→ハケメ ハケメ→ヨコナデ	ミガキ	内面黒色処理	
12	I-49	陶器	高台付皿	B区	SD1857	埋土 器高3.3 口径13.6 底径7.0	ロクロナデ	ロクロナデ	外面口縁から内面にかけて軸	36-11
13	P-49	土製品	羽口	C区	カクラン	残存長7.2 孔径2.1 幅2.2		ヘラケズリ		
14	P-48	土製品	獸脚	A区	遺構検出面	残存高5.2 幅2.5	ケズリ→指ナデ 底面：ヘラケズリ			
15	I-46	陶器	ほうろく	B区	SD1857	1 器高4.8 口径16.2 底径16.2	ロクロナデ 底面：回転系切り	ロクロナデ		

第23図 第128次調査区出土遺物(3)



図版 番号	登録 番号	種別	器形	出土地点		法量(cm)	調	整	備考	写真 図版
				出土遺構	層位					
1	G-91	平瓦	平瓦	A区	SD1909	2a				36-6
2	G-100	平瓦	平瓦	A区	遺構検出面					38-5
3	N-97	金属製品	不明品	A区	SD1858	長さ29.2 最大幅4.2 最小幅0.6				36-15
4	H-23	その他の瓦	鴟尾	A区	SB1880	掘り方				36-1

第24図 第128次調査区出土遺物 (4)



図版 番号	登録 番号	種別・器形	出土遺構	層位	外 面 調 整	内 面 調 整	備 考	写真番号
1	H-21	駒尾	SD1858		ヘラケズリ	ヘラケズリ		36-14
2	H-22	駒尾	SB1880 N2E2B		ヘラケズリ	ヘラケズリ		36-2
3	G-98	瓦・平瓦	SD1909		ヘラケズリ	布目痕、ヘラケズリ		
4	G-94	瓦・平瓦	SD1857	上	縄叩き	布目痕、ケズリ		36-7
5	F-87	瓦・丸瓦	SD1857		ヘラケズリ	布目痕、ヘラケズリ		
6	F-86	瓦・丸瓦	SD1857	1	ヘラケズリ (叩き痕跡不明)	布目痕、ヘラケズリ		
7	F-81	瓦・丸瓦	SD1909		ヘラケズリ	布目痕		36-5

第25図 第128次調査区出土遺物 (5)

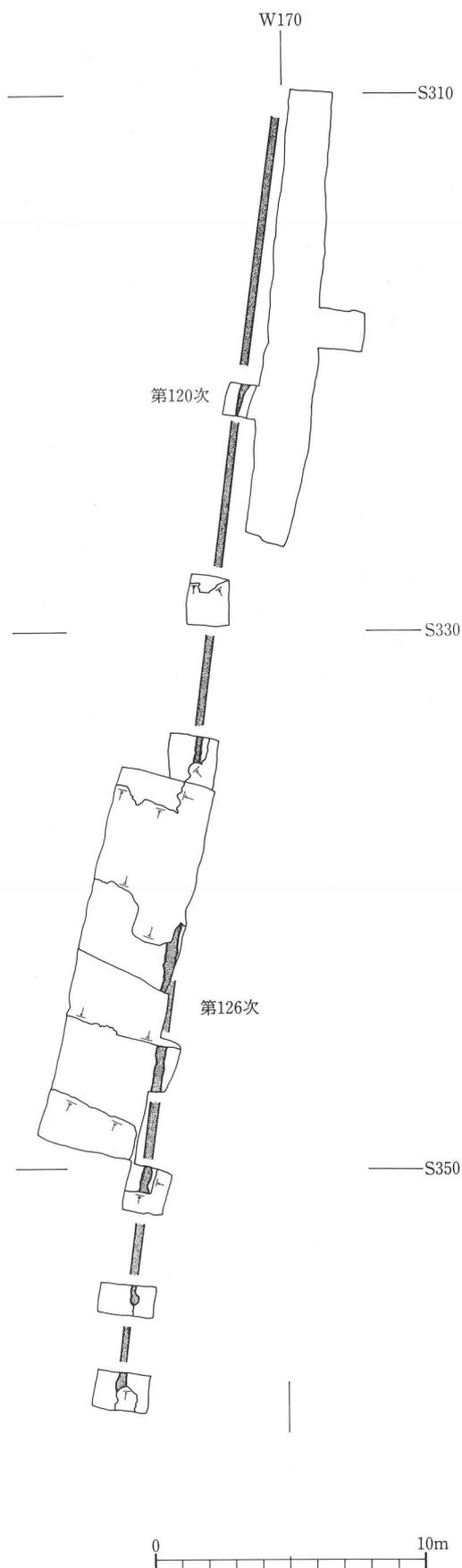
第126次・第128次発掘調査は、寺院の東辺部の延長と南辺を検出することを目的として実施した。昨年の第119次調査B区のSA177、第120次調査のSA1785材木列は、形状や検出された位置から一連の遺構と考えられ、寺院東辺を区画する材木列（塀）であろう。今年度の第126次調査でも、攪乱により残存状況は良好でないが、SA1785材木列の延長部が検出され、調査区内を縦断していた。調査区の制約はあったが、寺院北辺から156m伸びている箇所まで確認することができた。

第128次調査では、A～D区まで設定して調査したが、A区から寺院東辺と部分的に類似した規模、形態のSA1850材木列を検出し、さらに材木列の掘り方を跨ぐように周辺から複数の柱穴掘り方を検出した。

SA1850材木列はA区の東側では、第126次調査区のSA1785とほぼ同様の規模の遺構であるが、調査区中央では掘り方の幅が100～130cmと広くなっており、柱痕跡も検出されなくなる。ただしSB1880建物跡Bの柱穴掘り方が切っている。さらにこの建物跡の西妻の部分から新たに掘り方が掘られ、SA1850材木列にも箇所によって新旧2時期あることが明らかとなった。この箇所では建物の西妻の柱と材木列の材痕跡が接するように立てられており、掘り方も共有している。材木列の規模と形状から、東辺と同様の寺院南辺の材木列と考えられる。なおこの材木列はA区では検出されたが、B区では調査区と隣接地の境界付近に伸びているため、検出することはできなかった。

またこのSA1850材木列と平行して、A区、B区でSD1857溝跡が検出された。第1、2層からは17世紀代の陶器（註1）が出土し、材木列と併存し古代寺院の区画溝となるとは考え難い。しかし最下層の第3層からは、古代以外の遺物が全く出土せず、溝の開削された年代については検討を要する（註2）。

SB1880建物跡は、柱間の中央が230cmと広くなっており、その両側が140cmと狭くなっていることと、柱穴の配置から「八脚門」と考えられる。楼門、二重門になる可能性（註3）も考えられるが、古代の寺院跡で南門が重層の門になる類例は、未だ見当たらないので（註4）、ここでは単層の八脚門と報告しておく。この門跡は2時期ありA（旧）→B（新）へと建て替えられている。N2E3B柱穴掘り方底面で直径20cm程の柱痕跡を検出した。検出された位置とBの柱痕跡の重複関係から、A期の柱痕跡と見られる。この柱痕跡のみB期の柱痕跡とやはずれが見られるが、他の柱穴掘り方では掘り方同士がほぼ重複しており、A期の門跡も同規模の建物であったと推定される。



第26図 SA1785材木列 (1/250)

N2E2B柱穴掘り方埋め土からは、鷗尾の破片が出土した。これまで門に鷗尾が葺かれていたという例を管見の限りでは知られていない。金堂や講堂などの主要な建物に用いられていたものと考えられる。寺院の主要な建物の屋根が倒壊しないと、このようなことは考えにくいであろう。

またこれらの遺構の他に第128次調査C、D区で、竪穴住居跡と一本柱列を検出した。出土した遺物からは、官衙、寺院の時代から大きく隔たる時期の遺構とは見られないが、詳細な時期決定は今のところ難しいであろう。ただD区のSA1845一本柱列（堀）がSI1856竪穴住居跡の南を遮蔽するように配置され、SA1845の方向が寺院南辺のSA1850材木列とほぼ同じ方向であることは、寺院と同じ時期にSA1845とSI1856が、存在した可能性を想起させる。他の竪穴住居跡の重複と配置からは、2～3時期の変遷が考えられ、寺院とともにこれらの竪穴住居跡がある時期共存していたことは充分考えられるであろう。

- 註1 I-49皿は17世紀前半代の美濃産の織部皿、I-50皿は17世紀代の岸窯系の皿という見解を当市文化財課佐藤洋氏より得た。
- 註2 郡山廃寺の周囲に区画溝が存在するかどうかについては、以前より検討の必要を指摘してきた。  
仙台市文化財調査報告書第234集『郡山遺跡XIX—平成10年度発掘調査概報—』V第119次・第120次発掘調査 P26
- 註3 SB1880建物跡のように、梁行の寸法が桁行きの通り間以外の寸法より長い八脚門について、楼門とした例がある。  
秋田県文化財調査報告書第289集「弘田柵跡II—区画施設—」1999. 3  
仙北町 史跡弘田柵跡（ふるさと「歴史の広場」）事業計画報告書 1991. 3
- 註4 7世紀代に遡る南大門の中での意である。今回発見された門が南大門に相当するかどうかについては「X 第4次5ヶ年調査の総括」で若干の検討を加えた。

## V 第127次発掘調査

### 1. 調査経過

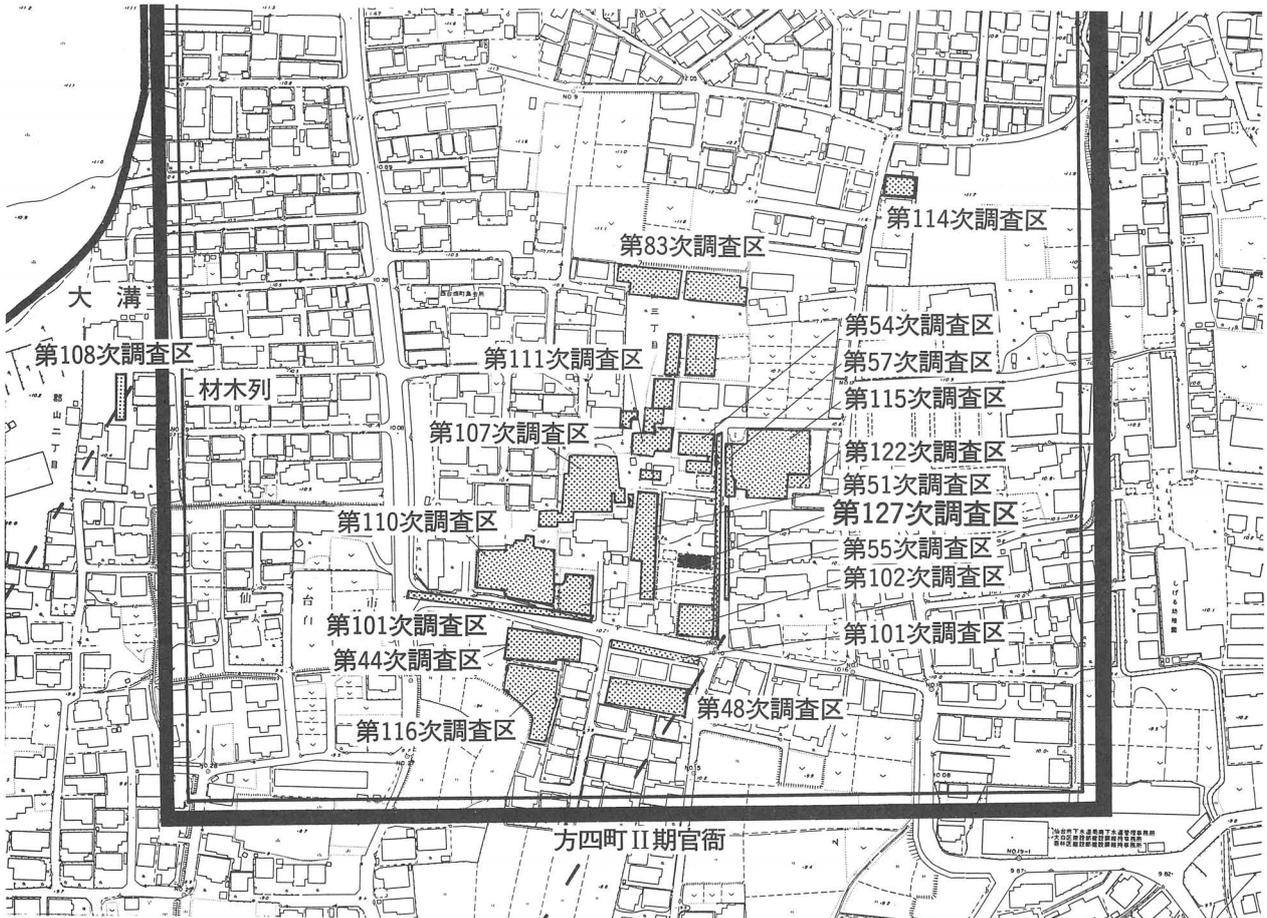
第127次調査は、方四町II期官衙の中央やや南寄り、中枢部やや東よりに位置している。これまでに周辺で行われた調査には第51次、第55次、第102次、第107次、第110次などがある。これらの調査成果をもとに、方四町II期官衙の中枢部の様相は、棟を揃えた建物跡の列がSB1250四面廂付建物跡(政庁正殿)を挟んで東西両側に配置されることが推定されている。本調査区の西に隣接する昭和60年度に行われた第51次調査でもII期官衙仮想中軸線上にあるにもかかわらずII-A期と考えられる遺構は発見されていない。このことから政庁域中央部が広場状の空地となっていることが想定され、中枢部の様相を再確認するために今回の調査を実施した。

調査地の現況は、農業用のビニールハウスの建つ畑地である。地権者との協議により現状のままハウス内部を調査することになった。表土の厚さは0.6~0.7m程である。6月14日より表土排除を行ったが、このような状況のため、表土排除ならびに排土場への運搬、その後の遺構検出作業が困難であった。埋め戻し及び整地作業など全ての作業が終了したのは8月2日である。

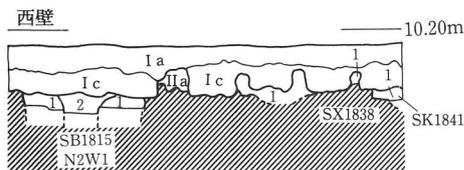
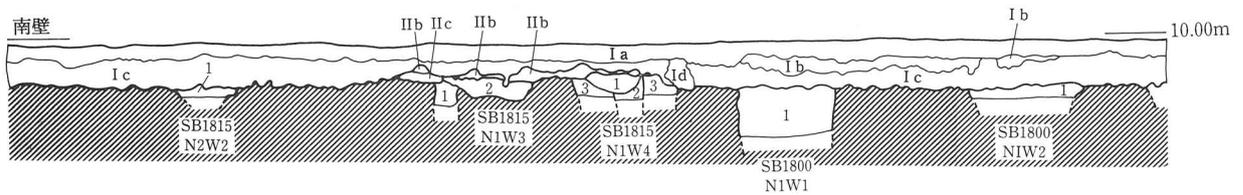
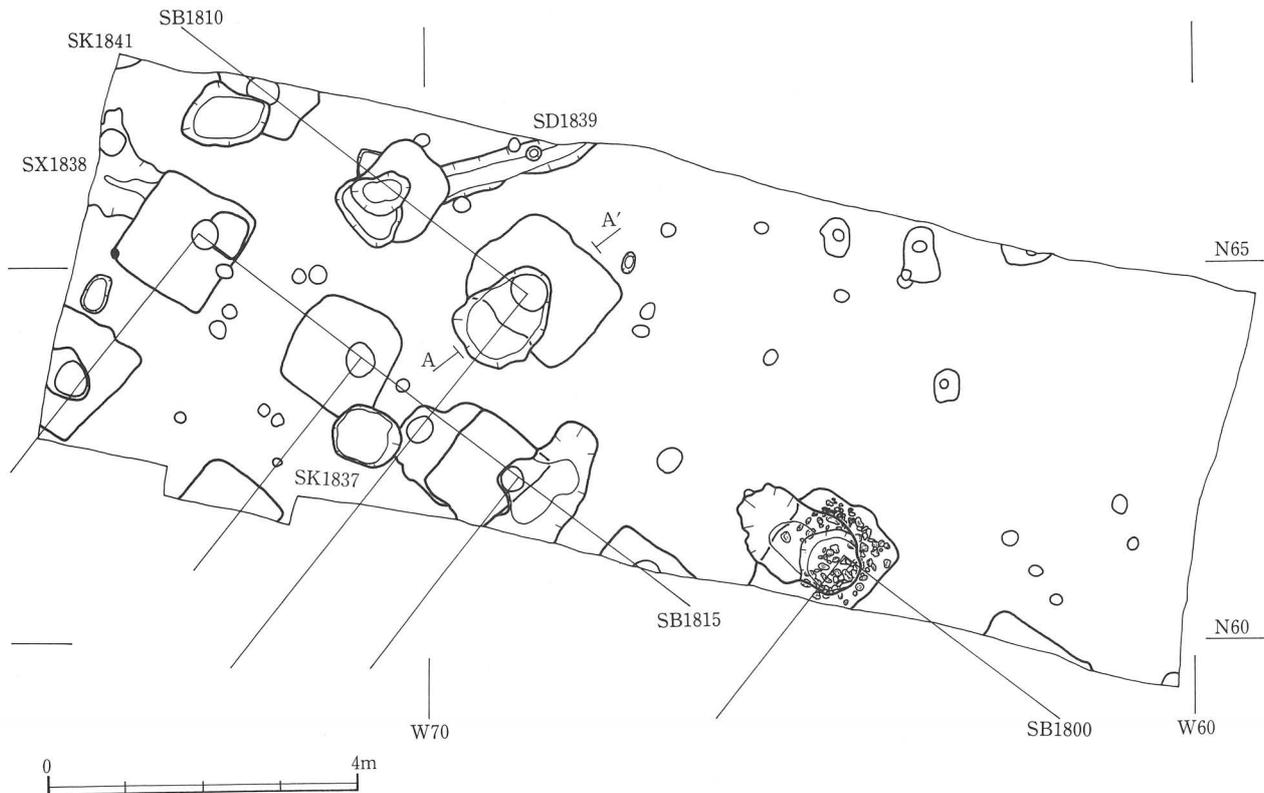
### 2. 発見遺構・出土遺物

今回の調査で発見された遺構は、掘立柱建物跡3棟、溝跡1条、土坑2基、性格不明遺構1、ピットなどである。これらの遺構は基本層位第III層上面で検出した。

**SB1800掘立柱建物跡** 調査区の東半で検出した東西2間以上の掘立柱建物跡である。方向は東西列(柱穴掘り方北辺)でE-28°-Sである。柱穴はN1W1、N1W2柱穴のみの検出であるが、掘り方はともに一辺約140cmの隅丸方形と推定される。



第27図 第127次調査区位置図



西壁・南壁

遺構名	層位	土色	土性	備考
基本層位	Ia	10YR3/4 暗褐色	シルト	現在の耕作土
	Ib	10YR3/4 暗褐色	シルト	現在の耕作土の中に下層の土が混じる
	Ic	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	天地返し下層
	Id	10YR5/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	耕作土、上層からの掘り込み
	IIa	N5/0 灰色	粘土質シルト	西壁中央のみ黄褐色粘土 (III層) を粒状に含む
	IIb	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	III層の上ののる、南壁のみ
	IIc	10YR2/2 黒褐色	粘土	遺構の可能性あり、南壁のみ、黄褐色粘土 (III層) をブロック状に含む
SX1838	1	N4/0 灰色	粘土	酸化鉄を多量に含む
SK1841	1	10YR5/3 にぶい黄褐色	シルト質粘土	黄褐色粘土 (III層) を斑状に含む
<b>SB1800</b>				
N1W1	掘り方 1	10YR7/6 明黄褐色	シルト	暗褐色粘土をブロック状に含む
N1W2	掘り方 1	10YR7/6 明黄褐色	シルト	暗褐色粘土をブロック状に含む
<b>SB1815</b>				
N2W1	掘り方 1	10YR8/3 浅黄褐色	粘土	褐色粘土をブロック状に含む
	抜き取り穴 2	10YR4/1 褐色	粘土	
N2W2	掘り方 1	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土	浅黄褐色粘土を少量含む
N1W3	掘り方 1	10YR7/6 明黄褐色	シルト	暗褐色粘土をブロック状に少量含む
	抜き取り穴 2	10YR3/3 暗褐色	粘土	明黄褐色シルトを斑状に多量に含む
N1W4	抜き取り穴 1	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土	明黄褐色シルトを少量含む
	柱痕跡 2	10YR3/1 黒褐色	粘土	明黄褐色シルトを少量含む
	掘り方 3	10YR7/6 明黄褐色	シルト	暗褐色粘土をブロック状に多量に含む

第28図 第127次平・断面図 (1/100)

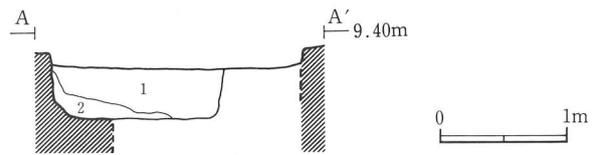
N1W1柱穴は掘り方底面あるいは柱痕跡が接する掘り方下部の周辺に円礫が多量に詰めこまれている。N1W1柱穴には抜き取り穴が伴って検出された。柱痕跡は65～70cmである。埋土は明黄褐色シルト、暗褐色粘土などである。

遺物は、N1W1柱穴抜き取り穴より土師器の小破片が2点出土した。

**SB1815掘立柱建物跡** 調査区の西半で検出した東西3間以上（総長7.2m以上、柱間寸法215～260cm）、南北1間以上（総長3.6m以上、柱間寸法260cm）の総柱建物跡である。方向は東西柱列でE-31°-Sである。柱穴の掘り方は約140×145cmの方形で、柱痕跡は30～45cmである。残存する柱穴の深さは3～32cmである。埋土は、明黄褐色シルトなどである。

遺物は、N1W3柱穴より土師器の小破片が2点出土した。

**SB1810掘立柱建物跡** 調査区の西半で検出した東西2間以上（総長4.7m以上、柱間寸法215～230cm）、南北2間以上（総長3.6m以上、柱間寸法230cm）の掘立柱建物跡である。方向は東西柱列でE-31°-Sである。柱穴はN1E1柱穴掘り方が約140×150cmの隅丸方形で、それ以外はやや小さく一辺約100cm程度の隅丸方形となる。柱痕跡は35～50cmである。N1E1、N1E2柱穴には抜き取り穴が伴って検出された。埋土は明黄褐色粘土質シルト、褐灰色粘土などである。



遺物はN1E1柱穴抜き取り穴より土師器の小破片が2点出土した。

遺構名	層位	土色	土性	備考
N1E1	1	10YR7/6 明黄褐色	粘土質シルト	灰黄褐色粘土を粒状に多量に含む
	2	10YR4/1 褐灰色	粘土	黄褐色粘土をブロック状に含む

第29図 SB1880N1E1柱穴抜き取り穴断面図 (1/60)

**SD1839溝跡** 上幅45cm、底面幅18～26cm、断面形は扁平な逆台形の溝跡である。壁は緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。方向はE-15°-Nで、検出した総長は約2mで調査区北側に伸びている。遺物は出土しなかった。

SB1810N1E2柱穴に切られており、これより西側では検出されなかった。

**SK1837土坑** 長軸0.90m、短軸0.75mのほぼ円形を呈する土坑で、深さは10～15cmである。西壁は直立気味に立ちあがるが、東壁は緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。堆積土は黒褐色粘土質シルトである。遺物は出土しなかった。

**SK1841土坑** 調査区北東隅で遺構の一部を検出したが、詳細は不明である。SB1810を構成する柱穴の掘り方または抜き取り穴になる可能性がある。遺物は出土しなかった。

**SX1838** 調査区西端から舌状に突出するよう検出された遺構であり、全体の形状は明らかでない。堆積土は酸化鉄を多量に含む灰色粘土である。遺物は出土しなかった。

SB1815N1W1柱穴に切られる。

### 3. まとめ

今回発見されたSB1815、SB1810は、造営基準方向がE-31°-S (N-31°-E) であり、SB1800も柱穴北辺での方向ではあるがほぼ同様の方向を示すことから、すべてI期官衙に関わる遺構であると考えられる。これらの建物跡は、検出された柱穴の状況や第51次調査、第107次調査において検出された掘立柱建物跡と軒を並べて造営されている（註1）ことから、それらの建物と同様にI期官衙中枢部南の倉庫群を構成する建物の一部と見ておきたい。SB1810とSB1815の新旧関係については、今回の調査区においては明らかにできなかったが、第107次調査において検出された同様の建物がSB1595（総柱建物）→SB1605（側柱建物）への変遷をしていることから、今次調査の建物の変遷もSB1815（総柱建物）→SB1810（側柱建物）と考えておきたい（註2）。しかし、SB1810が第51次調査区で検出されたSB702に相当するかどうかについては、今回の調査が狭い範囲の調査であったために同一の建物になる

とは断定しないでおく。この点については今後の調査成果の蓄積を待って検討していきたい。

また、この調査区からはII期官衙に関わる遺構は発見されなかった。これにより方四町II期官衙中枢部がこれまで想定したとおり広場状の空地となっていることが再確認された。今後ともこの周辺での調査を積み重ね、中枢部の様相をより明らかにしていきたい。

註1 第40図 I 期官衙主要遺構配置図 (1/600) P49、50参照

註2 仙台市文化財調査報告書第210集 「郡山遺跡XVI—平成7年度発掘調査概報—」1996.3 P45、46

## VI 第129次発掘調査

### 1. 調査経過

仙台市太白区郡山2丁目11-8佐藤正範氏より同地内において住宅の新築に伴う発掘届が、平成11年2月22日付けで提出された。遺構を損なわないような基礎工法での建築という内容であったが、後にパイル打ちを伴う工法へ変更する旨の申し入れがあった。当市教育委員会では発掘調査を含めた対応を協議していたが、施工業者間の連絡の不備により、調査予定地内で一部の工事が開始された。そのため工事の中断を指示し、平成11年5月24日付けで業者より説明を求め、改めて変更された施工内容での発掘届を平成11年5月25日付けで提出を受けた。それにより敷地内で第129次調査を実施するに至った。

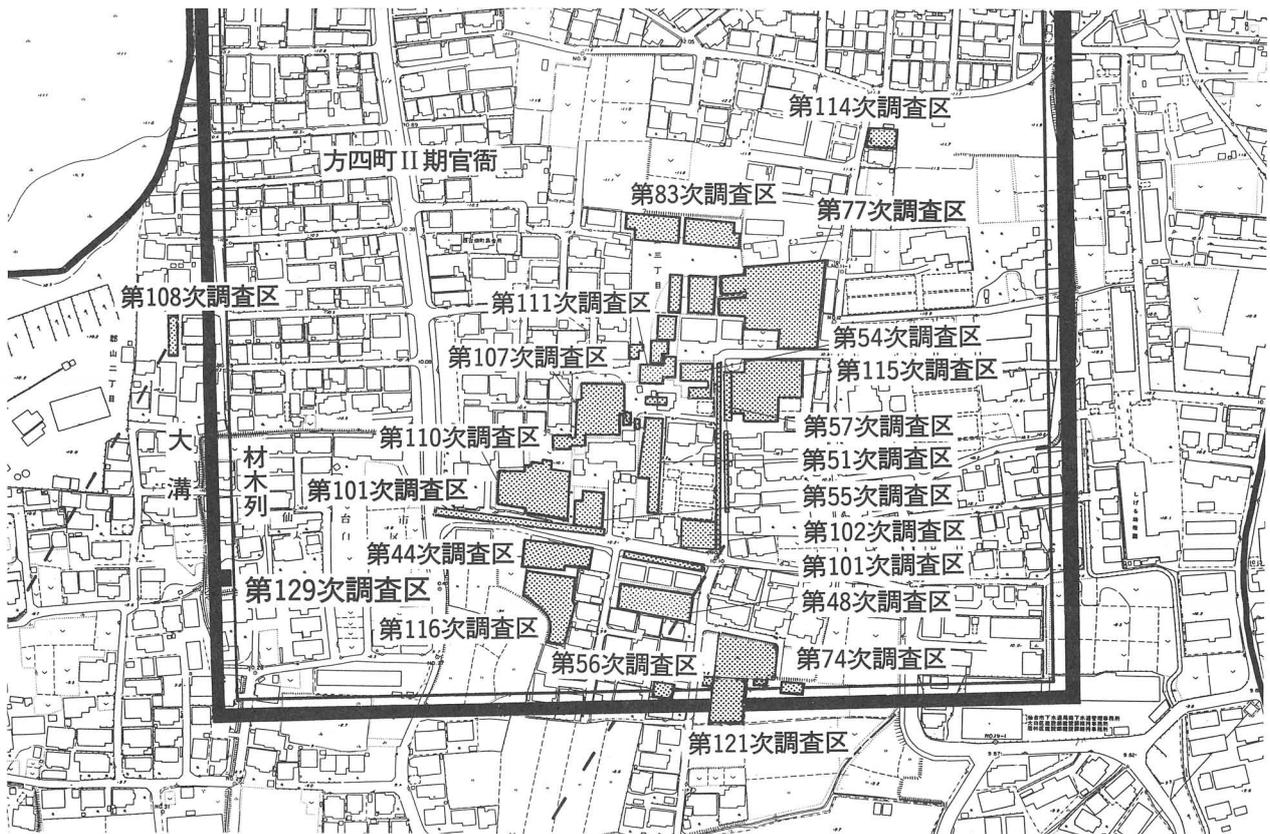
調査地点は方四町II期官衙の西辺外郭上で、かつI期官衙の西部に位置している。前述の125次調査区の南東方50mに位置している。

調査区は住宅の建築される部分を対象に東西11m、南北3mの調査区を設定し、平成11年7月7日に表土排除を実施した。さらに調査区の北側を東西7m、南北2mの範囲で拡張し、現況より深さ0.8~1.3mで遺構を検出し、調査は8月11日に終了した。

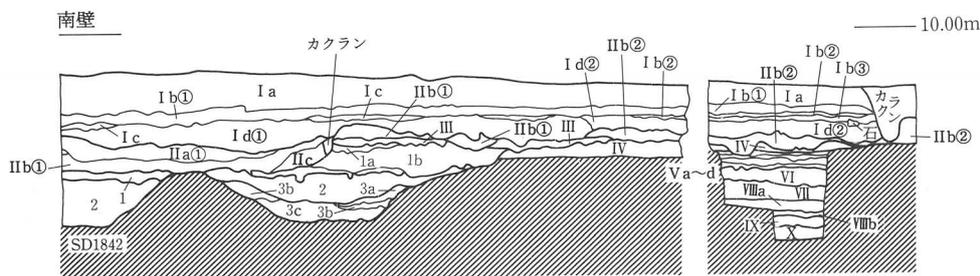
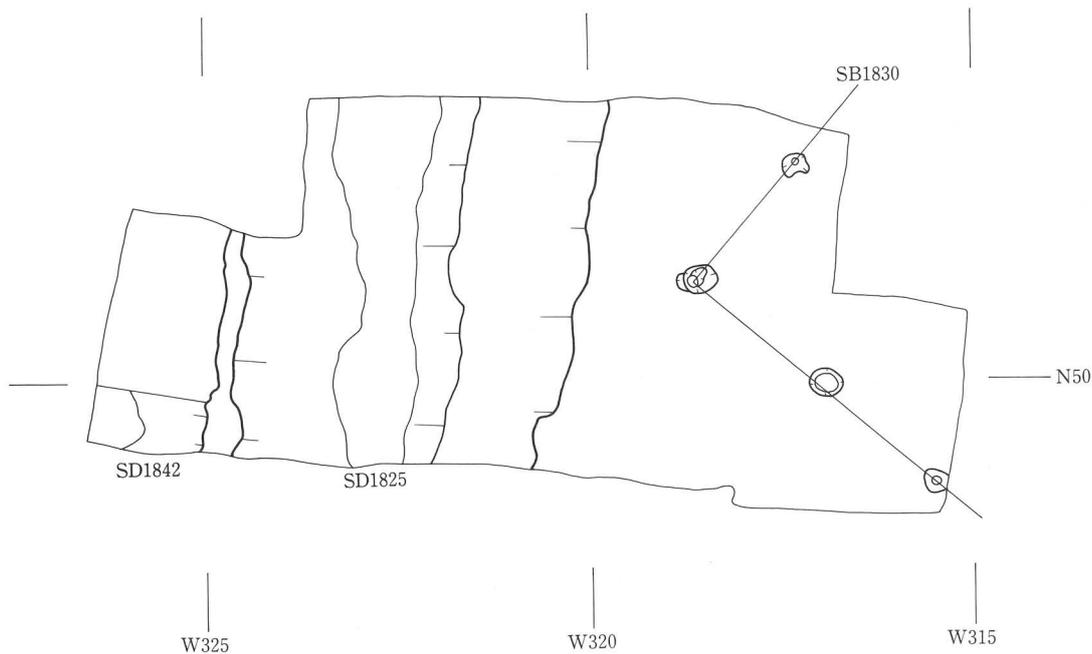
### 2. 発見遺構・出土遺物

今回の調査で発見された遺構は、掘立柱建物跡1棟、溝跡2条である。これらの遺構は基本層位IV層上面で検出した。

**SB1830掘立柱建物跡** 調査区の東半で検出した東西2間以上(総長4.3m以上、柱間寸法推定105cm)、南北2間以上(総長2.5m以上、柱間寸法205cm)の掘立柱建物跡である。方向は南北柱列でN-23°-Eである。柱穴は約35×40cmの隅丸方形で、柱痕跡は10~20cmである。柱穴の深さは3~32cmである。埋土は、黒褐色粘土、オリーブ黒粘



第30図 第129次調査区位置図



遺構名	層位	土色	土性	備考
基本層位	Ia			盛土
	Ib①	10YR3/2 黒褐色	シルト	全体に炭粒を細かく、多く含む
	Ib②	5Y4/1 灰色	シルト	
	Ib③	10YR3/1 黒褐色	シルト	炭化物を筋状に多く含む
	Ic	10YR4/1 灰褐色	シルト	炭粒を含む。(Ib①層より少ない)
	Id①	10YR5/2 灰黄褐色	砂質粘土	酸化鉄を全体に細かく含む
	Id②	10YR4/2 灰黄褐色	砂質粘土	Id①層がグライ化している
	IIa①	10YR5/1 褐灰色	粘土	棒状に酸化鉄を含む
	IIa②	10YR6/1 褐灰色	粘土	IIa①層より酸化鉄を多く含む
	IIa③	10YR5/2 灰黄褐色	細砂	全体に酸化鉄を多く含む
	IIb①	10YR5/2 灰黄褐色	粘土	全体にブロックで砂の塊を含む
	IIb②	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	グライ化進む
	IIc	10YR5/1 褐灰色	粘土	黄褐色、白色、黒色粘土が細かく混じる
	III	10YR3/1 黒褐色	粘土	遺物炭粒を含む
	IV	10YR7/8 黄褐色	粘土	3種類の不規則な土が混じっている
10YR8/4 浅黄褐色				
10YR5/1 褐灰色				
Va	10YR4/1 褐灰色	粘土	黄褐色粘土が混合する	
Vb	10YR7/2 におい黄褐色	粘土	灰色粘土が混合する	

遺構名	層位	土色	土性	備考
基本層位	Vc	10YR4/1 褐灰色	粘土	褐灰色、におい黄褐色粘土が綫状に混じる
		10YR7/2 におい黄褐色		
	Vd	10YR2/1 黒色	粘土	
	VI	10YR7/2 におい黄褐色	粘土	灰色粘土、酸化鉄が混入する
	VII	10YR6/2 灰黄褐色	粘土	灰色粘土、酸化鉄が混入する
	VIIIa	10YR5/1 褐灰色	粘土	全体に細かく炭粒を含む
	VIIIb	5Y5/1 灰色	粘土	VIIIa層がグライ化している
	IX	10Y5/1 灰色	粘土	グライ化している
	X	5Y4/1 灰色	粘土	グライ化している
	SD1842	1	10YR4/1 褐灰色	粘土
2		5Y4/1 灰色	粘土	
SD1825	1a	10YR5/2 灰黄褐色	粘土	1a層下に火山灰が堆積する
	1b	10YR4/1 褐灰色	粘土	炭粒、酸化鉄を含む
	1c	10YR4/1 褐灰色	粘土	1b層より粒子が粗い
	2	10YR5/1 褐灰色	粘土	全体に酸化鉄を含む
	3a	10YR3/1 黒褐色	粘土	灰白、黄褐色粘土を含む
	3b	10YR5/1 褐灰色	粘土	グライ化している
	3c	N4/0 灰色	粘土	グライ化している

第31図 第129次調査区平・断面図 (1/100)

土質シルトなどである。

遺物はN1W3柱穴より土師器小破片が1点出土した。

**SD1825溝跡** 上幅270～300cm、底面幅60～130cm、断面形は扁平な逆台形の溝跡である。壁は緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。方向はN-4°-Wで、検出した総長は4.95mである。堆積土は褐灰色粘土、灰色粘土などで自然堆積層と考えられる。

遺物は、1b層中より高坏1点、2層中より高坏1点、須恵器甕1点、3層直上より土師器甕1点が出土し、その他堆積土中より土師器片・須恵器片が出土している。

西壁をSD1842に切られている。

**SD1842溝跡** 上幅1.5m以上、底面幅45～70cm以上、断面形は東側の壁の状況から扁平な逆台形の溝跡であると推定される。壁はSD1825溝跡よりやや急に立ち上がっている。底面は平坦である。方向はN-0°-Eで、検出した総長は3.15mである。堆積土は褐灰色粘土、灰色粘土である。

遺物は、第2層下面より土師器、須恵器、陶器小片が出土している。

SD1825を切っている。

### 3. まとめ

この調査区からは方四町II期官衙の外郭西辺上にあり、区画施設となる大溝と材木列の発見を想定していた。SD1825はこれまで発見された外郭大溝と同様の形態を示し、狭い範囲の調査ではあるが古代以降の遺物が出土していないことから、西辺の外郭大溝と考えられる。SD1825溝跡（大溝）上端から調査区の東壁までは約5mほどであるが、平行して検出されるはずの材木列は発見されなかった（註1）。方四町II期官衙の西辺の材木列と大溝の状況については、昭和56年度第16次調査区でも南辺などの他の外郭とは異なる様相が指摘されている（註2）。西辺のあり方については今後の調査成果の蓄積を待って検討して行きたい。

SB1830掘立柱建物跡は小規模な柱穴の建物跡で、遺物についてもN1W3柱穴掘り方より土師器の小破片が出土したのみである。おおむね古代の時期と推定されるが、詳細な時期については明らかにできなかった。また、SD1842は遺構の底面より土師器片、須恵器片に混じって陶器の小破片が出土していることから、古代までは遡らない遺構であろう。

註1 仙台市文化財調査報告書第38集「郡山遺跡II－昭和56年度発掘調査概報－」第16次 P55 材木列中心から落ち込み上端までは4.45mで、材木列と大溝の心心間隔が8.5～8.8m（30尺）とする。

註2 註1に同じ。

## VII 第130次発掘調査

### 1. 調査経過

第130次調査は、仙台市太白区六丁目5-9-502小野寺享氏より、太白区郡山6丁目225-6において住宅新築に伴う発掘届が、平成11年7月13日付けで提出された。住宅の基礎が遺構の検出面より深く、遺構を損なうため発掘調査を実施した。調査区は、住宅の建つ部分を対象に東西5m、南北5mの調査区を設定し、平成11年9月13日に表土排除を実施した。現況より深さ1.2mほどで遺構を検出し、調査は10月12日に終了した。

### 2. 発見遺構・出土遺物

今回の調査で発見された遺構は、竪穴住居跡1軒、溝跡2条、土坑1基、ピットなどである。これらの遺構は基本層位第IIIa層上面で検出した。

**SI1846竪穴住居跡** 東西2.5m以上、南北1.4mで、東辺での方向はN-43°-Eであるが、全体規模は不明である。底面までの深さは検出面より18~25cmほどであり、堆積土は黒褐色粘土質シルト、黄褐色粘土質シルトなどである。

遺物は掘り方埋め土より鉄鏃1点、その他土師器、須恵器片、石製品などが出土している。

**SD1843溝跡** 上幅55~60cm、底面幅30~40cm、深さ3~18cm、断面形はU字形の溝跡である。壁は緩やかに立ちあがり、底面はほぼ平坦である。方向はN-32°-Eである。検出した総長は1.6mほどで調査区北側に伸びている。堆積土は黒褐色粘土質シルトである。遺物は出土しなかった。

**SD1844溝跡** 上幅15~35cm、底面幅5~26cm、深さ9~20cm、断面形はおおむね逆台形の溝跡である。壁は東辺では緩やかに立ちあがるが、西辺ではほぼ垂直に立ちあがる。底面は平坦であるが、西半部に対して東半部が浅い。方向はN-2~3°-Eである。検出した総長は3.6mほどで調査区を南北に縦断している。堆積土は黒褐色粘土質シルトである。遺物は出土しなかった。

**SK1847土坑** 長軸1.7m、短軸1.2mの楕円形を呈する土坑で、深さは9~16cmである。壁は直立気味に立ちあがる、底面は多少の凹凸はあるがほぼ平坦である。

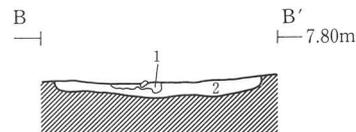
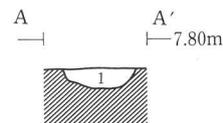
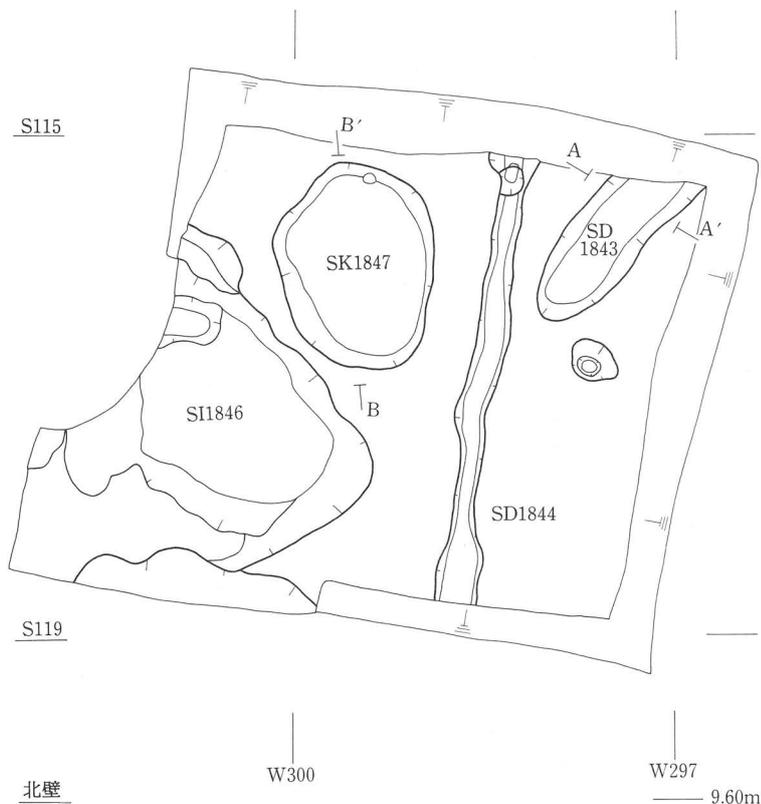
遺物は堆積土中より土師器片、石製品が出土している。

### 3. まとめ

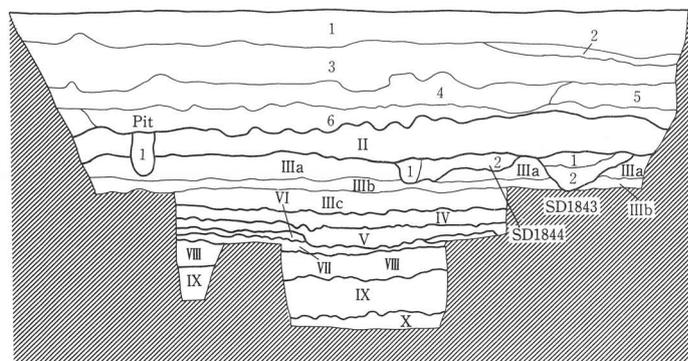
調査を実施した地点は、方四町II期官衙外の西南部にあたり、昨年度行われた第118次調査の南側、第124次調査の東側に隣接する。調査区が狭小であるため、敷地内での遺構の様相が全て明らかになったわけではないが、発見されたSI1846竪穴住居跡は、官衙の年代より降る遺物がまったく出土していないことや同様の規模、方向を示す建物跡や柱列が第124次調査区から発見されていることから、I期官衙と同時期の遺構の可能性が推定される。今後の周辺での調査成果の蓄積を待って検討していきたい。



第32図 第130次調査区位置図



層位	土色	土性	備考
<b>SD1843</b>			
1	2.5Y3/1 黒褐色	粘土質シルト	下層にかけて黄灰色土をブロック状に含む
<b>SK1847</b>			
1	10YR3/1 黒褐色	粘土質シルト	炭化物混入
2	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	第1層が小ブロック状に混入。基本層が混入。



遺構名	層位	土色	土性	備考
盛土	1			砂・碎石 (II層より上層は盛土整地層内での分層)
	2	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	
		7.5YR4/4 褐色	粘土質シルト	暗褐色土、褐色土、褐灰色土の混合層 (2~6 整地層)
		10YR5/1 褐灰色	粘土質シルト	
	3	10YR3/4 暗褐色		
	4	2.5Y5/1 黄灰色		グライ層
5	2.5Y4/2 暗灰黄色			
6	2.5Y5/2 暗灰黄色		グライ層	
基本層位	II	10YR3/1 黒褐色	粘土質シルト	
	IIIa	10YR3/1 黒褐色		暗褐色土、褐色土、褐灰色土が縞状に入る層
		10YR4/4 褐色	粘土質シルト	マンガン粒、酸化鉄が斑状に混じる
		10YR5/1 褐灰色		
	IIIb	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	黄灰色土がブロック状に混入
	IIIc	7.5YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	下層にかけて灰白土が混じる
	IV	10YR7/1 灰白色	粘土	灰白色土、黒色土、黄灰色土が縞文様状に入る層
	V	2.5Y4/1 黄灰色	粘土	部分的にIV層を含む、炭化物粒、マンガン粒、酸化鉄を斑状に含む
	VI	2.5Y6/3 にぶい黄色	粘土	マンガン粒・酸化鉄斑状に含む
	VII	2.5Y6/1 黄灰色	粘土	黄灰色土が縞文様状に入る、マンガン粒、酸化鉄斑状に含む
VIII	2.5Y6/2 灰黄色	粘土	下層にかけて黄灰色土が縞文様状に入る、マンガン粒・酸化鉄を斑状に含む	
IX	5Y4/1 灰色	粘土	酸化鉄含む	
X	10YR4/1 灰色	粘土	グライ化が進む	
SD1843	1	10YR2/2 黒褐色	粘土質シルト	
	2	10YR2/2 黒褐色	粘土質シルト	基本層のIII層をブロック状に含む
SD1844	1	10YR2/2 黒褐色	粘土質シルト	基本層のII層がブロック状に含む
	2	10YR2/2 黒褐色	粘土質シルト	基本層のII・III層が小ブロック状に含む
Pit	1	10YR5/2 灰黄褐色	粘土質シルト	基本層のII層がブロック状に含む

第33図 第130次調査区平・断面図 (1/60)

## VIII 第131次発掘調査

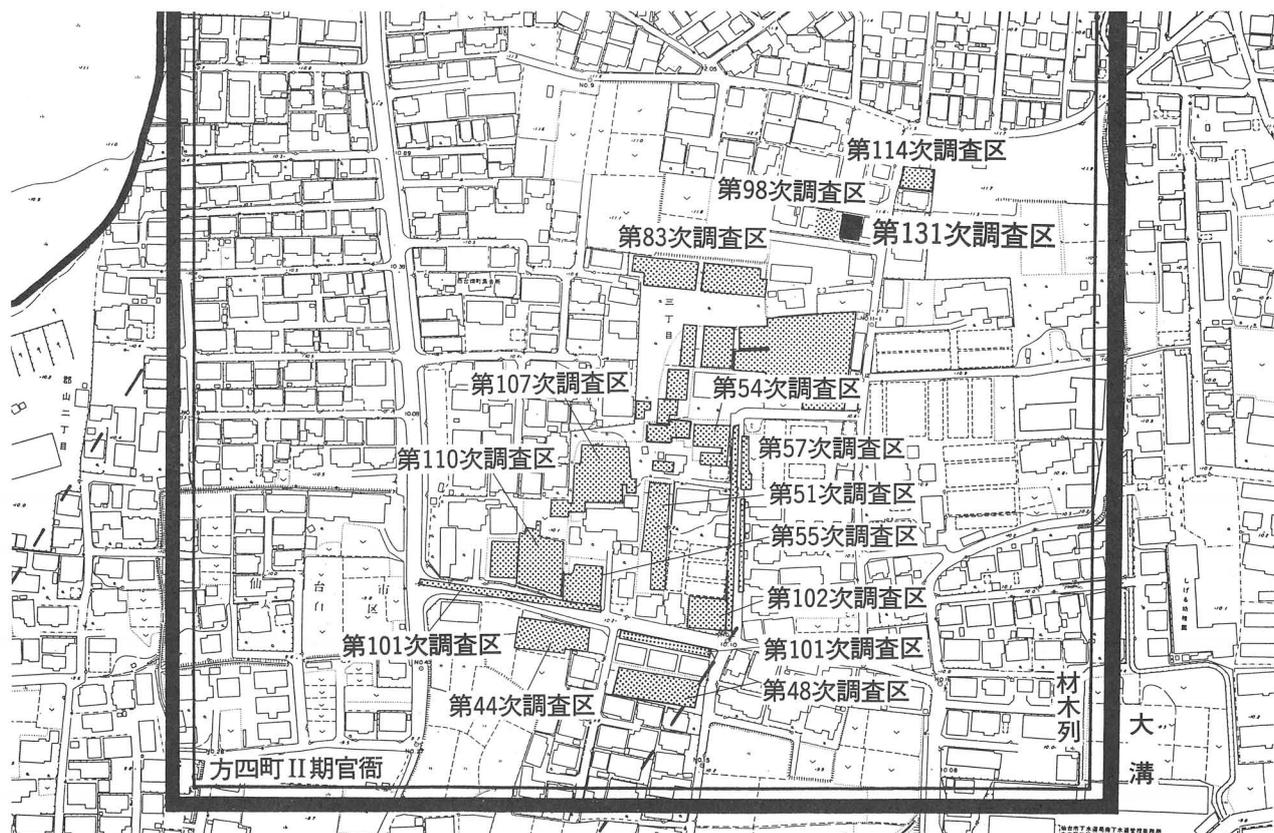
### 1. 調査経過

第131次調査は、仙台市太白区郡山三丁目22-17真壁慶子氏より、同地郡山三丁目120-8において住宅の解体新築に伴う発掘届が、平成11年6月29日付けで提出された。住宅の基礎が遺構の検出面より深く、遺構を損なうため発掘調査を実施した。調査区は、住宅の建つ部分を対象に東西3m、南北5mの調査区を設定し、平成11年11月30日に表土排除を実施した。現況より深さ0.8~1.0mほどで遺構を検出し、調査は12月17日に終了した。

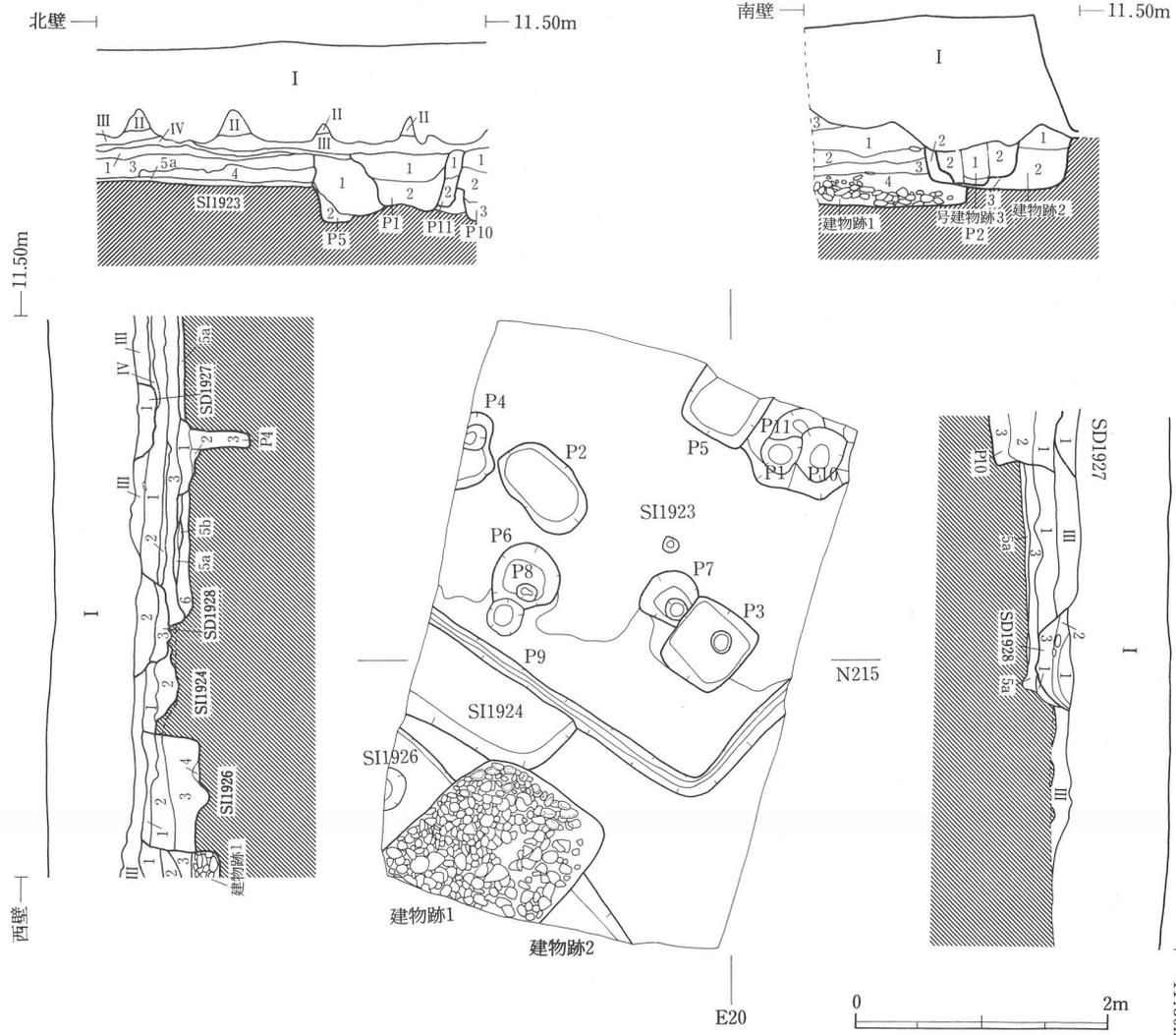
### 2. 発見遺構・出土遺物

第131次調査では、竪穴住居跡3軒、掘立柱建物跡3棟、溝跡2条が検出された。狭い調査区のためいずれも遺構の一部が検出されたにすぎず、遺構の全体や詳細については不明な点が多い。遺構の検出面は畑の耕作土（天地返し）・攪乱直下である。

SI1923竪穴住居跡 調査区のほぼ北半部で検出され、住居跡の規模は東西3.4m以上、南北3.2m以上の方形プランを呈するものと考えられ、東・北・西側は調査区外へと延びる。床面は2枚検出され、堆積土6層（第1次床面）と9層（第2次床面）が床面である（第35図）。第2次床面までの深さは検出面より約20~30cmである。堆積土は5層認められ、暗褐色シルトの中に黄褐色シルト・黒褐色シルトのブロックが斑点状に混入するもので、人為的に埋め戻された層である。周溝は第2次床面で検出され、幅約15~20cm、床面からの深さ約10cmで壁直下に巡る。床面・検出面で9個のピットが検出されている。P1、P10は住居跡検出面より掘り下げられたピットであり、P2、P3、P5は第1次床面の貼床上面でそれぞれ検出された。第2次床面上面で検出されたピットはP4、P7、P8、P9の4個であり、そのうちP4とP7は直径約15cmの柱痕跡が検出され柱穴と考えられる。柱の深さは床面よりP4で56cm、P7で45cmを



第34図 第131次調査区位置図



壁断面		備 考			
遺構名	層位	土 色	土 性	備 考	
基本層位	I			盛土および攪乱	
	I	10YR3/3 暗褐色	シルト	盛土および旧耕作土	
	II	10YR3/4 暗褐色	シルト	1層よりややしまる	
	III	10YR3/4 暗褐色	シルト	褐色シルトのブロックをやや多く含む	
SI1923	IV	10YR4/4 褐色	シルト	暗褐色シルトのブロックを含む、貼床か	
	1	10YR3/3 暗褐色	シルト	暗褐色シルトのブロックを多量に、黒褐色シルトのブロックを少量含む、焼土若干含む	
	2	10YR4/2 灰黄褐色	シルト	にぶい黄褐色シルトのブロックを多量に、黒褐色シルトのブロックを少量含む、上面に酸化鉄や集積	
	3	10YR3/3 暗褐色	シルト	にぶい黄褐色シルト、黒褐色シルトのブロックを含む、炭化物を若干含む	
	4	10YR3/4 暗褐色	シルト	にぶい黄褐色シルト、黒褐色シルトのブロックを多量に含む	
	5a	10YR6/3 にぶい黄褐色	シルト	しまりあり、貼床、黒褐色シルトのブロックをわずかに含む、下面に酸化鉄うすく集積	
SI1924	5b	10YR6/3 にぶい黄褐色	シルト	5a層と同様だが、ブロックのまじりがほとんどない	
	6	10YR5/4 にぶい黄褐色	粘土質シルト	暗褐色シルトのブロックを含む、SI1923掘り方埋土	
	1	10YR3/3 暗褐色	シルト	褐色土、黒褐色土をブロックで含む	
SI1926	2	10YR3/3 暗褐色	シルト	褐色土、黒褐色土をブロックで含む、炭化物をわずかに含む	
	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	黄褐色土とまじり合う	
Pit4	2	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	黄褐色土と黒色土の粘土質シルトがまじり合う	
	3	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	2層よりも黒色土のブロックが大きく、多く含む	
	4	10YR6/6 明黄褐色	粘土質シルト	黒色粘土質シルトを少量含む	
SD1927	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	にぶい黄褐色土、黒褐色土をブロックで含む。炭化物、焼土粒をわずかに含む	
	2	10YR3/3 暗褐色	シルト	にぶい黄褐色土、黒褐色土をブロックで含む	
	3	10YR3/3 暗褐色	シルト	2層と同じ、柱痕跡	
建物跡1	1	10YR3/3 暗褐色	シルト	礫 (3~10cm) を含む	
	2	10YR4/4 褐色	シルト		
	3	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	礫 (5~10cm) を含む	
建物跡2	1	10YR4/2 灰黄褐色	シルト	酸化鉄を霜降り状に含む、にぶい黄褐色土のブロックを含む	
	2	10YR3/4 暗褐色	シルト	明黄褐色土のブロックが混入	
	3	10YR3/3 暗褐色	シルト	にぶい黄褐色土の小粒がまじる	
建物跡3	1	10YR3/3 暗褐色	シルト	黄褐色土のブロックとまじる	
	2	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	黄褐色砂質シルトとまじり合う、さらに2~3cmから15cm程度の円礫を詰めている	
	3	10YR3/3 暗褐色	シルト	にぶい黄褐色土が多くまじる、かたい	
Pit	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	にぶい黄褐色、黒褐色シルトがまじる	
	2	10YR2/3 黒褐色	シルト	黒色土を含む	
Pit1	1	5Y5/1 灰色	砂質シルト	底面に酸化鉄を含む	
	2	10YR3/3 暗褐色	シルト	にぶい黄褐色小粒子が混入、かたい	
Pit5	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	褐色シルトをブロックで含む、焼土粒若干含む	
	2	10YR3/3 暗褐色	シルト	褐色シルトをブロックで含む、焼土粒若干含む	
Pit10	1	10YR3/3 暗褐色	シルト	にぶい黄褐色土の極小ブロックを多量に含む、炭化物・焼土粒をわずかに含む	
	2	10YR5/4 にぶい黄褐色	粘土質シルト	暗褐色土のブロックをわずかに含む、炭化物わずかに含む	
	3	10YR3/3 暗褐色	シルト	にぶい黄褐色土を大ブロックで多量に含む	
Pit11	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	にぶい黄褐色土を大ブロックで多量に含む	
	2	10YR3/3 暗褐色	シルト	にぶい黄褐色土を小ブロックで多量に含む	

第35図 第131次調査区平・断面図 (1/60)

測る。

遺物は、堆積土及びピット中より土師器坏、甕、須恵器甕の破片が出土している。

SI1924竪穴住居跡を切り、建物跡3、SD1927、1928溝跡に切られている。

**SI1924竪穴住居跡** 南東隅付近の一部が検出され、残存する規模は東西1.0m、南北0.6mで、平面形は方形を呈するものと考えられる。堆積土は2層に分けられ、暗褐色シルトでSI1923竪穴住居跡と同様人為的に埋め戻された層である。

SI1923竪穴住居跡と建物跡1に切られている。

**SI1926竪穴住居跡** 調査区の南西隅で検出され、遺構の一部が検出されたにすぎない。残存する規模は北辺で0.6m、検出面より床面までの深さは約40cmである。堆積土は3層に分けられ、にぶい黄褐色シルトの層で、中に黄褐色シルトと黒褐色粘土質シルトのブロックが斑点状に混入する、人為的に埋め戻された層である。

出土遺物は土師器の小破片、鉄滓が少量出土している。

建物跡1に切られている。

**建物跡1** 調査区南端で検出された掘立柱建物跡で、掘り方は1基だけが検出され建物跡の規模等の詳細については不明である。掘り方の大きさは南北1.5m以上、東西1.5mの長方形を呈し、検出面からの深さが

約60cmである。柱痕跡については不明であるが、掘り方内に直径10~20cmの礫を敷き詰めているもので、この地区でこれまで検出されているI期官衙の総柱の掘立柱建物跡と共通する特徴を示している。この掘り方の北側には同様のものが検出されなかったことから南側に展開する建物跡で、建物北辺の掘り方と考えられる。

建物跡2、3に切れ、SI1924、1926竪穴住居跡を切っている。

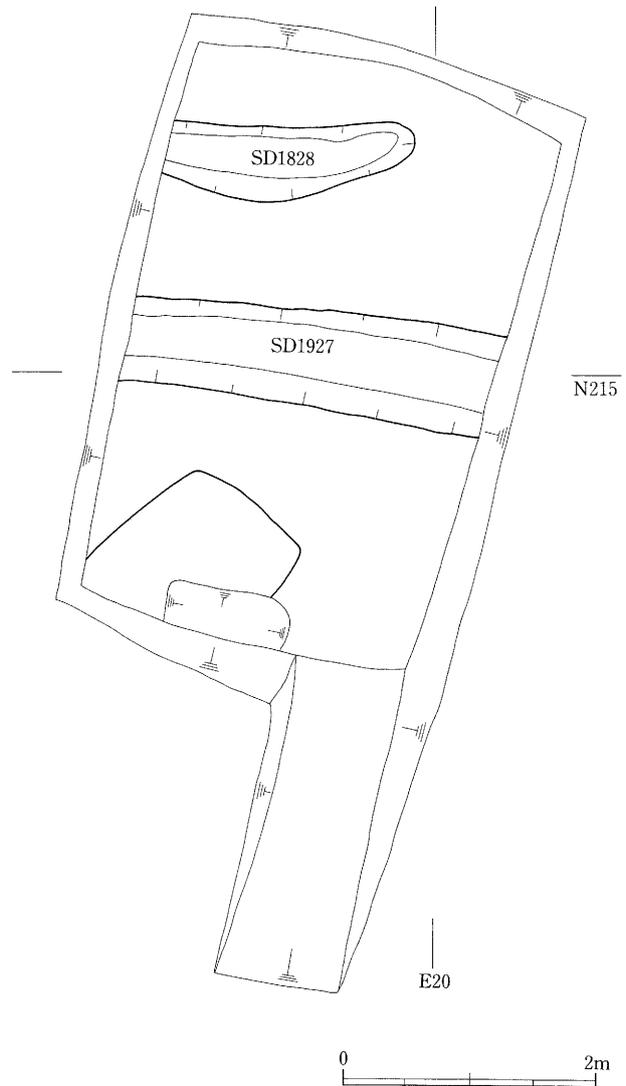
**建物跡2** 調査区南端で検出された掘立柱建物跡で、掘り方は1基のみ検出され、その大きさは南北80cm以上、東西70cmの長方形を呈するもので、検出面よりの深さは約40cmである。柱痕跡は建物跡3に切られているため検出されず、建物跡の規模や方向等詳細については不明である。

建物跡3に切れ、建物跡1を切っている。

**建物跡3** 掘り方は2基検出され南北2間以上の建物跡であるが、狭い調査区のため建物の規模や方向については不明である。掘り方の大きさは、P1が50~65cmの方形を呈し、柱痕跡は直径15~20cmである。P2は調査区南壁で検出され、柱痕跡は直径20cmで、柱間寸法は260cmである。

建物跡2、3とSI1923竪穴住居跡を切っている。

**SD1927溝跡** 調査区のほぼ中央で検出され東西に延る溝跡で、幅約80cm、検出面よりの深さ約30cmである。堆積土は3層に分けられ、褐色・にぶい黄褐色・灰黄褐色シルトである。2層中に5~10cmの礫を含む。堆積土中よ



第36図 SD1828・1927溝跡平面図 (1/60)

り土師器、須恵器の破片が出土している。

SI1923、1924竪穴住居跡を切っている。

**SD1928溝跡** 調査区北側に検出され、ほぼ東西に延る溝跡で、天地返しの攪乱により遺存状態は良くないがSD1927溝跡の北側に平行して検出された。堆積土は1層で暗褐色シルトで直径3～10cmの礫を含む。

SI1923竪穴住居跡を切っている。

### 3. まとめ

発見された遺構は、竪穴住居跡3軒、掘立柱建物跡3棟、溝跡2条である。調査区が狭小であるため遺構の全容は明らかではないが、竪穴住居跡と掘立柱建物跡の柱穴掘り方の方向はN-27～38°-Eの範囲におさまるものが多く、I期官衙の遺構である可能性が高い。この掘立柱建物跡の建物跡1の柱穴は、掘り方内に礫を詰め込んだ構造となっており、この上に直接、柱が立てられていたと考えられている(註1)。これまでの調査では、第24次調査のSB245、373、第31次調査のSB344、第51次調査のSB700(註2)などのI期官衙の総柱建物跡の柱穴で検出されている。今回の調査区では柱穴1基のみなので断定することは難しいが、それ以外の形態の建物跡では礫を詰めた柱穴が遺跡内では発見されていないので、建物跡1の柱穴もI期官衙の総柱建物跡の一部と見ておきたい。

I期官衙の総柱建物跡は、I期官衙中枢部の南と北に接して広がっており、倉庫群を形成している(註3)。それらの中には第24次調査のSB237、245、246、第51次調査のSB700、701、第107次調査のSB1595、1605などのように、同位置でI期官衙の柱穴が重複している箇所がある。おそらく今回検出された建物跡1から3までの柱穴も、同じ様な状況を示す可能性があるだろう。

竪穴住居跡については、年代の検討が可能な遺物の出土が少ないが、おおむね官衙から出土する遺物と同じ特徴を示しているので、I期官衙に取り込まれ、同時期に併立したもの(註4)と見ておく。また溝跡については、検出状況から竪穴住居跡より新しいものであるが、方向や出土した遺物からII期官衙の時期となる可能性を含め、古代の範疇に含まれる遺構と見ておく。

註1 仙台市文化財調査報告書第46集「郡山遺跡Ⅲ－昭和57年度発掘調査概報－」 1983. 3 P51

註2 第40図 I期官衙主要遺構配置図参照 P49、50

註3 第39図 I期官衙全体図 P47

註4 第35次調査では、I期官衙の掘立柱建物跡と竪穴住居跡(竪穴建物跡)が軒をそろえるように配置され、官舎の一部を構成していた可能性がある。第40図 I期官衙主要遺構配置図参照 P49、50

## IX 総 括

今年度は第4次5ヶ年計画の第5年次目にあたり、7世紀末から8世紀初めにかけての方四町II期官衙と同時期の郡山廃寺の範囲を明らかにすることを主目的として発掘調査を実施した。またこれまで土地利用の制約から借地による発掘調査が困難であった方四町II期官衙中枢部の中で、小規模な範囲ではあるが発掘調査を実施した。さらに個人住宅の建替えのうち、基礎構造が深く遺構を損なうような住宅建設については「仙台平野の遺跡群」として小規模な調査を実施した。

### 1. II期官衙の調査

#### (1) 方四町II期官衙について

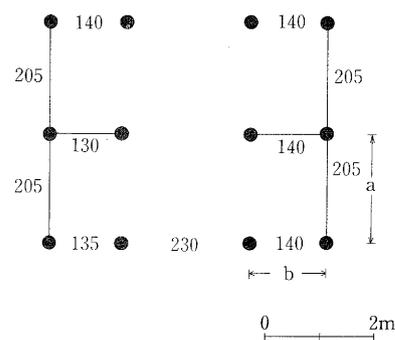
今年度の調査では第127次調査で中枢部を、第129次調査で外郭西辺上の発掘調査を実施した。第127次調査で発見した官衙にかかわる遺構は、I期官衙の遺構のみでII期官衙の時期のものはなかった。中枢部は創建期のII-A期と、その後に建物がやや方向を変えて建て替えられるII-B期と大別すれば2時期にわけられる(註1)。第127次調査ではいずれの時期の遺構も発見されず、広場状の空地となっていたことを示している。方四町II期官衙の中枢部では、比較的大型の建物が整然と立ち並んでいたと考えられる(註2)が、今回の調査地点はそれらの建物間に広がる広場状の一角にあたっているであろう。

第129次調査では方四町II期官衙の外郭西辺となるSD1825大溝を発見した。VI 3.でもふれたが、今回の調査区の東端では大溝とともに外郭となる材木列の推定線上にあたっていたが、推定位置では材木列は発見されなかった。これは第14次調査(註3)での外郭西辺のあり方にも通ずる点がある。それは方四町II期官衙の外郭南辺の材木列が南西コーナーで北に曲がっている(註4)ことは確認されているが、その延長部が真北方向に伸びて西辺を形成していないのではないかとという点である。第16次調査で発見されたSA65材木列は、第7次調査で検出された材木列が真北に伸びたとすれば、推定される位置からは東に2m程ずれて検出されている。このような状況から南西コーナーから徐々に角度が変化し狭角になるよう、東に傾斜しながら延びている可能性が考えられる。しかし今回の調査区は、そのような材木列が検出された第16次調査より南へ65m、外郭の南西コーナーよりは北へ71mの位置にあたる。これまで考えられていたより南西コーナーから近い位置で材木列がすでに東に傾斜するように延びているのか、あるいは門や櫓状建物などとの接続のあり方が反映し、柱間一間分程度のずれが南西コーナー間近で生じているのではないかとこの可能性が考えられよう。東辺や南辺がほぼ真北や真東西方向になるとはやや違った様相を西辺では示している。西辺付近では住宅地が密集しており、まとまった面積を調査することが難しいが、今後とも小規模な調査を繰り返しながら様相の把握に努めていきたい。

#### (2) 郡山廃寺について

第128次調査ではSB1880門跡が発見され、柱穴の配置から八脚門と考えられる。この門跡は柱間の配置が桁方向の中央(通り間)の両側の柱間(a)が、塀の取り付けいた梁方向の柱間(b)より短くなっている。現存する古代の寺院の門では(a)と(b)の柱間の長さは、八脚門の場合(b)の方が長くなる例が多く、今回発見した門跡のように(a)の方が短くなる例は見い出せなかった。よって柱穴の配置からは、一般的に想定される八脚門とは違った形態の門となる可能性も残されている(註5)が、ここでは古代の寺院の南大門に相当する位置の門として一般的な単層の八脚門と見ておくことにする。

SB1880門跡の両側にはSA1850材木列が取り付けしており、形態や規模からは第126次調査で検出されたSA1785材木列と連続する一連の遺構と考えられ

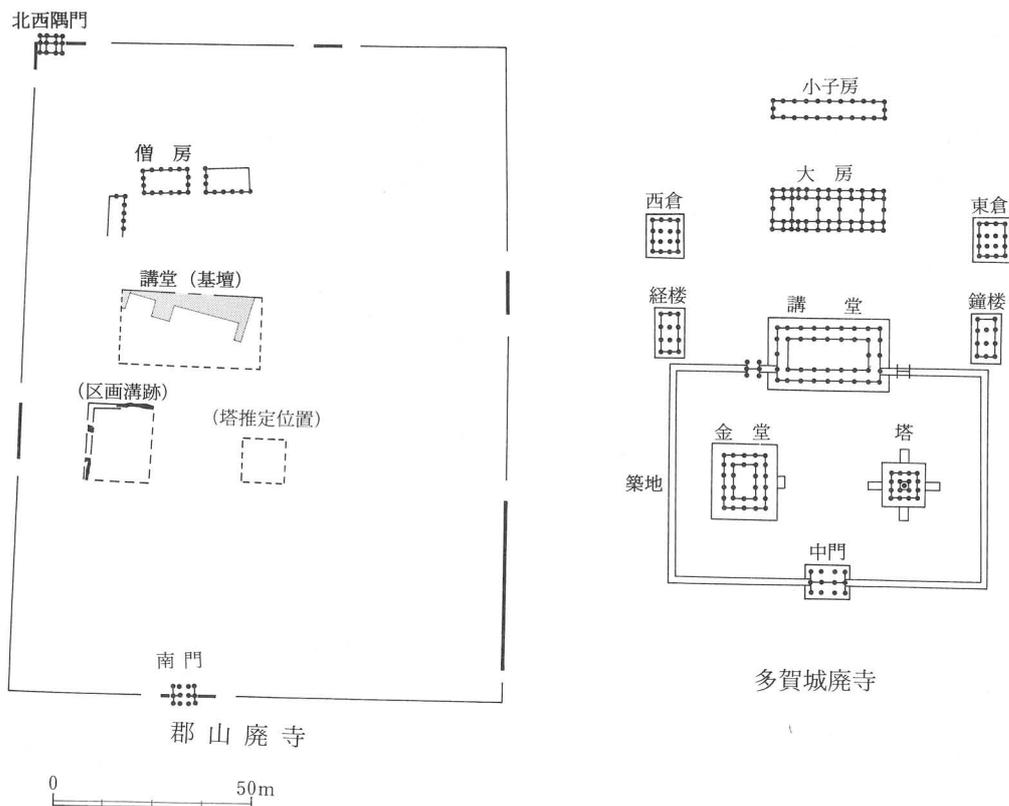


第37図 SD1880門跡模式図

る。これによりこれまで不明であった寺院の南辺が明らかになり、寺院の四辺が確定した。東西120～125m、南北167mで、北辺より南辺がやや長くなった台形型を呈している。これまで想定していたより東、南側に広がっている(註6)、寺院の範囲については多賀城廃寺のように中枢伽藍の範囲という視点で考えてきたが、今回明らかになった範囲は中枢伽藍の東側に寺院の機能を支える雑舎などの建物や井戸などを有する空間を含んだ範囲ととらえている。

内部の構造については今後調査を重ねていかねばならないが、現在までの調査成果で見える限りでは、講堂基壇と僧房、推定される金堂相当の建物跡の位置からは、多賀城廃寺の構造と類似する様相を呈している。多賀城廃寺からは、中門と講堂を結ぶ築地が発見されている。郡山廃寺も今回明らかになった材木列で区画された中に講堂や中門などを結びその内側と外側を区画するような塀や回廊なども存在する可能性があるだろう。

なお今回発見された材木列の外側には東辺でSD142、1789、南辺でSD1857、北辺でSD828、また自然地形の落ち込みなどが確認され、西辺を除いては溝や溝状の落ち込みが巡っている状況となっている。いずれも上面よりは古代の遺物より新しい遺物が出土しているため、古代の遺構ではないと見てきた(註7)。しかし今回の南辺材木列に平行するSD1857溝跡の最深部に堆積している第3層からは、古代の遺物のみが出土している。また東辺と平行するSD142も第15次調査の底面付近では、古代の遺物のみ出土し、溝跡の形状もよく似ている。したがって溝の上層ではきわめて新しい近世頃の遺物が含まれているが、溝が開削された段階では古代の時期まで遡る可能性があり、寺院の外郭施設は材木塀が単体ではなくその外側に溝が巡っていたことが想定される。今後さらに検討してゆきたい。



第38図 郡山廃寺と多賀城廃寺

## 2. I期官衙の調査

第127次調査と第131次調査では、I期官衙の建物跡などの遺構を発見した。いずれも遺構の一部を検出したのみなので、全容は明らかにならなかったが、第127次調査で検出した遺構は第51次調査（註8）で検出した遺構と同一の遺構となる可能性がある。第127次調査のSB1810と第51次調査のSB702は、側柱の建物として一棟の建物跡の北東隅と南西隅との見方もできる（註9）。そのように想定すれば、桁行7間（総長15.8m、柱間寸法225cm）、梁行3間（総長6.5m、柱間寸法215～230cm）の建物跡となり、第107次調査のSB1605と32m離れて並び立つ様相となる。

また第127次調査のSB1800と第131次調査の建物跡1とした柱穴は、I期官衙の総柱建物跡の一部と見られる（註10）。このような礎を詰め込んだ柱穴の建物跡は、I期官衙中枢部の北と南で検出されている（註11）。このような総柱建物跡は中枢部周辺に広がっており、倉庫群として院を形成していたものと考えられる。第127次調査の行われた中枢部の南と、第131次調査の行われた北では遺構の配置の様相が酷似している。またこの倉庫群では、総柱建物から側柱建物への建替えがされている箇所があり、第127次調査ではSB1815→SB1810、第107次調査区ではSB1595→SB1605、第31次調査ではSB17→SB14に建替えられている。I期官衙の中でのこのような倉庫群の建物配置の類似と重複状況の類似は、I期官衙の機能を検討する上できわめて重要である。第131次調査では、遺構の詳細を明らかにできなかったが周辺での小規模な調査を積み重ねながら、倉庫群を含む周辺の状況を明らかにしていきたい。

註1 仙台市文化財調査報告書第194集「郡山遺跡XV—平成6年度発掘調査概報—」1995.3 P49、50

註2 第41図 II期官衙中枢部主要遺構配置図（II—A期）P52参照

註3 仙台市文化財調査報告書第38集「郡山遺跡II—昭和56年度発掘調査概報—」1982.3 P50～55

註4 仙台市文化財調査報告書第29集「郡山遺跡I—昭和55年度発掘調査概報—」1981.3 P21、22

註5 IV 第126次・第128次発掘調査 註3 P28参照

註6 仙台市文化財調査報告書第96集「郡山遺跡VII—昭和61年度発掘調査概報—」1987.3 P79～85

註7 仙台市文化財調査報告書第234集「郡山遺跡XIX—平成10年度発掘調査概報—」1999.3 P26

註8 仙台市文化財調査報告書第86集「郡山遺跡VI—昭和60年度発掘調査概報—」1986.3 P9～33

註9 第40図 I期官衙主要遺構配置図（1/600）P49、50参照

註10 仙台市文化財調査報告書第46集「郡山遺跡III—昭和57年度発掘調査概報—」1983.3 P9～53

註11 第24次調査 SB245、SB373、第31次調査 SB344、第51次調査 SB700、第87次調査 SB264

第40図 I期官衙主要遺構配置図（1/600）P49、50参照

# 調査成果の普及と関連活動

## 1. 広報・普及・協力活動

年 月 日	行 事 名 称	担当職員	主 催
1999. 4. 23	展示室見学	長島・松本	郡山小学校6年
6. 14～15	展示室・ピロティ見学	長島・松本	東長町小学校6年
6. 15	展示室・ピロティ見学	木村	多賀城歴史サークル
6. 16	展示室見学	長島	原町市教育委員会
7. 22	展示室見学	長島	郡山中学校ふれあい学級
7. 30	展示室見学	長島	関東古瓦研究会
9. 16	第28回大規模遺跡連絡協議会	長島	九州歴史資料館
10. 23	発掘現場・展示室見学	木村	宮城学院女子大学
10. 29	体験学習事前指導	松本	東長町小学校6年
11. 8	発掘現場・展示室見学	長島・松本	宮城教育大学
11. 11	発掘体験学習	長島・松本	東長町小学校6年
11. 18	発掘現場・展示室・ピロティ見学	松本	郡山中学校3年校外学習
11. 19	第128次調査報道発表	長島・松本	仙台市教育委員会
11. 23	第128次調査現地説明会	長島・松本	仙台市教育委員会
12. 11	宮城県遺跡調査成果発表会	長島	宮城県考古学会 古川市教育委員会
2000. 2. 5～6	研究集会「古代土師器の生産と流通」	木村	奈良国立文化財研究所
2. 19～20	第26回古代城柵官衙遺跡検討会	木村・長島・松本	古代城柵官衙遺跡検討会
3. 9～10	研究集会「郡衙正倉の成立と変遷」	長島	奈良国立文化財研究所

## 2. 調査指導委員会の開催

第28回 郡山遺跡調査指導委員会 平成12年3月17日 北庁舎1F第2会議室

- 平成11年度の調査成果について
- 平成12年度の調査計画について
- 第4次五カ年計画の総括について
- 第5次五カ年計画について

## 3. 資料の貸し出し・展示

東北歴史博物館	常設展	「古代」城柵とエミシ
仙台市博物館	常設展	「原始・古代・中世」
野馬追の里原町市立博物館	企画展	「古代の瓦と今の瓦」
大沢小学校		

## 4. 展示室の利用者

平成11年4月～平成12年3月 361名

## X 第4次5カ年調査の総括

昭和55年度から開始された「郡山遺跡範囲確認調査」（国庫補助事業）は、平成6年度までに第3次5カ年計画事業が終了し、第1次から第105次までの調査を実施した。これにより調査された総面積は、25,500m<sup>2</sup>である。これに引き続き平成7年度から平成11年度にかけての第4次5カ年計画が立案された。

表1 第4次5カ年計画

調査年次	調査地区	調査予定面積	補助内容
平成7年度	方四町II期官衙中央部	1,200m <sup>2</sup>	遺跡発掘事前総合調査・重要遺跡緊急範囲確認調査
平成8年度	方四町II期官衙中央部	1,200m <sup>2</sup>	遺跡発掘事前総合調査・重要遺跡緊急範囲確認調査
平成9年度	方四町II期官衙中央部	900m <sup>2</sup>	重要遺跡緊急範囲確認調査
平成10年度	郡山廃寺中枢東部	900m <sup>2</sup>	重要遺跡緊急範囲確認調査
平成11年度	方四町II期官衙中央部	900m <sup>2</sup>	重要遺跡緊急範囲確認調査

以上の計画について平成6年度の郡山遺跡調査指導委員会で承認を得て、実施に移された。このうち平成7、8年度については、仙台市青葉区荒巻本沢地区での土地改良総合整備事業に要する成館の調査費の一部を負担している。また平成10年度のみ予定していた郡山廃寺での調査を平成11年度も継続することになった。

表2 第4次5カ年調査実績

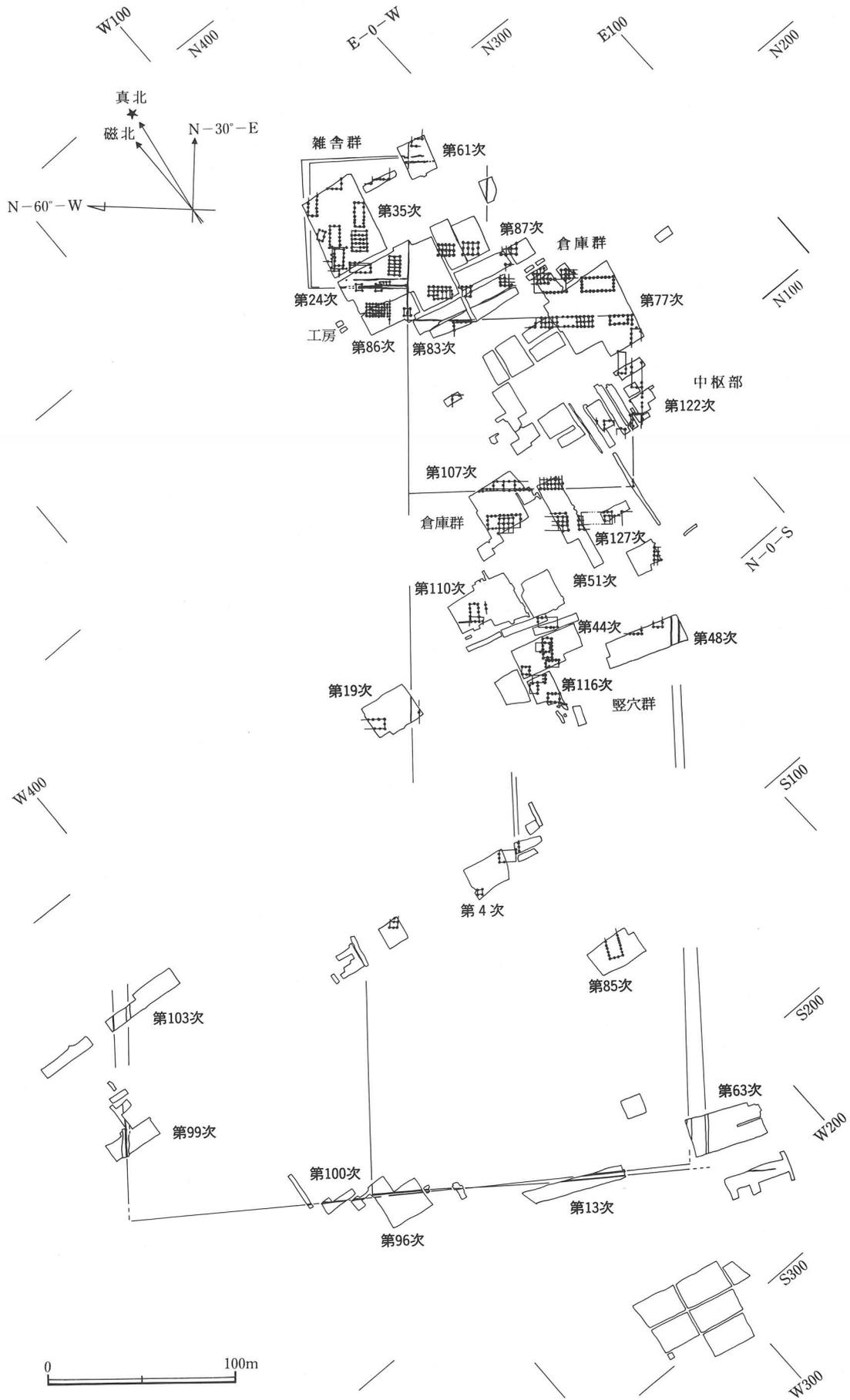
調査年次	調査地区	調査面積
平成7年度	方四町II期官衙中央部1地区、I期官衙西部1地区、郡山廃寺南地区1地区	892m <sup>2</sup>
平成8年度	方四町II期官衙中央部3地区、郡山廃寺東部1地区	1,130m <sup>2</sup>
平成9年度	方四町II期官衙中央部2地区	820m <sup>2</sup>
平成10年度	郡山廃寺東部2地区、方四町II期官衙4地区、I期官衙南部1地区	1,160m <sup>2</sup>
平成11年度	郡山廃寺2地区、方四町II期官衙3地区、I期官衙2地区	1,015m <sup>2</sup>
計	23地区	5,017m <sup>2</sup>

以上のような経過をたどり第4次5カ年の調査が終了したが、I期官衙、II期官衙について次のような成果が得られた。

### 1. I期官衙

I期官衙については、方四町II期官衙の中枢部を対象とした調査地区で重複して発見された（註1）ことによりI期官衙中枢部の解明が進んだ。これらの調査区からは板塀や一本柱列の塀跡により長辺で約120m（≒400小尺）、短辺で約90m（≒300小尺）の範囲を区画した一画が発見され、周辺の大型の建物跡や倉庫跡などとは遮蔽されていることが明らかとなっている。内部には塀に取り付くように建物が配置され、2時期ほどの変遷がある。この一画の中央付近は遺構がきわめて稀薄で、広場状になっている。

この中枢部の各辺からは、1間程度の門跡が第107次（註2）で発見されている。中枢部の南辺となる中央付近（註3）では門跡は発見されなかったが、短辺となる東辺の中央から第122次調査でSB1785門跡が発見され、規模こそ大



第39图 I期官衙全体图

きな門跡ではなかったが、これまで発見されていた門跡とは異なった様相を示している。門の掘り方の中には柱痕跡が2箇所あり、南と北に別れた掘り方から柱4本分の痕跡が発見されている(註4)。掘り方間が途切れた部分のみ通り間となる1間程度の棟門と見ているが、各々両脇の柱穴の間には板塀や材木痕跡が検出されないため、仮に3間分に扉の付いた四間三戸門の形態をとるとの見方も可能である。また1間分のみ扉の付いた門であっても、宮城県矢本町赤井遺跡(註5)の門のように、短辺上に中央に位置してブロックの正面の門となっているものもある。検討されなければならない点が残されているが、SB1785門跡が中枢部と考えたブロックの正門となっている可能性は高いと言えよう。

I期官衙は南西部(註6)では遺構の密度が少なく、かつ南辺の中央には門跡が発見されていない(註7)。北に広がる中枢部や倉庫群、堅穴住居群などは、遺構の重複が多い箇所では5ないし6時期に及び、建物などの規模も大型のものが多い。I期官衙の重要な部分が北寄りに配置されていると考えられる。中枢部の門の位置やI期官衙南部の状況からは、機能ごとに別れたブロックいわゆる「院」が東西に連結するよう、南東に向けた官衙である可能性が出てきた。そのように見るならばI期官衙の造営基準方向は、これまで「真北から東に30°程偏している(N-30°-E)」と見てきたが、「真北から西に60°程偏している(N-60°-W)」という見の方が妥当ではないか(註8)という見方が強まろう。なおI期官衙中枢部の内部の状況については、方四町II期官衙の中枢部を構成する政庁正殿、石敷遺構との重複や現況が住宅地となっているため調査が実施できず明らかになっていない。

## 2. II期官衙

### ① 方四町II期官衙

第4次5カ年計画の主な目的は、方四町II期官衙の政庁の範囲を明らかにすることであった。平成6年度に第102次調査を実施するまでは、政庁は第55次調査で検出されたSA730一本柱列により区画された範囲を想定していた。

しかし推定された箇所には塀跡がなく、第110次調査によりSA730は建物をL字に囲む塀跡であることが明らかとなった。また第102次、第107次により方四町II期官衙の中でも建物跡が、II-A期からII-B期へと変遷している(註9)ことが明らかとなっている。II-A期においてはSB1250四面廂付建物(正殿)、石敷遺構、石組池やSB1555、SB716、SB1545、SB1490などがあり、またそれらを取り囲む塀跡などはなく、これらの遺構を挟むように西にSB1650、SB1465、SB526(西列)、東にSB1210、SB1680、SB208、SB1730(東列)などの建物が建てられていたと考えられる。この間にSD1600石組溝のような溝跡が存在するが、築地や材木列などで周囲から遮蔽する遺構は存

遺構名	棟方向	構造(総長m)	柱間寸法(cm)	建替え	柱抜き取り	備考
SB1250 建物跡 (正殿跡)	東西棟 N-1°-E	桁行8間(17.4)、梁行5間(10.8) 四面廂付建物	桁行 身舎230 廂195~205 梁行 身舎200~215 廂205~235	なし	一部にあり	
SB1210 建物跡	南北棟 N-2°-E	桁行7間(18.3)、梁行2間(5.6)	桁行236~294 梁行280~282	なし	なし	主柱に密接した東柱痕跡有
SB1680 建物跡	南北棟 N-2°-E	桁行5間(14.8)、梁行5間(12.8)	桁行250~260 梁行260~270	なし	あり	底面に拳大の河原石
SB1690 建物跡	南北棟 E-2°-S	桁行1間(2.6)、梁行2間(5.4)				
SB208 建物跡	南北棟(推定)	不明	不明	不明	なし	
SB1730 建物跡	南北棟(推定)	不明	不明	不明	不明	柱穴1
SB1555 建物跡	東西棟 E-0°-S	桁行3間以上(8.76以上)、梁行2間(5.92)	桁行288~292 梁行292~300	なし	一部にあり	主柱に密接した東柱痕跡有
SB1545 建物跡	南北棟 N-0°-S	桁行3間以上(5.2以上)、梁行2間(4.56)	桁行204~228 梁行228	なし	一部にあり	
SB716 建物跡	東西棟 E-2°-S	桁行2間以上(5.35以上)、梁行1間以上(2.58以上)	桁行245~290 梁行258	あり	あり	
SB1490 建物跡	東西棟 E-3°-S	桁行4間以上(8.3以上)、梁行2間(5.3)	桁行245~267 梁行260~265	あり	あり	
SB1650 建物跡	南北棟 N-3°-E	桁行6間(16.62)、梁行2間(4.92)	桁行253~293 梁行220~272	なし	一部あり	一部柱痕跡底面に河原石有
SB1465 建物跡	南北棟 E-0°-S	桁行1間以上(2以上)、梁行2間(5.4)	桁行200以上 梁行270	なし	なし	
SB526 建物跡	南北棟 N-3°-E	桁行12間(33.8)、梁行2間(4.9)	桁行260~290 梁行245	あり	一部にあり	

表1 II-A期建物跡一覧表



在しないものと考えられる。ただしこれらの遺構群が後の城柵官衙の政庁と同じような機能をはたしていたかについては、検討を要する。またそれらに挟まれた内部の遺構のうちSB1555を中心とした建物の配置は多賀城の創建期の政庁の遺構配置に類似し、正殿のあり方などで郡山遺跡のSB1555建物跡から多賀城の正殿へと構造面で発展、継承していったもの（註10）と考えられよう。

この遺構はSB1250四面廂付建物と外郭南門であるSB712の中心を結んだ線（仮想中軸線(1)）ではなく、SB716、SB1490の中間点とSB1250の中心を結んだ線（仮想中軸線(2)）でほぼ対称なライン上に並んでいる（註11）。ただしこの西列、東列とする建物列の北部では東列のみ、南部では西列のみの検出であるため、完全に対称となっているか否かについては、今後の調査での検討を要する。また図示しなかったII-B期を含め、建物の微妙な方向や重複回数の違いから、細分化される可能性を残しており、なお検討を重ねていく必要がある。

## ② 郡山廃寺

これまで寺院の範囲については、多賀城廃寺と同じように中枢伽藍の範囲という視点でとらえていた。しかし第119次、第120次、第126次、第128次調査を経て明らかになった材木列による区画は、7世紀代の他の地方寺院と比較すると中枢伽藍の範囲としてはきわめて広い範囲である。また区画された内部からは井戸跡などが発見されており（註12）、雑舎などのような遺構群を取り込んだ範囲と見ておきたい。そのように見るならば第128次調査A区で発見された門跡は、南大門に相当する位置の門と見ることができよう。この門は推定される主要伽藍の中軸上にあり、門を含めた主要な遺構が区画内部の西寄りに配置されていることになる。このような例は日本で最古の寺院跡である飛鳥寺の遺構配置にも見られる。郡山廃寺の主要伽藍が西に寄っていることについては、北方の方四町II期官衙との関連や周辺の遺構の状況をふまえながら、今後検討して行く。

寺院内部の調査についても現況が住宅密集地であるため、内部の状況をこれまでより明かにすることはできなかった。今後とも住宅の建替え時などに調査を実施して、成果を蓄積していきたい。

### 註1 第51次、第77次、第107次、第115次、第122次調査区など

第51次調査	仙台市文化財調査報告書第86集	「郡山遺跡VI－昭和60年度発掘調査概報－」	1986.3
第77次調査	仙台市文化財調査報告書第124集	「郡山遺跡IX－昭和63年度発掘調査概報－」	1989.3
第107次調査	仙台市文化財調査報告書第210集	「郡山遺跡XVI－平成7年度発掘調査概報－」	1996.3
第115次調査	仙台市文化財調査報告書第227集	「郡山遺跡XVIII－平成9年度発掘調査概報－」	1998.3
第122次調査	仙台市文化財調査報告書第234集	「郡山遺跡XIX－平成10年度発掘調査概報－」	1999.3

註2 この他に第51次、第77次、第107次で板塀が1間分程度の長さで途切れている箇所がある。

註3 第107次調査 仙台市文化財調査報告書第210集 「郡山遺跡XVI－平成7年度発掘調査概報－」 1996.3

註4 第122次調査 仙台市文化財調査報告書第234集 「郡山遺跡XIX－平成10年度発掘調査概報－」 1999.3

註5 平成11年度宮城県遺跡調査成果発表会発表要旨 1999.12

### 註6 第96次、第99次、第100次、第103次、第104次調査区など

第96次調査	仙台市文化財調査報告書第169集	「郡山遺跡XIII－平成4年度発掘調査概報－」	1993.3
第99次調査	仙台市文化財調査報告書第178集	「郡山遺跡XIV－平成5年度発掘調査概報－」	1994.3
第100次調査	仙台市文化財調査報告書第178集	「郡山遺跡XIV－平成5年度発掘調査概報－」	1994.3
第103次調査	仙台市文化財調査報告書第194集	「郡山遺跡XV－平成6年度発掘調査概報－」	1995.3
第104次調査	仙台市文化財調査報告書第194集	「郡山遺跡XV－平成6年度発掘調査概報－」	1995.3

註7 第96次調査 仙台市文化財調査報告書第169集 「郡山遺跡XIII－平成4年度発掘調査概報－」 1993.3

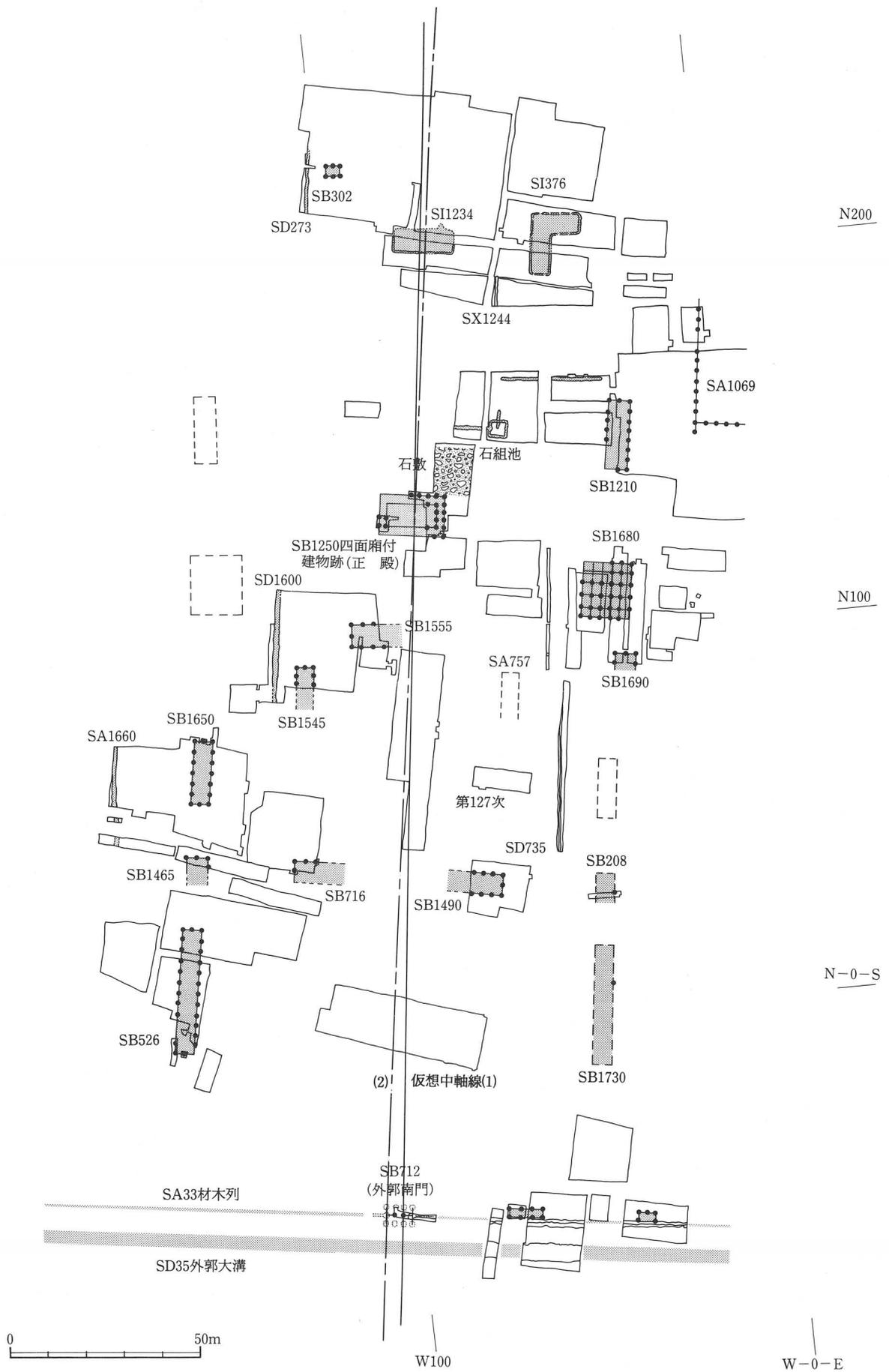
註8 以前より桑原滋郎氏より、I期官衙の造営基準方向については「真北から60°ほど西に偏している」とする指摘がある。

石松好雄・桑原滋郎 『大宰府と多賀城』 岩波書店 1985.3

林謙作編 『図説発掘が語る日本史 1 北海道・東北編』 新人物往来社 1986

監修・坪井清足／平野邦雄 『新版 古代の日本 第9巻東北・北海道』 角川書店 1992.8

多賀城市史編纂委員会 『多賀城市史 第1巻』 1997.3



第41図 II期官衙中枢部主要遺構配置図 (II-A期)

- 註9 仙台市文化財調査報告書第194集 「郡山遺跡X V—平成6年度発掘調査概報—」 1995. 3 P49～52  
 仙台市文化財調査報告書第210集 「郡山遺跡X VI—平成7年度発掘調査概報—」 1996. 3 P41、42
- 註10 仙台市文化財調査報告書第215集 「郡山遺跡X VII—平成8年度発掘調査概報—」 1997. 3 P35、36
- 註11 仙台市文化財調査報告書第210集 「郡山遺跡X VI—平成7年度発掘調査概報—」 1996. 3 P42
- 註12 第15次調査 仙台市文化財調査報告書第38集 「郡山遺跡II—昭和56年度発掘調査概報—」 1982. 3

## 参 考 文 献

仙台市文化財調査報告書第23集「年報1」	『郡山遺跡発掘調査概報』	1980. 3
仙台市文化財調査報告書第29集	「郡山遺跡I」	1981. 3
仙台市文化財調査報告書第38集	「郡山遺跡II」	1982. 3
仙台市文化財調査報告書第42集	「郡山遺跡—第13次—」	1982. 3
仙台市文化財調査報告書第46集	「郡山遺跡III」	1983. 3
仙台市文化財調査報告書第64集	「郡山遺跡IV」	1984. 3
仙台市文化財調査報告書第74集	「郡山遺跡V」	1985. 3
仙台市文化財調査報告書第86集	「郡山遺跡VI」	1986. 3
仙台市文化財調査報告書第96集	「郡山遺跡VII」	1987. 3
仙台市文化財調査報告書第110集	「郡山遺跡VIII」	1988. 3
仙台市文化財調査報告書第124集	「郡山遺跡IX」	1989. 3
仙台市文化財調査報告書第133集	「郡山遺跡X」	1990. 3
仙台市文化財調査報告書第145集	「郡山遺跡—第84・85次—」	1990. 6
仙台市文化財調査報告書第146集	「郡山遺跡X I」	1991. 3
仙台市文化財パンフレット第10集	「郡山遺跡」	1985. 10
仙台市文化財パンフレット第18集	「郡山遺跡」	1989. 12
仙台市文化財調査報告書第156集	「郡山遺跡—第65次発掘調査報告書—」	1992. 3
仙台市文化財調査報告書第161集	「郡山遺跡X II」	1992. 3
仙台市文化財調査報告書第169集	「郡山遺跡X III」	1993. 3
仙台市文化財調査報告書第178集	「郡山遺跡X IV」	1994. 3
仙台市文化財調査報告書第194集	「郡山遺跡X V」	1995. 3
仙台市文化財調査報告書第210集	「郡山遺跡X VI」	1996. 3
仙台市文化財調査報告書第215集	「郡山遺跡X VII」	1997. 3
仙台市文化財調査報告書第222集	「郡山遺跡—第112次—」	1997. 3
仙台市文化財パンフレット第40集	「発掘/郡山遺跡—郡山遺跡に埋もれた歴史を掘る—」	1997. 10
仙台市文化財調査報告書第227集	「郡山遺跡X VIII」	1998. 3
古代城柵官衙検討会	第17回古代城柵官衙検討会資料	1991. 2
仙台市文化財調査報告書第234集	「郡山遺跡X IX」	1999. 3



# SEM-EDSによる郡山遺跡銅関連出土遺物の分析結果

国立歴史民俗博物館 齋藤 努・今村峯雄

## 1. はじめに

仙台市教育委員会より依頼のあった、郡山遺跡出土の銅関連遺物(A)と、隣接する欠ノ上II遺跡出土の銅関連遺物(B)について、鉱物組織と化学組成の分析を行った結果を報告する。なお、鉛同位体比分析を含めた結果については、機会をあらためて報告する予定である。

## 2. 資 料

分析対象資料は、資料番号A-1、A-2、A-3、A-4、A-5、A-6、A-7、B-1、B-2、B-3、B-4の11点である。

## 3. 分析方法

A-1～5(郡山遺跡第117次調査出土)、B-1～4(欠ノ上II遺跡出土)の資料については、一部をサンプリングしてエポキシ樹脂中に埋め、ダイヤモンド・ペーストで研磨、炭素蒸着後、国立歴史民俗博物館所有のエネルギー分散型特性X線検出器付走査型電子顕微鏡(SEM-EDS)を使用して、鉱物組織の観察と、スポット化学組成分析を実施した。A-6～7については、表面に肉眼で確認される緑色付着物の部分に電子線をあて、非破壊で化学組成の分析を行った。

## 4. 分析結果

反射電子像による鉱物組織観察結果と、化学組成分析結果を図1～20に示した。各資料について以下に述べる。

### A-1(郡山遺跡:C-842土師器甕 SX1768 1層)

土器表面に熔融物が付着している資料である。図1aは資料表面の熔融物、図1cは土器の部分の反射電子像である。図1bは熔融物部分の拡大観察結果である。図1bの中で、比較的均一に見える下地の部分の成分分析結果を図2aに、白く粒状に見える部分の成分分析結果を図2bに示した。これらから、熔融物部分はおおむね、銅を含むケイ酸塩のガラス質からなり、中に金属銅の粒子が含まれていることがわかった。

### A-2(郡山遺跡:土師器片 SX1768 1層)

土器表面に熔融物が付着している資料である。図3aは資料断面、図3b、cは熔融物部分をさらに拡大して示した反射電子像である。図3cの中で、比較的均一に見える下地の部分の成分分析結果を図4aに、白く粒状に見える部分の成分分析結果を図4bに示した。これらから、熔融物部分はおおむね、銅を含むケイ酸塩のガラス質からなり、中に金属銅の粒子が含まれていることがわかった。

### A-3(郡山遺跡:土師器片 SX1768 1～5層)

土器表面に熔融物が付着している資料である。図5aは資料断面、図5b、cは熔融物部分をさらに拡大して示した反射電子像である。図5cの中で、比較的均一に見える下地の部分の成分分析結果を図6aに、白く粒状に見える部分の成分分析結果を図6bに示した。これらから、熔融物部分はおおむね、銅を含むケイ酸塩のガラス質からなり、中に金属銅の粒子が含まれていることがわかった。

### A-4(郡山遺跡:C-848土師器坏 SX1768 5層)

土器表面に熔融物が付着している資料である。図7aは資料断面、図7b、cは熔融物部分をさらに拡大して示した反射電子像である。図7cの中で、比較的均一に見える下地の部分の成分分析結果を図8aに、白く粒状に見える部分の成分分析結果を図8bに示した。これらから、熔融物部分はおおむね、銅を含むケイ酸塩のガラス質からなり、中に金属銅の粒子が含まれていることがわかった。

#### A-5 (郡山遺跡：鉾滓 SX1768 検出面)

資料は熔融物である。図9aは資料断面、図9b、cはその一部を拡大して示した反射電子像である。図9cの中で、比較的均一に見える下地の部分の成分分析結果を図10aに、白く粒状に見える部分の成分分析結果を図10bに示した。これらから、この資料も、上記のA-1～4の熔融物部分と同様、銅を含むケイ酸塩のガラス質の中に金属銅の粒子が含まれているものである。

#### A-6 (郡山遺跡：C-840土師器トリベ SX1768 1層)、A-7 (郡山遺跡：C-849土師器片 SX1768)

資料A-6、A-7の緑色付着部分の成分分析結果を図11、12に示した。いずれも銅の腐食生成物と考えられる。ただし、A-6では、下にある土器のケイ酸塩が混入していると思われる。

#### B-1 (欠ノ上II遺跡：土師器環 SI6 1層)

土器表面に熔融物が付着している資料である。図13aは資料断面、図13b、cはさらに表面に付着している熔融物部分を拡大して示した反射電子像である。図13cの中で、下地の部分の成分分析結果を図14aに、白く粒状に見える部分の成分分析結果を図14bに示した。これらから、熔融物部分はおおむね、銅を含むケイ酸塩のガラス質からなり、中に金属銅の粒子が含まれていることがわかった。

#### B-2 (欠ノ上II遺跡：土師器環 SI6)

土器表面に熔融物が付着している資料である。図15aは熔融物部分、図15cは土器部分の反射電子像である。また、図15bは、さらに表面に付着している熔融物部分を拡大して示したものである。図15bの中で、下地の部分の成分分析結果を図16aに、白く粒状に見える部分の成分分析結果を図16bに示した。これらから、熔融物部分はおおむね、銅および鉛を含むケイ酸塩のガラス質からなり、中に金属銅の粒子が含まれていることがわかった。

#### B-3 (欠ノ上II遺跡：土師器片 SI6 2層)

土器表面に熔融物が付着している資料である。図17aは資料断面、図17b、cはさらに表面に付着している熔融物部分を拡大して示した反射電子像である。図17cの中で、下地の部分の成分分析結果を図18aに、白く粒状に見える部分の成分分析結果を図18bに示した。これらから、熔融物部分はおおむね、銅および鉛を含むケイ酸塩のガラス質からなり、中に金属銅の粒子が含まれていることがわかった。

#### B-4 (欠ノ上II遺跡：土師器環 SI6 2層)

熔融物である。図19aは資料断面、図19b、cはそれを拡大した反射電子像である。図19bの中で、下地の部分、白色粒状の部分、樹状の部分の成分分析結果を図20a、b、cにそれぞれ示した。下地の部分は銅、鉄、鉛を含むケイ酸塩ガラス質であり、その中に、粒状の金属銅、銅と鉄を主成分とする樹状結晶が含まれている。

なお、この資料は肉眼では、緻密で板状の部分と気孔が多数含まれる部分の2層に分かれて見えるが、前者(図19b：図19aの上1/3の部分)と後者(図19c：図19aの下2/3の部分)で組織や鉱物組織などに大きな違いはなかった。外見上の相違は、熔融物が固化する際の冷却の状況などによるものと推測される。

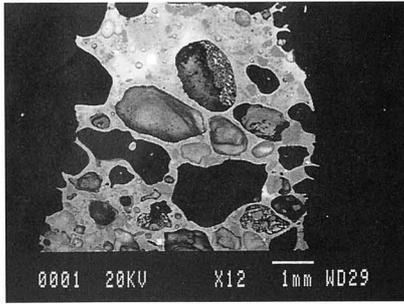


図 1 a A-1 熔融物付近の反射電子像

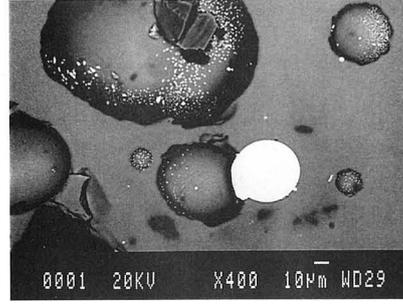


図 1 b A-1 熔融物の反射電子像

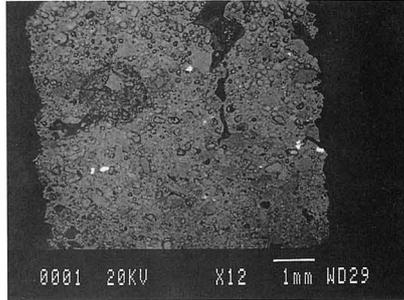


図 1 c A-1 土器部分の反射電子像

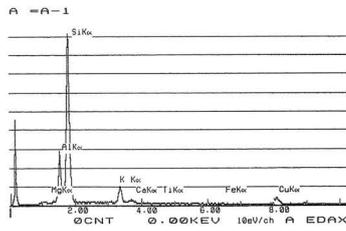


図 2 a 図 1 b 中のマトリックス部分の成分分析結果

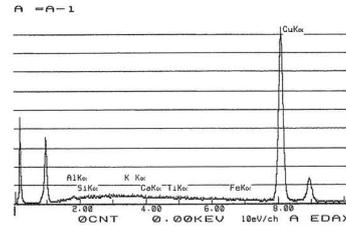


図 2 b 図 1 b 中の白い粒状部分の成分分析結果

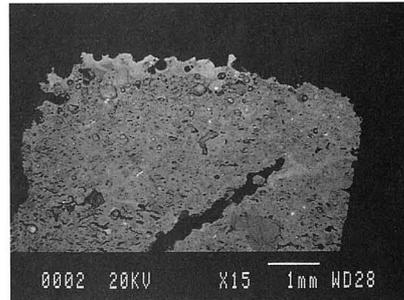


図 3 a A-2 資料断面の反射電子像

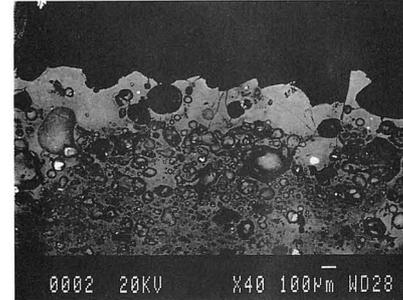


図 3 b A-2 熔融物付近の反射電子像

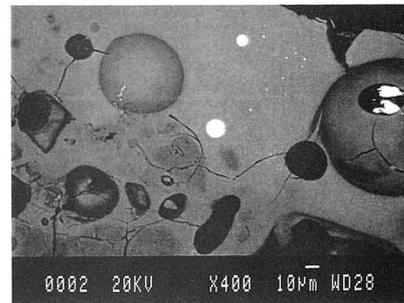


図 3 c A-2 熔融物の反射電子像

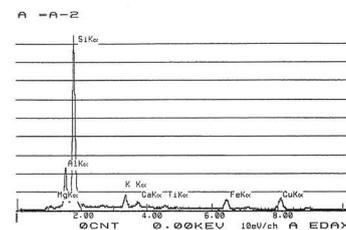


図 4 a 図 3 c 中のマトリックス部分の成分分析結果

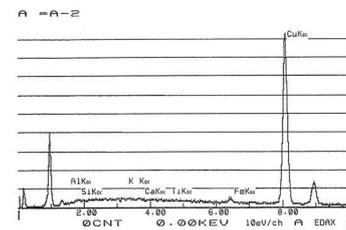


図 4 b 図 3 c 中の白い粒状部分の成分分析結果

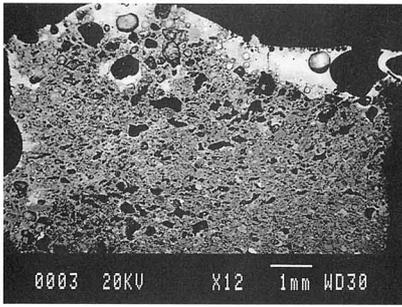


図 5 a A-3 資料断面の反射電子像

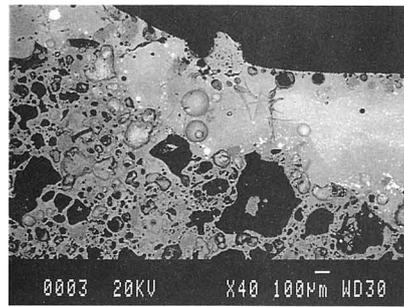


図 5 b A-3 熔融物付近の反射電子像

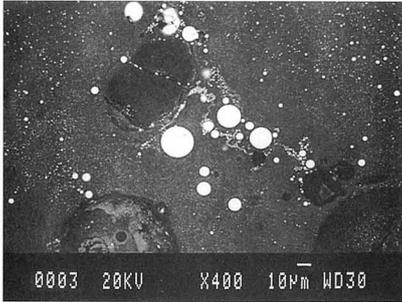


図 5 c A-3 熔融物の反射電子像

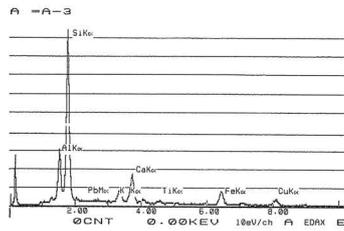


図 6 a 図 5 c 中のマトリックス部分の成分分析結果

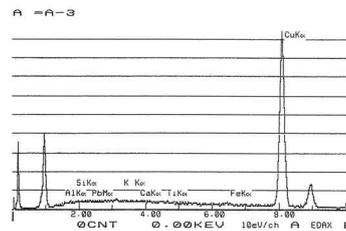


図 6 b 図 5 c 中の白い粒状部分の成分分析結果

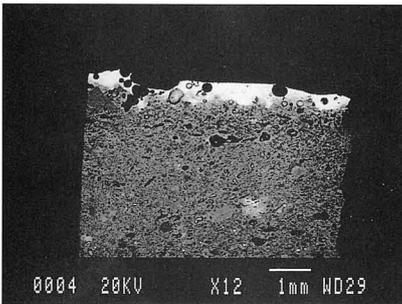


図 7 a A-4 資料断面の反射電子像

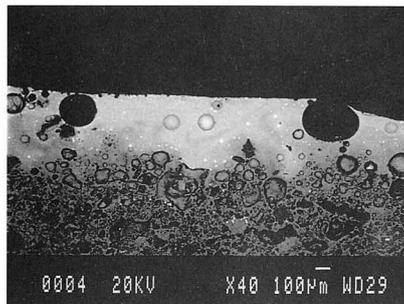


図 7 b A-4 熔融物付近の反射電子像

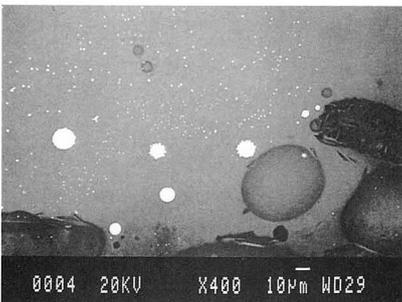


図 7 c A-4 熔融物の反射電子像

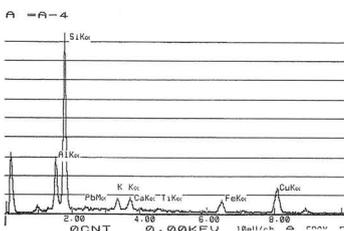


図 8 a 図 7 c 中のマトリックス部分の成分分析結果

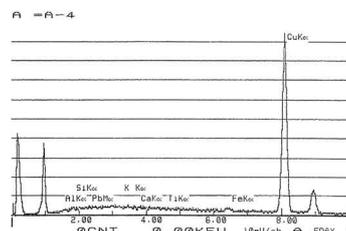


図 8 b 図 7 c 中の白い粒状部分の成分分析結果

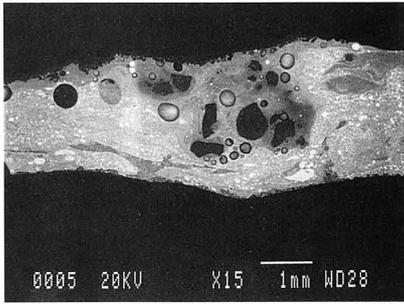


図9a A-5資料断面の反射電子像

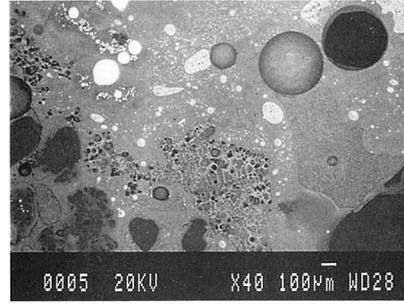


図9b A-5資料断面の反射電子像

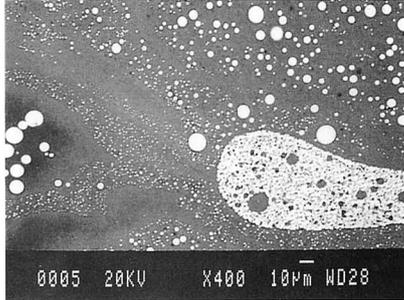


図9c A-5資料断面の反射電子像

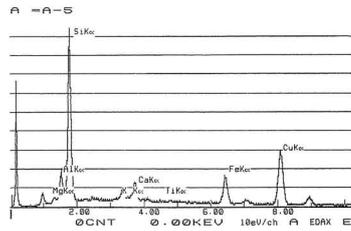


図10a 図9c中のマトリックス部分の成分分析結果

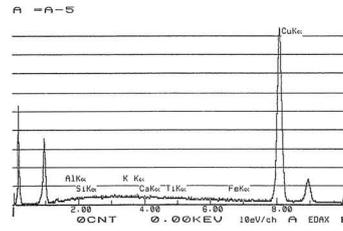


図10b 図9c中の白い粒状部分の成分分析結果

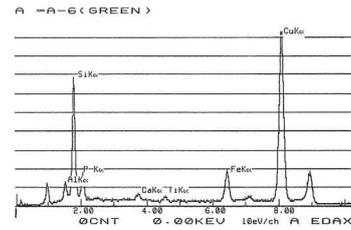


図11 A-6 緑色付着物の成分分析結果

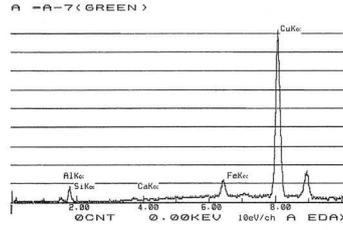


図12 A-7 緑色付着物の成分分析結果

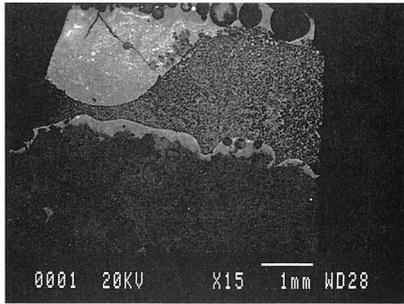


図13a B-1 資料断面の反射電子像

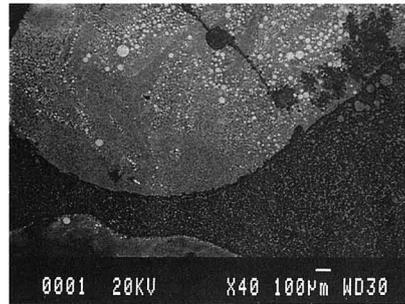


図13b B-1 熔融物付近の反射電子像

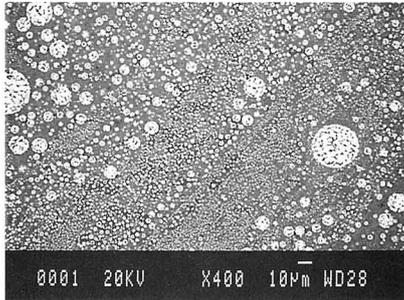


図13c B-1 熔融物の反射電子像

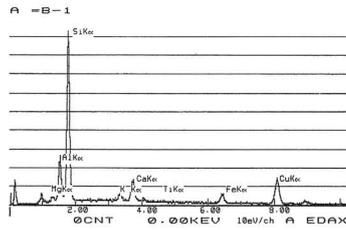


図14a 図13c中のマトリックス部分の成分分析結果

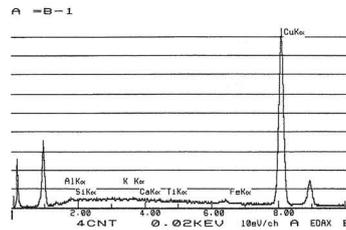


図14b 図13c中の白い粒状部分の成分分析結果

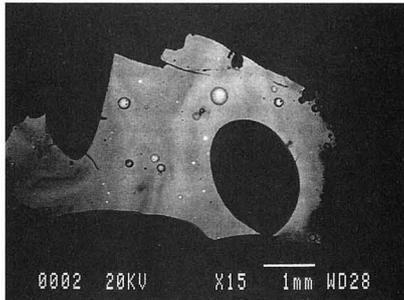


図15a B-2 熔融物の反射電子像

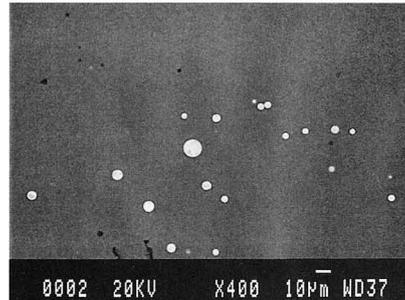


図15b B-2 熔融物の反射電子像

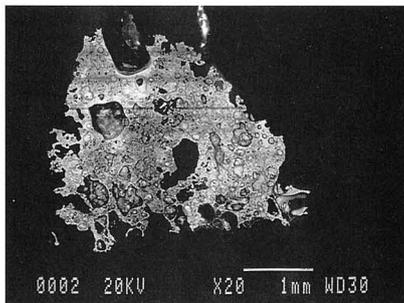


図15c B-2 土器部分の反射電子像

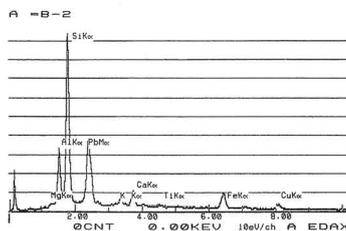


図16a 図15b中のマトリックス部分の成分分析結果

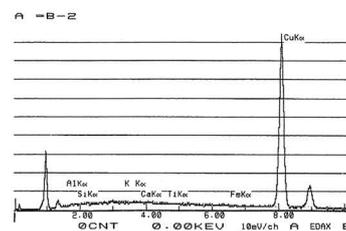


図16b 図15b中の白い粒状部分の成分分析結果

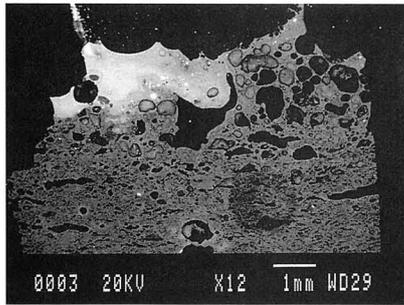


図17a B-3 資料断面の反射電子像

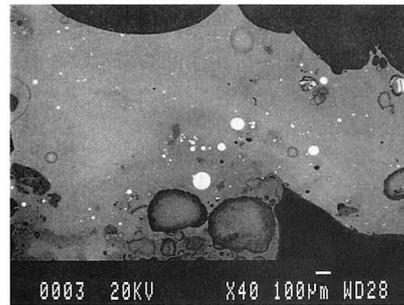


図17b B-3 熔融物の反射電子像

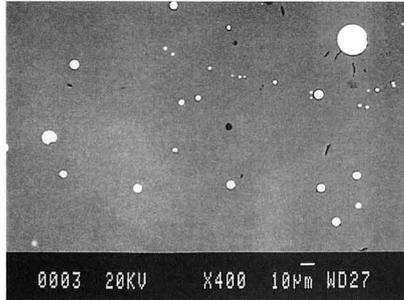


図17c B-3 熔融物の反射電子像

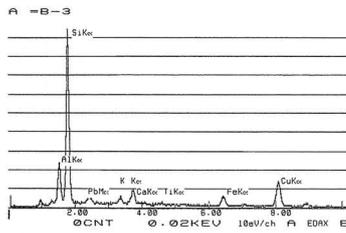


図18a 図17c中のマトリックス部分の成分分析結果

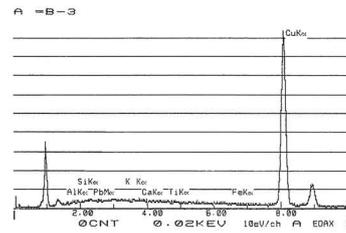


図18b 図17c中の白い粒状部分の成分分析結果

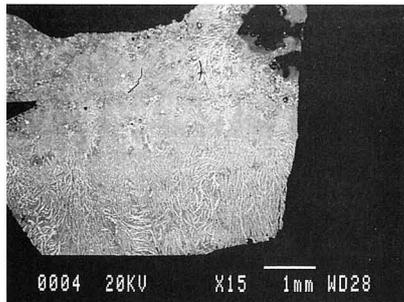


図19a B-4 資料断面の反射電子像

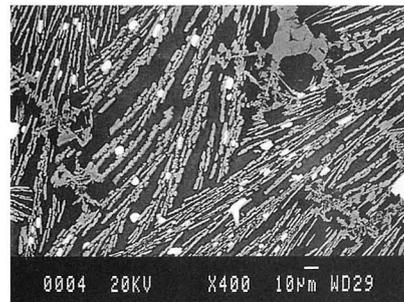


図19b B-4 気孔が多数含まれる層 (図19aの上部) の反射電子像

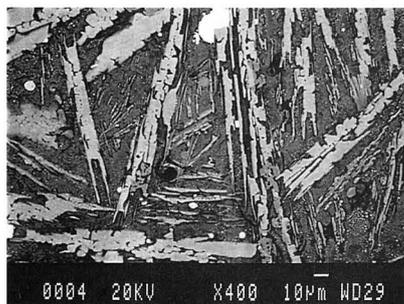


図19c B-4 緻密な板状の層 (図19aの下部) の反射電子像

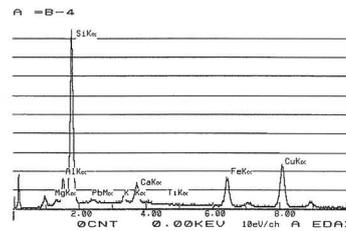


図20a 図19b中のマトリックス部分の成分分析結果

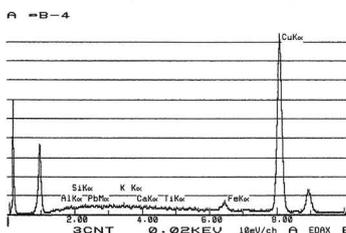


図20b 図19b中の白い粒状部分の成分分析結果

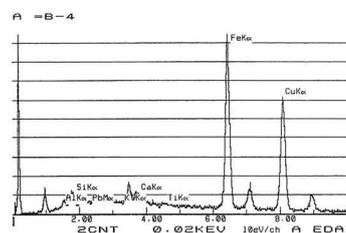
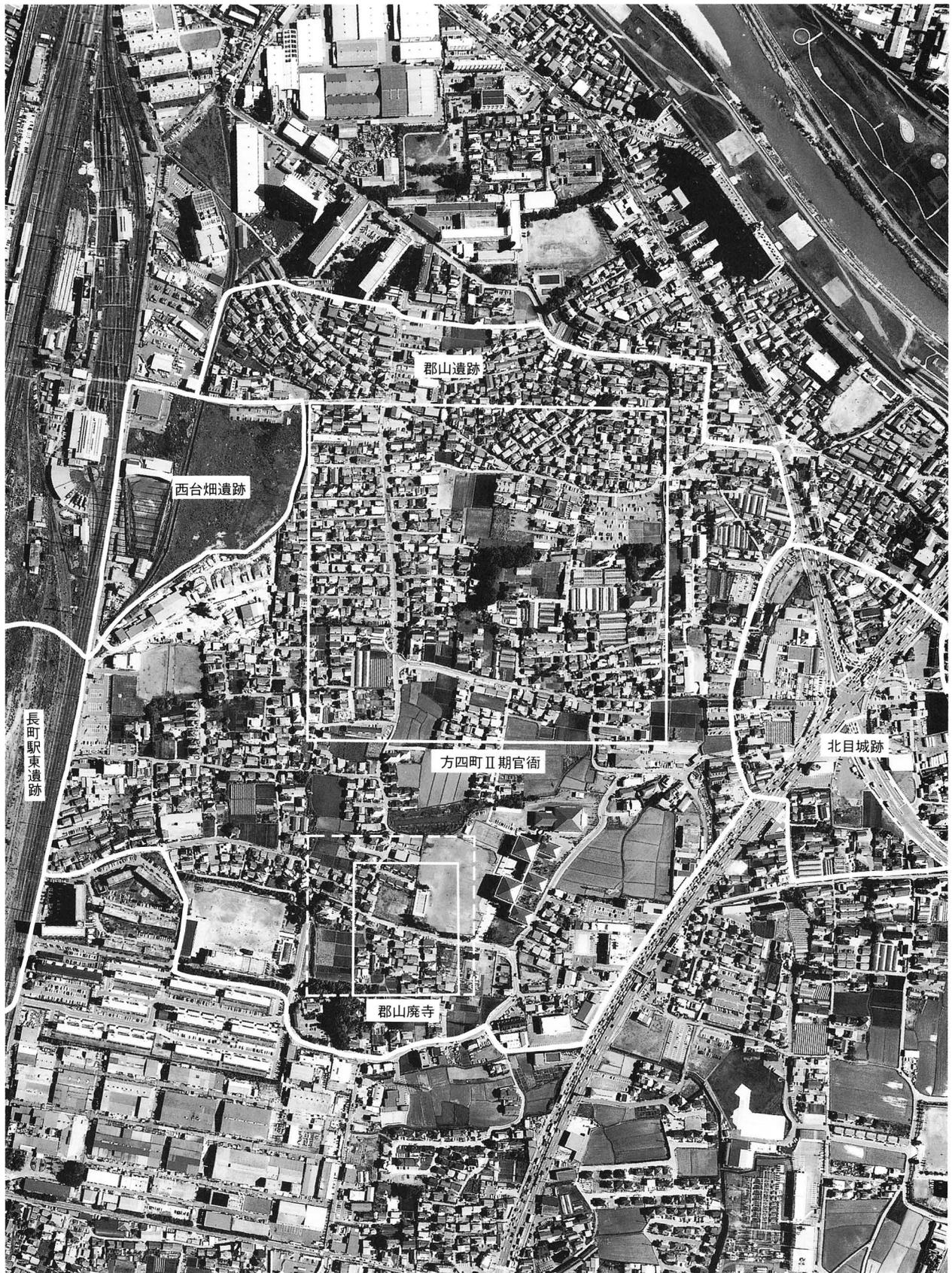


図20c 図19b中の樹状部分の成分分析結果



# 写 真 图 版





図版1 郡山遺跡航空写真



図版 2 第128次調査区全景

図版 3  
第128次調査区 (A区)  
SB1880門跡 (南より)



図版 4  
第128次調査区 (A区)  
SB1880 N1E3 断面  
(東より)

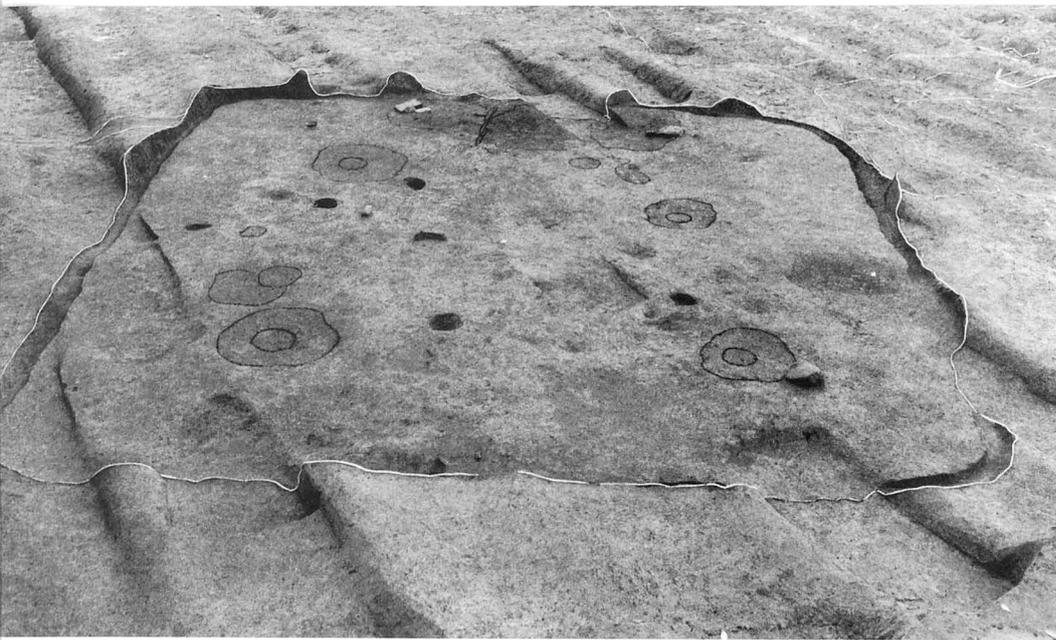


図版 5  
第128次調査区 (A区)  
SB1880 N3E1・2 断面  
(南より)



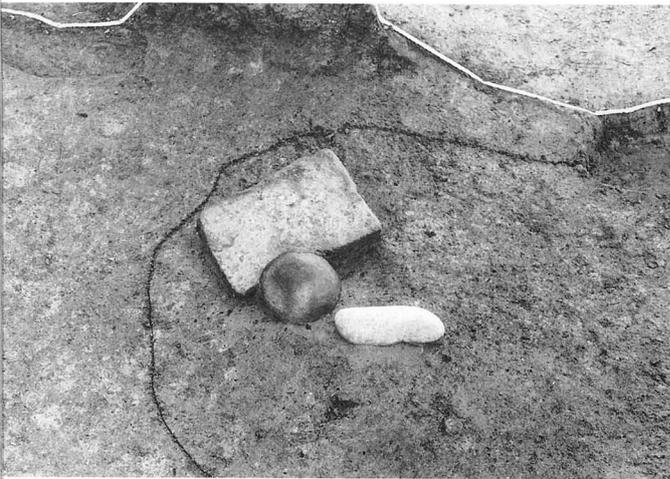
図版 6  
第128次調査区 (A区)  
SD1909  
軒丸瓦出土状況 (南より)  
F-82



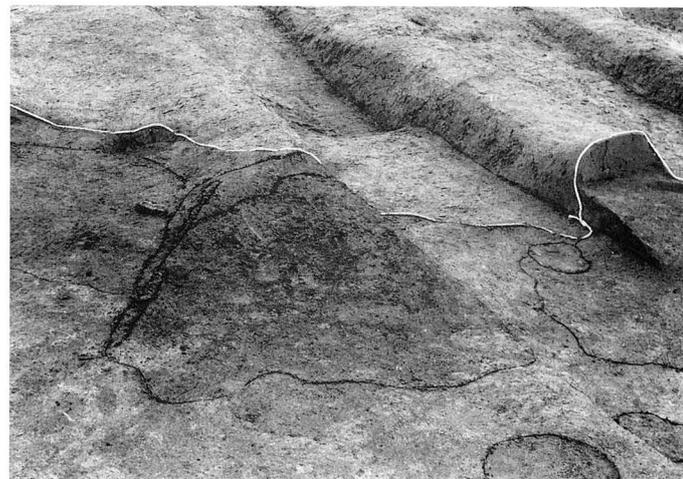


図版7  
第128次調査区（C区）  
SI1851床面全景（北より）

図版8  
第128次調査区（C区）K-237、C-857坏  
SI1851遺物出土状況（北より）



図版9  
第128次調査区（C区）  
SI1851カマド（北より）



図版10  
第128次調査区（C区）  
SI1851遺物出土状況（北より）  
N-95鉄製品



図版11  
第128次調査区（C区）  
SI1851遺物出土状況（北より）  
C-859坏

図版12  
第128次調査区 (D区)  
SI1840床面検出全景  
(北より)



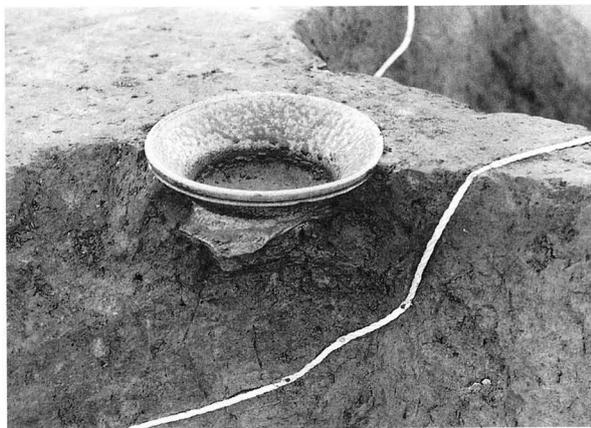
図版13  
第128次調査区 (D区)  
SI1840カマド内遺物出土状況 (西より)  
E-425蓋 C-866甕 (左) C-861甕 (右)



図版14  
第128次調査区 (D区)  
SI1840遺物出土状況 (東より)  
C-861甕 (右)、C-863甕 (左)



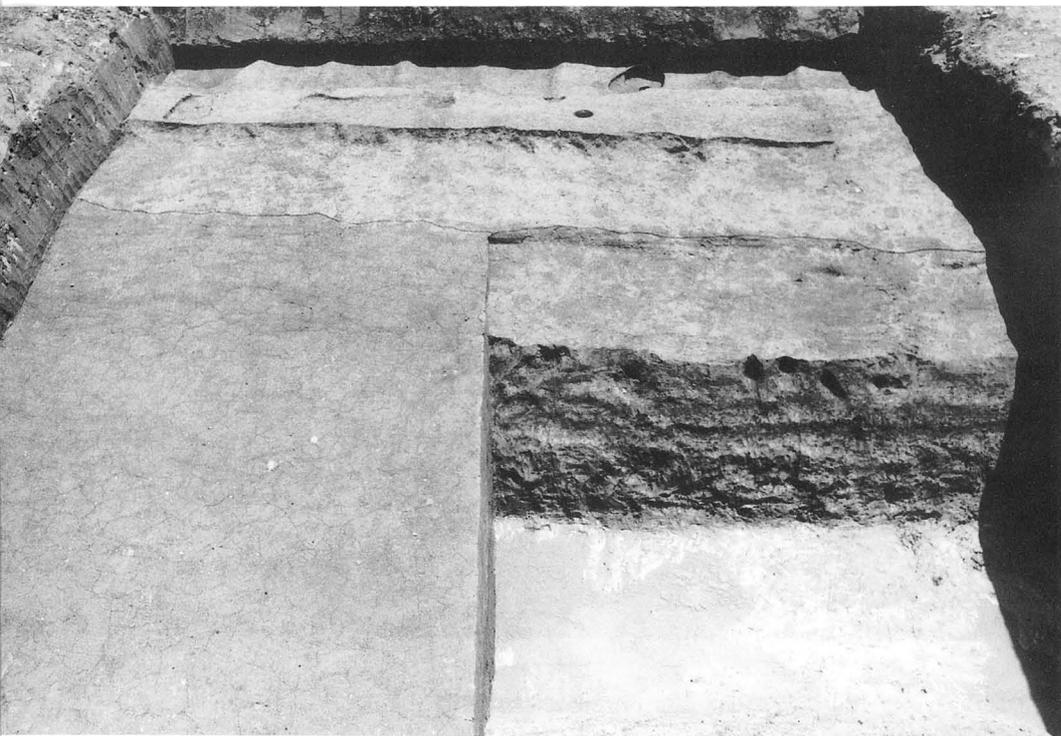
図版15  
第128次調査区 (C区)  
SI1856須恵器甕出土状況  
(東より) E-423甕



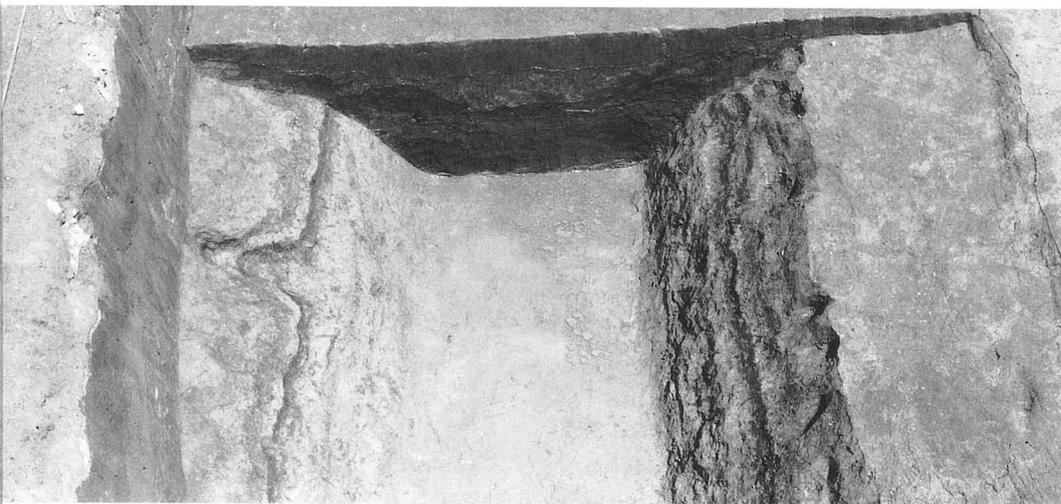
図版16  
第128次調査区 (C区)  
SI1856カマド遺物出土状況  
(北より) C-869高坏



図版17  
128次調査区 (D区)  
SI1856床面  
遺物出土状況 (南より)  
C-858坏



図版18  
第125次調査区  
全景（西より）



図版19  
第125次調査区  
SD1826全景（南より）

図版20  
第126次調査区（A区）  
全景（南より）



図版21  
第126次調査区  
作業風景





図版22  
第126次調査区  
SA1785検出状況北側  
(南より)



図版23  
第126次調査区  
SA1785検出状況南側  
(南より)



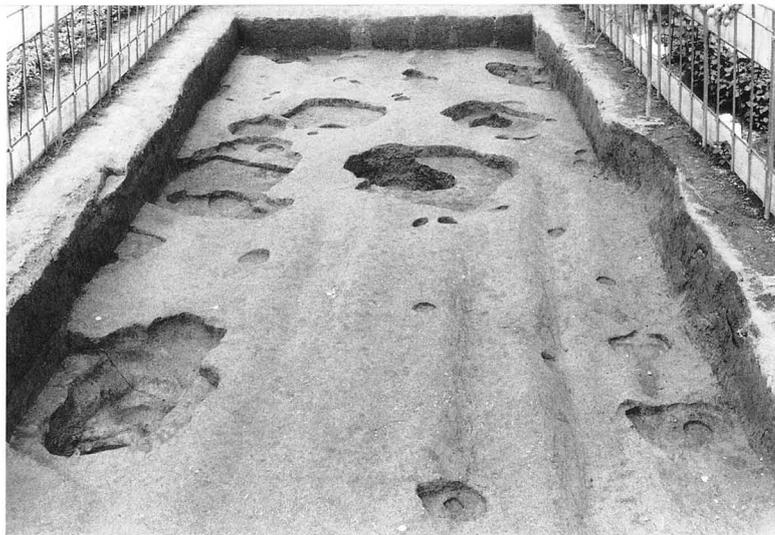
図版24  
第126次調査区  
A区・全景 (南より)

図版25  
第126次調査区  
C区・全景 (南より)



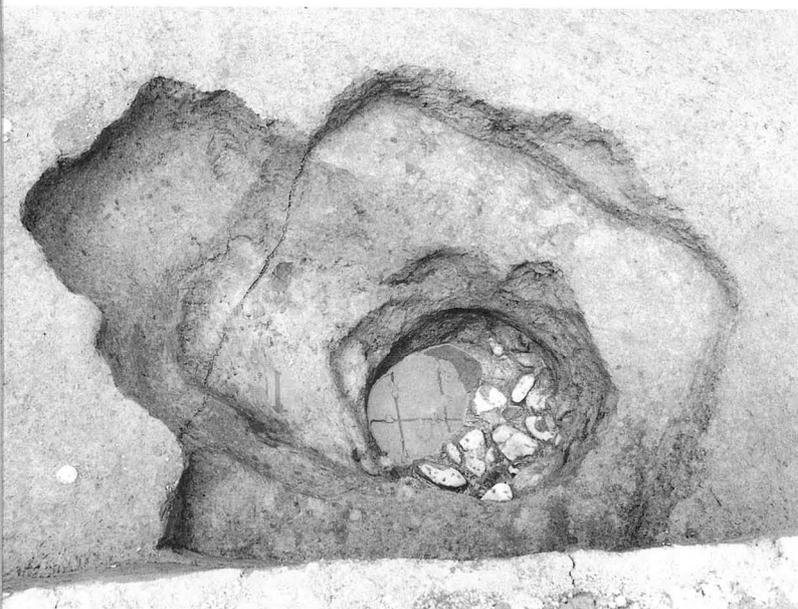
図版26  
第126次調査区  
B区・全景 (西より)





図版28  
第127次調査区  
西部全景（東より）

図版27  
第127次調査区  
全景（西より）



図版29  
第127次調査区  
SB1800 N 1 W 1  
柱穴と抜き取り穴・東（南より）



図版30  
第127次調査区  
SB1800 N 1 E 1  
柱穴（南より）



図版31  
第130次調査区  
全景（西より）



図版32  
第129次調査区  
全景（北より）

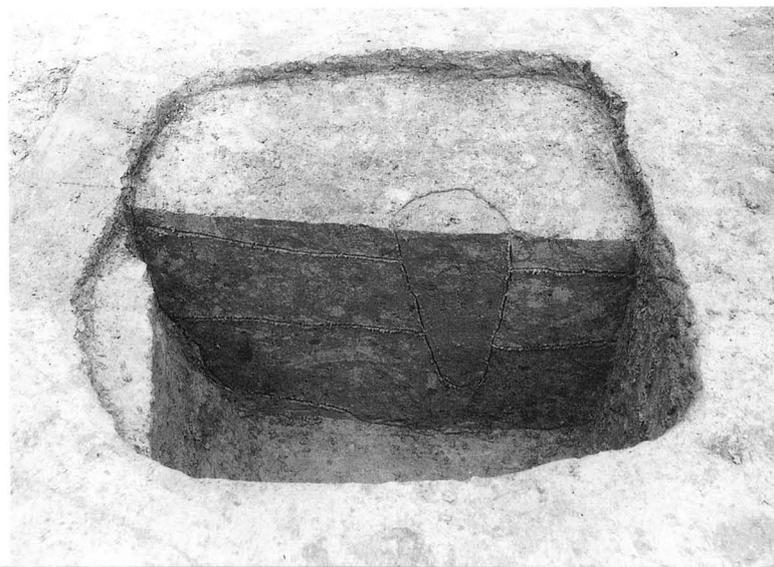


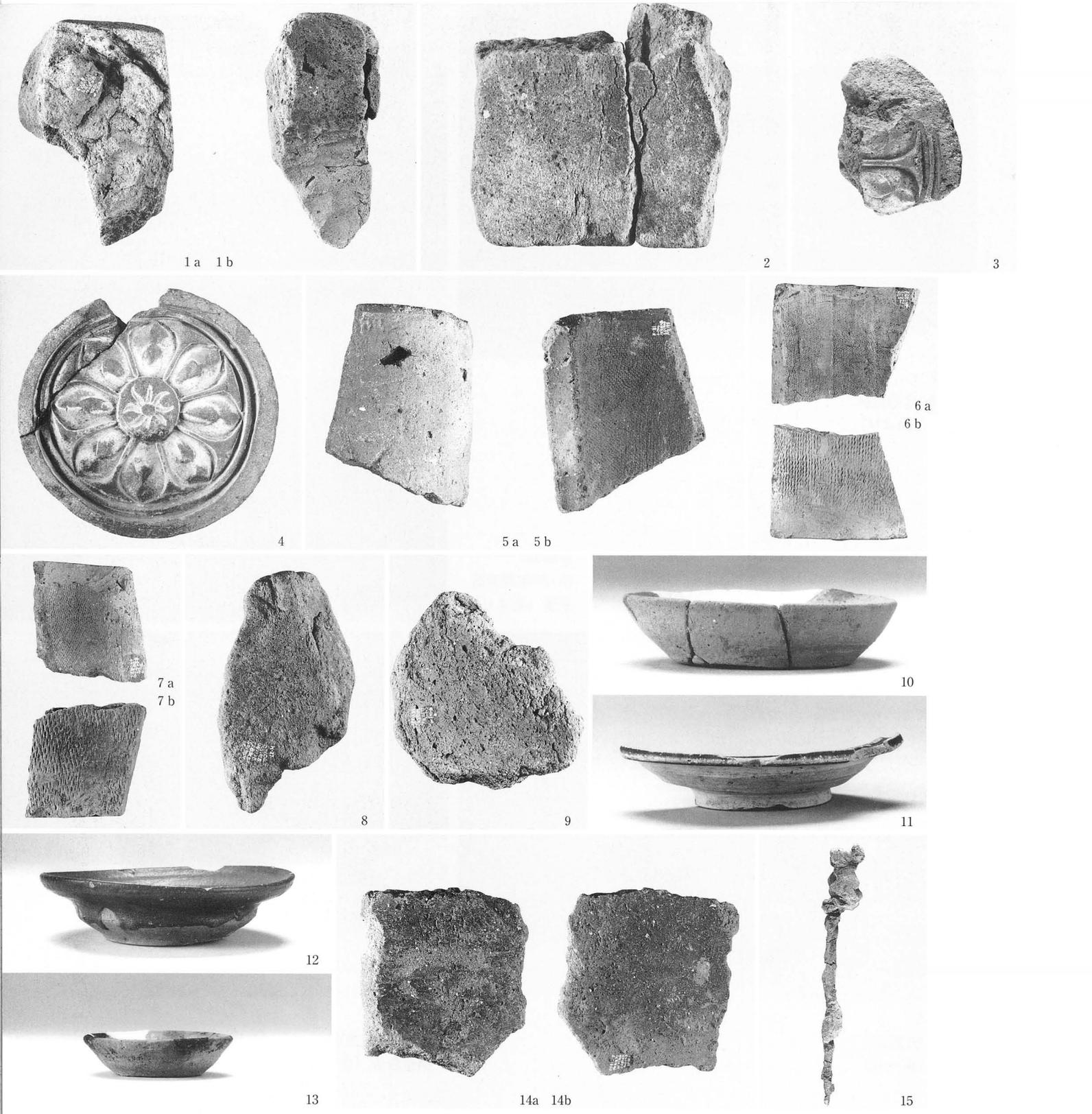
図版33  
第131次調査区  
全景（東→北）



図版34  
第131次調査区  
南壁断面（北→南）

図版35  
第131次調査区  
SI1923 P. 3 断面  
（南→北）



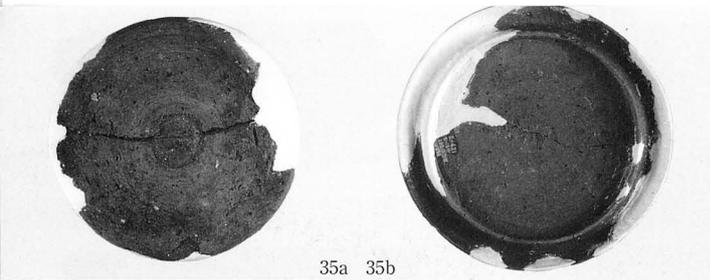


- |      |          |                    |       |           |        |
|------|----------|--------------------|-------|-----------|--------|
| 1 a. | H-23 鷓尾  | SB1880N 2 E 2 B掘り方 | 7 b.  | G-94 平瓦   | SD1857 |
| 1 b. | H-23 鷓尾  | SB1880N 2 E 2 B掘り方 | 8.    | H-27 鷓尾   | SD1857 |
| 2.   | H-22 鷓尾  | SB1880N 2 E 2 B掘り方 | 9.    | G-101 瓦   | SD1857 |
| 3.   | I-85 軒丸瓦 | 遺構検出面              | 10.   | C-855 坏   | SD1857 |
| 4.   | F-82 丸瓦  | SD1909             | 11.   | I-49 皿    | SD1857 |
| 5 a. | F-81 丸瓦  | SD1909             | 12.   | I-50 皿    | SD1857 |
| 5 b. | F-81 丸瓦  | SD1909             | 13.   | C-854 灯明皿 | SX1917 |
| 6 a. | G-91 平瓦  | SD1909             | 14 a. | H-21 鷓尾   | SD1858 |
| 6 b. | G-91 平瓦  | SD1909             | 14 b. | H-21 鷓尾   | SD1858 |
| 7 a. | G-94 平瓦  | SD1857             | 15.   | N-97 不明品  | SD1858 |

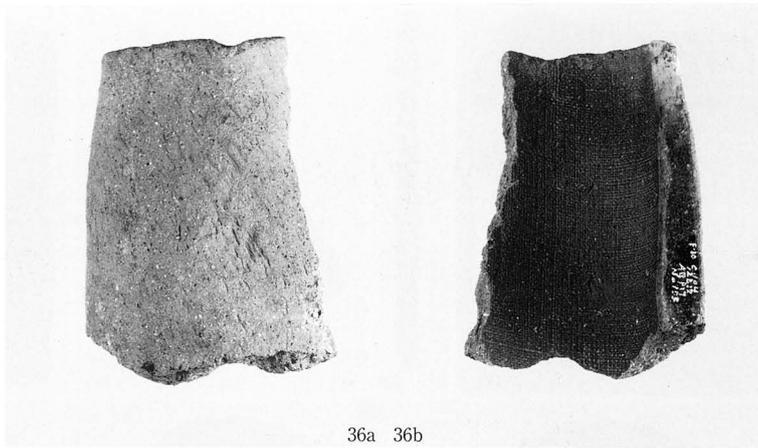


- |               |        |               |        |
|---------------|--------|---------------|--------|
| 16. C-857 坏   | SI1851 |               |        |
| 17. C-859 坏   | SI1851 |               |        |
| 18. K-237 礫石器 | SI1851 | 27. K-236 礫石器 | SI1840 |
| 19. K-239 礫石器 | SI1851 | 28. K-235 礫石器 | SI1840 |
| 20. N-95 不明品  | SI1851 | 29. K-234 礫石器 | SI1840 |
| 21. P-49 羽口   | 攪乱     | 30. C-864 坏   | SI1840 |
| 22. C-866 甕   | SI1840 | 31. C-865 高坏  | SI1856 |
| 23. C-863 甕   | SI1840 | 32. C-869 坏   | SI1856 |
| 24. C-862 甕   | SI1840 | 33. C-858 坏   | SI1856 |
| 25. C-861 甕   | SI1840 | 34. E-423 甕   | SI1856 |
| 26a. E-425 盖  | SI1840 |               |        |
| 26b. E-425 盖  | SI1840 |               |        |

图版37 第128次出土遺物(2)



35a 35b



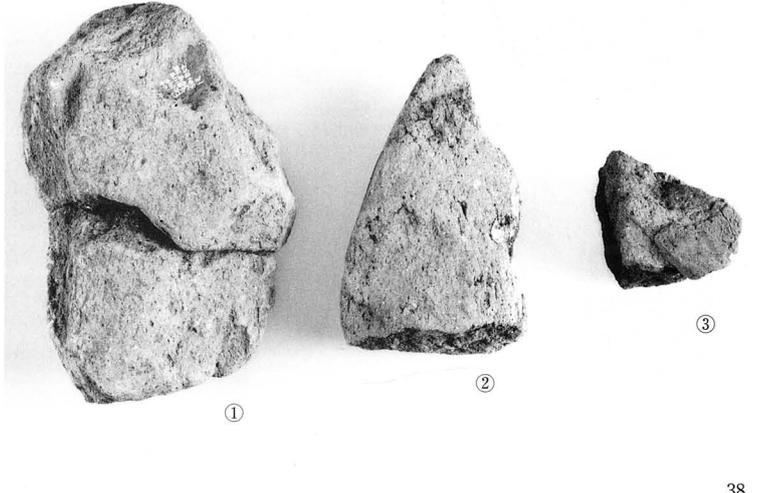
36a 36b



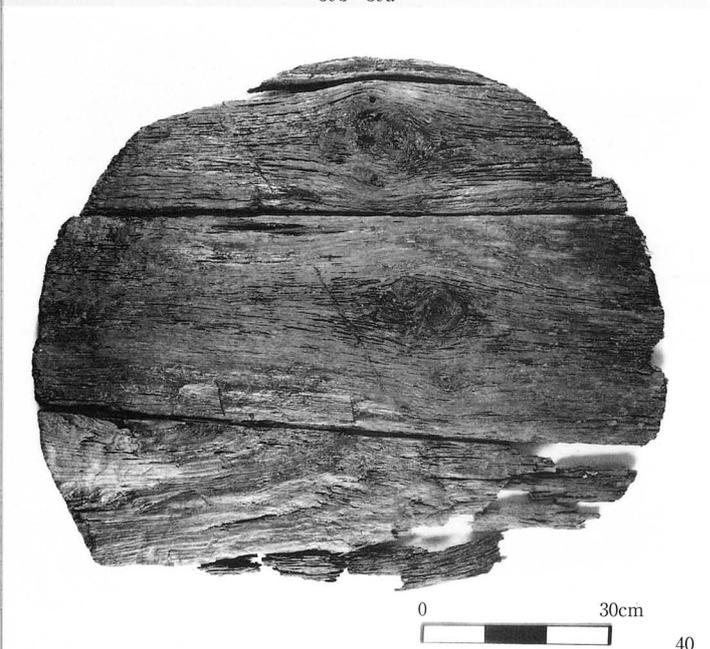
37



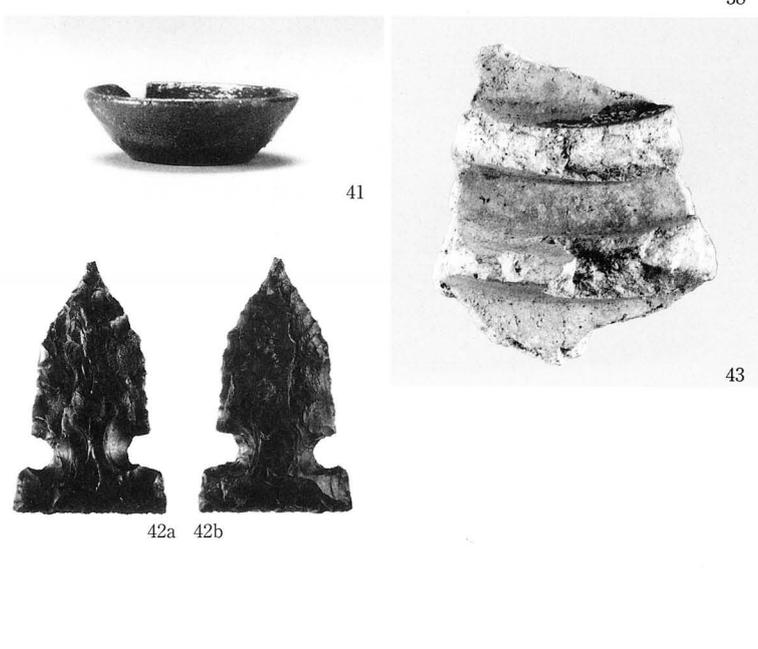
39b 39a



38



0 30cm 40



41

42a 42b

43

- |               |                   |               |        |
|---------------|-------------------|---------------|--------|
| 35a. E-421 蓋  | SD1919検出面         | 41. I-47 灯明皿  | SK1854 |
| 35b. E-231 蓋  | SD1919検出面         | - 第127次 -     |        |
| 36a. F-80 丸瓦  | Pit17             | 42a. K-233 石鏃 | Ⅲ層中    |
| 36b. F-80 丸瓦  | Pit17             | 42b. K-233 石鏃 | Ⅲ層中    |
| 37. C-868 坏   | SI1853            | - 第126次 -     |        |
| 38. ①H-28 鷓尾  | SD1857            | 43. P-47 不明品  | 遺構検出面  |
| ②H-25 鷓尾      | SD1857            |               |        |
| ③H-24 鷓尾      | SD1880N 1 E 4 (新) |               |        |
| 39a. G-100 平瓦 | 遺構検出面             |               |        |
| 39b. G-100 平瓦 | 遺構検出面             |               |        |
| 40. L-16 桶    | SK1854            |               |        |

図版38 第126次・第127次・第128次出土遺物(3)

報告書抄録

ふりがな	こおりやまいせき							
書名	郡山遺跡							
副書名	平成11年度発掘調査概報							
巻次	XX							
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第244集							
編著者名	篠原信彦、長島榮一、工藤信一郎、松本知彦							
編集機関	仙台市教育委員会							
所在地	〒980-8671 宮城県仙台市青葉区国分町三丁目7-1 TEL022-214-8893~8894							
発行年月日	2000年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
こおりやまいせき 郡山遺跡	みやぎけんせんだいし 宮城県仙台市 たいはくくこおりやま 太白区郡山三丁目他	04100	01003	38° 13' 13"	141° 18' 30"	19990517 ~19991217	1,015m <sup>2</sup>	重要遺跡 の範囲確 認調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
郡山遺跡	官衙跡	縄文 ～ 奈良	掘立柱建物跡・材木列 井戸跡・溝跡・土坑 水田跡	弥生土器・土師器 須恵器・瓦・土製品 石製品・鋳滓類・自然 遺物		郡山廃寺南門の発 見		

---

仙台市文化財調査報告書第244集

**郡山遺跡 XX**

—平成11年度発掘調査概報—

2000年3月

発行 仙台市教育委員会

仙台市青葉区国分町三丁目7-1

文化財課 022(214)8893

印刷 株式会社 東北プリント

仙台市青葉区立町24-24

TEL 263-1166

---

